

多賀城跡

序 文

多賀城跡調査研究所は、昭和44年の設立以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査事業と環境整備事業を継続的に実施しています。発掘調査によって古代多賀城の歴史的特質とその価値を解明し、その成果を基に環境整備事業を実施することで、特別史跡多賀城跡附寺跡が多くの人々にとって親しみやすい憩いの場となる史跡公園を目指しています。

令和元年度は10月12日の台風19号により県内をはじめ広域に被害が発生しましたが、発掘調査事業、環境整備事業でも影響を受けました。発掘調査事業では調査区内で倒木が発生したため調査の中断を余儀なくされ、令和2年3月に調査を再開、6月に本書を刊行することとなりました。環境整備事業では造成した法面の崩落が発生したため、緊急に復旧工事を実施しました。

発掘調査事業は第11次5ヵ年計画の初年度の調査として、多賀城跡外郭施設の確認を目的とする第93次調査を実施しました。今回の調査対象地は多賀城跡北西隅の丸山地区で、多賀城跡西辺北部の区画施設及びこれに伴う諸施設等の構造と変遷を確認することが主な目的でした。調査の結果、第Ⅲ期以降の築地塀と西北門が発見され、西北門は西に開く八脚門で、掘立式から礎石式に建て替えられています。従来西門を含め外郭西辺の様相を解明する上で重要な成果となりました。

環境整備事業は、宮城県の総合計画である『宮城の将来ビジョン・震災復興・地方創生実施計画』の重点事業に位置づけられ、「多賀城創建1300年記念重点整備事業」として、令和6年の多賀城創建1300年の記念の年に向けた事業が進行中です。政庁南面地区を対象とした第10次5ヵ年計画の5年目の事業としても位置づけられ、令和元年度は政庁南大路の石垣復元、路面舗装、第1期外郭南門の遺構表示等を行いました。今後も、管理団体である多賀城市と連携し着実に推進してゆきたいと考えております。

本書の刊行にあたり、日頃よりご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会、調査と整備事業に対しご支援を頂いた多くの方々に対し、所員一同感謝を申し上げます。

令和2年6月

宮城県多賀城跡調査研究所
所 長 高橋栄一

目 次

I. 調査研究事業の計画	1
II. 第93次調査	2
1. 調査の目的と経過	2
2. 調査の成果	10
3. 総括	57
III. 第92次調査出土遺物の追加報告	77
IV. 付章	82
1. 関連研究・普及活動	82
2. 組織と職員	87
3. 沿革と実績	88

図版目次

図版1 調査区的位置	3	図版30 SK3392・3393上坑, SD3396清断面図・写真	42
図版2 調査対象地の地形と第17・93次調査区的位置	4	図版31 SK3392上坑出土遺物	43
図版3 調査前の状況	5	図版32 SK3399上坑出土遺物	44
図版4 調査一般公開の様子	7	図版33 北堆1・7層出土遺物	45
図版5 A区層序模式図	11	図版34 南堆1・2層出土遺物	47
図版6 A区調査前の地形と堆積層の分布	12	図版35 第1層出土遺物(1)	48
図版7 第93次調査区近景写真	13	図版36 第1層出土遺物(2)	49
図版8 A区遺構配置図	14	図版37 SB3400A門, SX3388・3390整地層出土遺物写真	50
図版9 A区東西横断面, 南北縦断面	15	図版38 SX3390整地層, SX3389切り通し状遺構, SK3392・3399上坑出土遺物写真	51
図版10 A区平面図	16	図版39 SK3392上坑, 堆積層出土遺物写真	52
図版11 SB3400門, SA3401材木榑平面図	18	図版40 第1層出土遺物写真	53
図版12 SB3400門全景写真	19	図版41 B区平面・断面図, 写真	54
図版13 SB3400門断面図	20	図版42 細弁蓮花文軒丸瓦310A・310Bの相対的順序	58
図版14 SB3400A門検出・断面写真	21	図版43 偏行唐草文軒平瓦620	59
図版15 SB3400A門出土遺物	22	図版44 A区遺構の重複関係	63
図版16 SB3400B門検出・断面写真	23	図版45 A・B期の遺構	64
図版17 A区北半平面図	25	図版46 A・B期南北縦断面	64
図版18 SF220築地層, SX3388・3390・3391整地層, SX3389切り通し状遺構断面図	26	図版47 C・D期の遺構	65
図版19 SF220築地層, SX3388・3390・3391整地層, SD3397清断面図	27	図版48 C・D期東西横断面, 南北縦断面	65
図版20 SF220築地層, SX3388・3390・3391整地層, SD3397清断面写真	28	図版49 E期の遺構	67
図版21 SX3390整地層下層出土遺物	31	図版50 E期東西横断面, 南北縦断面	67
図版22 SX3390整地層下層・上層出土遺物	32	図版51 F期の遺構	68
図版23 SA3401材木榑検出写真	33	図版52 F期南北縦断面	68
図版24 SA3401材木榑, SK3402上坑断面図・断面写真	34	図版53 グリッド別互の出土状況	71
図版25 SX3385・3386・3387・3403整地層検出・断面写真	36	図版54 外郭西門と西門の模式図	71
図版26 SX3385・3386・3387整地層断面図・写真	37	図版55 外郭西辺の全体図	73
図版27 SX3389切り通し状遺構平面・断面図	39	図版56 外郭西辺における遺構の対応関係	74
図版28 SX3389切り通し状遺構写真	40	図版57 第92次調査出土遺物の追加報告(1)	78
図版29 SX3389切り通し状遺構出土遺物	41	図版58 第92次調査出土遺物の追加報告(2)	80
		図版59 第92次調査出土遺物追加報告写真	81

表目次

第1表 多賀城跡調査研究委員会委員	1	第7表 第93次調査出土丸・平瓦の集計	56
第2表 多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画	1	第8表 多賀城跡で検出された八脚門	72
第3表 第93次調査遺構番号一覧	9	第9表 寄柱が検出された築地層	75
第4表 遺物写真の登録番号一覧	55	第10表 図版59の遺物写真の登録番号一覧	81
第5表 第93次調査出土遺物の破片集計(頁以外)	55	第11表 多賀城跡環境整備事業第10次5ヵ年計画	83
第6表 第93次調査出土軒丸・軒平瓦の集計	55	第12表 令和元年度現状変更一覧	83

例 言

1. 本書は、令和元年度に実施した多賀城跡の第93次調査の成果と多賀城跡環境整備事業、関連研究事業、普及活動の概要等および、平成30年度に実施した第92次調査出土遺物の追加報告を取録したものである。
2. 当研究所の発掘調査と環境整備事業については、多賀城跡調査研究委員会における審議と承認に基づいて実施している(第1表)。
3. 測量原点については政庁正殿身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門の中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ1°04′東に偏している。政庁正殿と政庁南門の測量基準点の平面直角座標値は、東日本大震災後(平成24年)に実施した再測量の成果から以下のとおりである。
正殿 世界測地系 X座標:-187968.3530 m、Y座標:13560.4850 m、標高:32.964 m
南門 世界測地系 X座標:-188037.4930 m、Y座標:13559.3150 m、標高:29.799 m
4. 本書における遺構の位置の表記については、測量原点から平面直角座標上の東西南北方向の距離(m)で示している。例:W5=原点から西に5m、S3=原点から南に3m
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖11版』日本色研事業株式会社(1996年)にもとづく。
6. 瓦の分類基準は『多賀城跡 政庁跡 本文編』による。
7. 当研究所の刊行物については、『多賀城跡 政庁跡 本文編』を『本文編』、『多賀城跡 政庁跡 図録編』を『図録編』、『多賀城跡 政庁跡 補遺編』を『補遺編』、『多賀城跡 外郭跡Ⅰ-南門地区-』を『外郭Ⅰ』、『多賀城跡 政庁南面地区-城前官街遺構-遺物編-』を『南面Ⅰ』、『多賀城跡 政庁南面地区Ⅱ-城前官街総括編-』を『南面Ⅱ』、『多賀城施軸陶磁器』を『施軸陶磁器』と略記する。また、『宮城県多賀城跡調査研究所年報』については『年報2010』などとし、複数の年報の場合は『年報1983・2006』、『年報2011～2014』などと記す。
8. 本調査で得た資料については、宮城県教育委員会で保管している。
9. 本書の内容の一部については、『第93次調査現地説明会資料』、『令和元年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』、『第46回古代城柵官街遺跡検討会資料』等で紹介しているが、本書の内容が優先する。
10. 本書の整理は、遺物を下山貴生・村上裕次・柴田とみ子・菊地摩耶、遺構を村上・下山・佐竹祐莞が担当した。
11. 本書の作成にあたっては所員で討議と検討を行い、Ⅰ・Ⅲを村上、Ⅱを村上・下山、Ⅳを白崎恵介・高橋透・村上が執筆し、村上・下山が編集した。

調査要項

多賀城跡第93次調査の発掘調査・整理体制、調査期間、調査面積等は下記のとおりである。

調査主体	宮城県教育委員会(教育長 伊東昭代)
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所(所長 高橋栄一)
調査員	高橋栄一・白崎恵介・村田晃一・村上裕次・高橋 透・下山貴生
調査期間	令和元年5月22日～令和2年3月27日
調査面積	約300㎡
調査参加者	市川昌暎・伊藤竜子・氏家雅夫・岡本敦子・奥 清志・佐藤有佳利・鈴木幸夫・升 孝司 (多賀城跡調査研究所臨時職員) 五十嵐健太・内田敦士・橋本洋一郎・渡谷侑奈・傍島健太・田中 蓮・福井 颯・望月美紅・ 谷津愛奈・吉田 大・渡邊彩佳(東北大学)、小野歩実(仙台白百合学園高校)
整理参加者	柴田とみ子・菊地摩耶・佐竹祐莞(多賀城跡調査研究所臨時職員)

【表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。表紙写真:南東より撮影【登録番号:Z7778】

I. 調査研究事業の計画

当研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査と環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査などの事業を、多賀城跡調査研究委員会の審議と承認のもとで5ヵ年計画を立案して行っている(第1・2表)。今年度、当研究所は、多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画の初年次目の事業として丸山地区を対象に第93次調査、政庁南面地区を本格的に整備する環境整備第10次5ヵ年計画5年次目の事業として同地区南半の基盤整備を実施した。

なお、第94次調査以降については、多賀城市が多賀城創建1300年記念に併せて整備を予定している政庁北側の政庁地区北方において、整備計画が具体化し発掘調査が急務となったことから、多賀城跡調査研究委員会での審議と承認を経て、政庁地区北方の調査を実施する予定である(第2表)。

以下、本書では主に第93次調査の内容を記すとともに、その他の今年度の事業の概要については付章で述べる。

氏名	所属	専門分野
委員長 佐藤 信	東京大学名誉教授	古代史学
副委員長 阿子島 香	東北大学大学院教授	考古学
委員 小野 健吉	和歌山大学教授	庭園史学
委員 熊谷 公男	東北学院大学名誉教授	古代史学
委員 黒田 乃生	筑波大学教授	造園学
委員 櫻井 一弥	東北学院大学教授	建築デザイン学
委員 佐々木由香	明治大学黒耀石研究センター	植物学
委員 藤井 恵介	東京大学名誉教授	建築史学
委員 古瀬奈津子	お茶の水女子大学基幹研究院教授	古代史学
委員 松村 恵司	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	考古学

第1表 多賀城跡調査研究委員会委員(任期：平成31年4月1日～令和3年3月31日)

年度	回数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成31 (令和元)年	93次	外郭北西隅(丸山・新西久保地区)	1,000㎡	外郭北西隅の検討
令和2年	94次	政庁地区北方	600㎡	政庁地区北方の検討
令和3年	95次	政庁地区北方	600㎡	政庁地区北方の検討
令和4年	96次	政庁地区北方	600㎡	政庁地区北方の検討
令和5年	97次	政庁地区北方	500㎡	政庁地区北方の検討

第2表 多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画(令和元年度委員会承認)

II. 第93次調査

1. 調査の目的と経過

(1) 目的

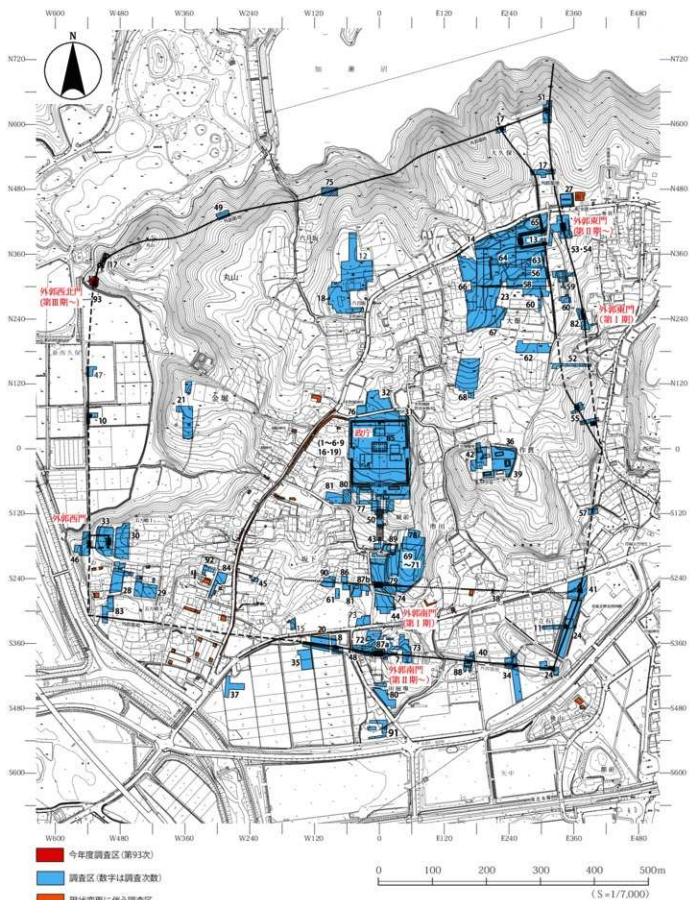
多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画は、外郭西辺の区画施設における調査資料の蓄積を目的としており、初年次目に当たる今年度は外郭北西隅の丸山地区を対象とした(図版1)。なお、外郭西辺については、第10次5ヵ年計画で調査を予定していたが(『年報2014』)、多賀城市が計画する政庁第Ⅱ期外郭南門の復元に伴う周辺の調査が急務となったことから繰り越しとなっていた。

外郭西辺の調査は、北西隅の丘陵部(第17次)、西辺中央の低湿地部(第10・47次)、西辺南部の丘陵部(第33・46次)の5箇所で開催されている。第17次調査では、北辺と西辺の築地塼、掘立柱建物1棟、建物基壇2基が検出された。築地塼には2度の改修が認められ、時期は政庁第Ⅲ期以前(以下、政庁遺構期の記述には政庁を省略する)と第Ⅲ期、第Ⅳ期、掘立柱建物は1度建て替えられ第Ⅲ期以降、建物基壇も第Ⅲ期以降である(『年報1972』)。掘立柱建物と建物基壇はいずれも築地塼に伴う櫓と考えられる(古川1979)。第10・47次調査では、材木塼、掘立柱建物等が検出された。材木塼は西辺区画施設で、2度の改修が認められ、時期は第Ⅲ期以降、掘立柱建物は材木塼に伴う櫓と考えられる(『年報1970・1984』)。第33・46次調査では、外郭西門とそれに伴う築地塼等が検出された。西門は八脚門で、構造は掘立式と礎石式があり、時期によって異なる。変遷は、①掘立式で第Ⅱ期に相当する8世紀後半から8世紀末頃、②礎石式で火災に遭っており、第Ⅱ期から第Ⅲ期に相当する8世紀末頃から9世紀中頃以前、③位置を東に35m移動し、掘立式で第Ⅲ期から第Ⅳ期に相当する9世紀中頃から9世紀後半、④位置を①・②の場所に戻し、礎石式で第Ⅳ期に相当する9世紀末を中心とし10世紀前半以前である(『年報1978・1985』)。なお、外郭南門の総括報告書では、①～④の西門の時期を、再検討中の遺構期としてそれぞれ第Ⅰ～Ⅳ期としている(『外郭Ⅰ』第16表、p.186)。

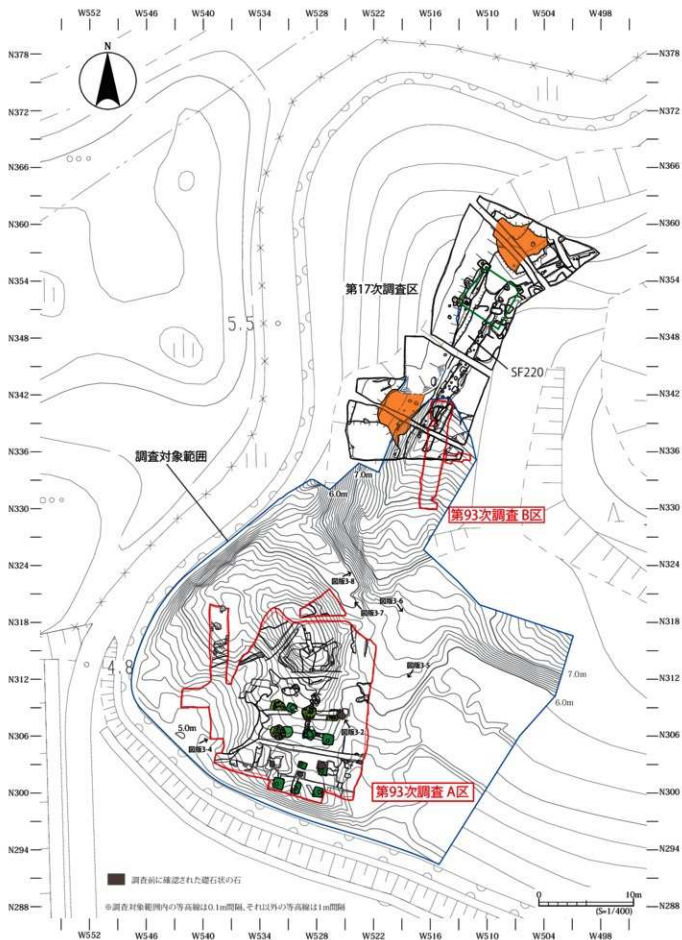
これまでの調査では、第Ⅲ期以降の状況について明らかになってきた一方で、第Ⅱ期以前の区画施設が第46次調査以外検出されておらず、この時期の外郭西辺の様相が不明である。また、外郭西辺では丘陵部は築地塼、低湿地部は材木塼と、立地により区画施設の構造の異なることが判明しているが、両区画施設の接続部分の構造と地形の状況が不明である。そこで、第93次調査では、外郭西辺が検出されている第17次調査区の南側隣接地を対象に、A)区画施設の変遷と各時期の構造を確認すること、そして、調査対象地で礎石状の大型の石が認められることから、B)区画施設に伴う櫓等の施設を把握することを目的とした。

(2) 経過

〔調査前の地形〕対象地は多賀城跡北西部の丸山地区に所在し、外郭北辺と西辺が接続する多賀城跡北西隅の南側隣接地に位置する(図版1)。直線距離では政庁正殿から北西約617m、外郭西門から北約480mで、政庁正殿の多賀城原点からは北に299～342m、西に514～544mの位置にあたる。現況



図版1 調査区的位置



図版2 調査対象地の地形と第17・93次調査区の位置



1. 調査対象地の伐採前の状況（南西から） [Z7914]



2. 礎石状の石 (S83400B 北東隣掘穴) (南東から) [Z7917]



3. 調査対象地の全景（南西から） [Z7918]



4. A区（南西から） [Z7919]



5. A区南部（北東から） [Z7920]



6. A区東側（北西から） [Z7921]



7. 土手状の高まり北側の沢状地形（南東から） [Z7922]



8. B区（南西から） [Z7923]

図版3 調査前の状況

は雑木林である。立地は東から西方向に延びる丘陵の先端部で、北・西・南側には低湿地が広がる(図版3-1・3)。調査対象範囲の中央やや西寄り(図版6:N312~321・W525~537)には、N317・W530付近を頂部とする土手状の高まりが認められた(図版3-4)。これより北側は、北西から南東方向の沢状地形(図版3-7)に分断されるが、さらに北側には北東方向に延びるわずかな高まりを確認できる(図版3-8)。一方、土手状の高まりはN309付近で不明瞭になり、その南側には、東西(W525~534の範囲)、南北(N300~309の範囲)ともに9m四方の東・西・南よりも一段高い緩やかな勾配の平坦面が広がっている(図版3-4・5)。このような一定の面積がある平坦面はこの範囲でしか確認できない。ここには、礎石状の大型の石が4個分布していたが(図版2)、配置に規則性は認められなかった。**【対象地と調査区の設定】** 調査開始前の準備として、トータルステーションを用いた対象範囲の現況の測量図を作成した(図版2)。

調査の開始は5月22日である。最初に、グリッド設定と昨年度に移動した基準点に加えて追加の基準点を設定した。次に、1972年度の第17次調査区の南側と、第17次調査区に一部重複した位置の2箇所に調査区を設定した。前者については、調査範囲を限定するため、5月30日から6月4日の期間に、N306・W540とN306・W537からN318・W540とN318・W537、N309・W543とN312・W543からN309・W531とN312・W531の範囲に、幅2mのトレンチを十字形に設定した(図版4-1)。その結果、W537より西側については、浅い表土の直下で岩盤が認められ遺構は少ないと考えられたため、それより東側の土手状の高まりと大型の石の分布する範囲に調査区を設定し、トレンチと合わせてA区とした。後者については、第17次調査区の位置を確認して座標値の補正を行うため、地形や調査写真から推定される第17次調査区の位置に南北方向の調査区を設定し、これをB区とした。6月5日から重機による表土除去を開始して、A・B区ともに6月6日に終了した。

【A区北部の築地塼と切り通し状遺構の精査】 表土除去後の遺構検出作業において、築地塼と予想していたA区北部の土手状の高まりで明確な積土が確認できないため、ベルトを設定して周囲を平面的に掘り下げていった。その結果、A区で最も標高が高いN315~321・W528~534の高まり部分が、古代以降に周辺を削った際に生じた土砂により形成されていること、南西から北東方向に外郭西辺を切り通す切り通し状遺構が存在することを確認した。この遺構の規模と方向を明らかにするため、A区の北側を東西5m、南北2.7m拡張し、さらに拡張した範囲を含む7箇所ですり取りによる断面確認調査を実施したところ、3時期の築地塼と切り通し状遺構の南・北壁の立ち上がりを確認した。築地塼本体は後世に大きく削平されて残存状況が悪いこと、切り通し状遺構には底面に自然堆積層が形成されており、a期築地塼を切り通し、b期築地塼の基礎整地層に覆われていることが明らかとなった。

【A区南部の門の精査】 高まりが認められないA区のN309より南側の平坦面においては、表土直下に自然堆積層が広範囲に分布していたため、最初にそれらの掘削を行った。7月3日には、A区南端において整地層とその上面で柱穴の一部を検出した。その後、N306・W527地点で検出した柱穴が長軸1mと大型であったことから、これらの柱穴が外郭西辺に伴う施設によるものの可能性が考えられた。7月18日には、A区中央付近で根石を多く含む礎石据穴を4個検出した。棟通りにも位置しており、配置や柱間からこれらは礎石式の八脚門を構成するものと推定された。また、1箇所ですり取りと掘



1. 調査の様子（南西から） [Z7925]



2. 調査の様子（北から） [Z7927]



3. 考古学実習（遺構精査）の様子1（南東から） [Z7930]



4. 考古学実習（測量）の様子2（北から） [Z7933]



5. 多賀城跡調査研究委員会での現地指導（東から） [Z7938]



6. 現地説明会の様子 [Z7939]



7. 台風19号による倒木被害の状況1（南から） [Z7940]



8. 台風19号による倒木被害の状況2（北西から） [Z7941]

図版4 調査・一般公開の様子

穴に平面的な重複があり、掘穴の方が新しいことを確認した。礎石式の門が発見されたことで、検出していた柱穴が礎石式の八脚門に建て替えられる前の掘立式の八脚門である可能性が出てきた。そこで、再度A区南壁際の精査を行ったところ、柱穴の可能性のある遺構の一部を2箇所検出した。そのため、既に一部を検出していた柱穴を含めてこれらの全体を確認することを目的に、南壁の中央部分を東西6m、南に1m拡張し、その結果、3個とも長軸1m以上の隅丸方形の柱穴であることが判明した。さらに、9月3日には、中央間の位置で2個の柱穴を検出し、A区中央から南端にかけて計9個の柱穴を確認した。いずれの柱穴の掘方埋土にも焼土や炭化物が含まれていた。これら以外の柱穴については、想定位置に礎石掘穴や立木が所在しており確認できなかった。9個の柱穴は、配置や柱間から八脚門を構成するものと考えられ、門は掘立式から礎石式へ建て替えられていることが判明した。

これらの成果をふまえ、9月12日にドローンによる空中写真を撮影した。そして、柱穴については2箇所半載を行い、このうち1箇所の断面で柱穴に壊された、堆積土に焼土と炭化物を多量に含む土坑があることを確認した。礎石掘穴についても2箇所半載を行い、このうち1箇所は、想定される掘立式八脚門の柱穴の位置に所在した掘穴を対象とした。その結果、掘穴よりも古い柱穴を確認し、掘穴の位置と重複して平面検出できなかった柱穴については、その下層に存在することが想定できた。

〔A区南部の整地層の精査〕A区南部には整地層の分布が認められた。この整地層の規模と時期、そして旧地形を把握するため、掘立式八脚門の柱穴を避けた南東と南西で南壁に平行した断ち割り調査を行った。その結果、自然堆積層を挟んで3枚の整地層が認められること、整地層が分布する範囲の旧地形については、南壁にかけて急傾斜することが判明した。

〔B区の調査〕A区の調査と並行して7月18日に実施し、中央付近で第17次調査区の南壁と断面観察用ベルトを確認した(図版2)。さらに、位置を確定させるため拡張区を設け、第17次調査区南東隅を検出した。

〔台風19号被害と調査の中断〕9月後半には略図による平面図、築地塀やA区北部の各遺構の断面図を作成した。そして、10月9・10日に多賀城跡調査研究委員会で調査内容を報告し、その審議を経て、調査成果に関する指導と承認を受けた(図版4-5)。それを踏まえて10月10日に調査成果を報道機関に公表した。現地説明会については、当初は10月12日に開催する予定であったが、当日は台風19号が県内に接近し荒天の予報であったため、10月14日に変更した。なお、台風19号通過による強風のため、A区内に4本の倒木被害が発生した。木は幹の径が30～50cm、高さ10～20mで、門が検出されたA区の中央から南部の範囲に根が持ち上がった状態で倒れていた(図版4-7・8)。そのため、説明会当日は雨天ではなかったが、安全面から現地での公開を中止し、急速、東北歴史博物館の研修室を利用して行った(図版4-6)。参加者は88名である。

当初は10月末までに調査記録の作成や調査区の埋め戻しを終了させる予定であったが、倒木の影響でそれらの作業を行うことが出来なくなった。そのため、11月6日までは倒木の影響がないA区北部の補足調査と記録作成、遺構の養生、B区の記録作成を行い、A区北部とB区については埋め戻し以

外の作業を終了した。それ以降は調査再開までの間、室内整理を実施した。

【調査の再開】調査を再開したのは、倒木の除去が終了した令和2年3月2日である。A区の倒木箇所
の平面検出、断面の検討を行い、掘立式八脚門の北西隅柱と礎石式八脚門の北妻棟通りの掘穴の全
体を検出した。同じく立木のため未確認であった掘立式八脚門の西側柱列南から1間目の柱穴につい
ては、倒木後の精査においても検出することが出来なかった。これは、倒木の根入りが80～90cmと深
く、倒れた際に木の根が持ち上がり柱穴が損壊したためと考えられる。また、掘立式八脚門の柱穴や礎
石式八脚門の掘穴、最も古い築地塀の基礎整地層よりも古い、南北方向と東西方向の材木塀を新たに
検出した。これらは位置や方向から接続するものと推定され、掘方埋土や材痕跡には築土や炭化物が
認められた。この材木塀については、断ち割りや柱穴・掘穴の壁面で断面を検討し、写真撮影、断面
図作成を行った。この他、断ち割りを実施していた礎石式八脚門の北妻棟通りの掘穴、A区東壁や東
西ベルトの写真撮影、断面図作成、A区南部の平面図作成を実施し、予定していた作業を3月20日に
終了した。そして、3月23日には当研究所の旧所員らによる現地確認が行われ、3月24日に土嚢を
用いた遺構の養生と器材の撤収、3月25日から重機による埋め戻しを実施し、3月27日に一切の作
業を終了した。

【記録の方法】写真記録には全てデジタルカメラ(Nikon製D7000:1690万画素)を使用した。遺構の
写真についてはAdobe Bridgeで色調と歪み補正後にTIFF形式で保存した。空中写真撮影にはドロー
ン(DJI製PHANTOM3 PROFESSIONAL)を使用し、JPEGで保存している。平面図、断面図につい
ては、縮尺1/20で作成した。図面の作成にあたって、丸山地区に埋設された「丸山」、「丸山N」
の基準点を用い、トータルステーション(ソキア製SET530RS)による3m四方のグリッドを設定
した。遺構番号には3385～3403番を使用し登録している(第3表)。

No.	遺構	No.	遺構
3385	SX 整地層	3395	SK 土坑
3386	SX 整地層	3396	SD 溝
3387	SX 整地層	3397	SD 溝
3388	SX 整地層	3398	SD 溝
3389	SX 切り通し状遺構	3399	SK 土坑
3390	SX 整地層	3400	SB 門
3391	SX 整地層	3401	SA 材木塀
3392	SK 土坑	3402	SK 土坑
3393	SK 土坑	3403	SX 整地層
3394	SK 土坑		

第3表 第93次調査 遺構番号一覧

【その他】調査中の令和元年12月14日には令和元年度宮城県遺跡調査成果発表会、令和2年2月22日
には第46回古代城柵官衙遺跡検討会で調査の途中経過を報告した。なお、令和元年7月31日には
仙台白百合学園高校の生徒1名、8月20日から8月29日にかけては、東北大学連携大学院考古学実
習の一環として東北大学生11名が調査に参加している(図版4-2～4)。

2. 調査の成果

(1) A区

1) 調査区の地形と層序

①地形

第93次調査区が所在する丸山地区の地形は、多賀城跡が立地する丘陵の西端の尾根と斜面、そして北・南・西から入る大小の沢で構成されている(図版1)。第93次調査区は、その北西隅の西側に張り出す丘陵の先端部に位置する。A区の地形は、巨視的には北東から南西ないし北から南方向に標高を下げながら傾斜する緩斜面であるが、微視的には北側に北西から南東方向、南端に南西から北東方向の沢状の地形があり、緩斜面の中にも細かな凹凸が認められる(図版2)。

現況での標高は、最も高い調査区北西部(N317・W530)で7.3m、最も低い南西部(N306・W539)で5.1m、高低差は2.2mである(図版6)。一方、地山面の標高は、最も高い調査区北西部(N319・W529～533)で6.5m、南壁西端で4.5m、南壁東端で4.2m以下であり、高低差は2.3m以上である。

②層序

基本層序は3層に大別され、この間には多くの堆積層が認められた。堆積層は、調査区の一定の範囲に分布するが全域ではなく、分布範囲が異なるものについては、その順序について確実に把握することが出来なかった。そのため、これらについては基本層序に含めず、また遺構でもない「堆積層」として扱い記述する。なお、堆積層は、土手状の高まりがあるN312より北側と、N312より南側に分布するものに大別できることから、前者を「北堆積層」、後者を「南堆積層」と呼称する。両者には複数の堆積層を確認しており、記述にあたっては煩雑さを避けるため「北堆1層」、「南堆1層」と省略する。基本層と各堆積層、遺構の層序と遺構確認面については、図版5に模式図で示した。

A. 基本層序

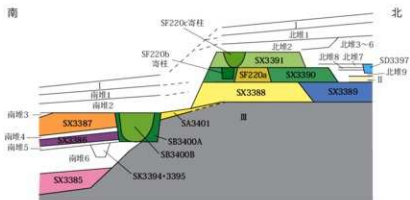
第I層:現代の表土で、厚さ10～40cmである。

第II層:灰白色火山灰層である。北西部(N315・W534付近)に分布し、厚さ22cmである。

第III層:地山で、調査区南壁西側の深掘り部分では岩盤小礫を多量に含む褐色(7.5YR4/4・4/6)粘土質シルト、それ以外は岩盤である。岩盤には大きく2種類があり、調査区北壁のW531と南壁のW534を結んだ線より西側は非常に硬質、それより東側は軟質である。

B. 堆積層

〔北堆積層〕9層あり、全て第I層と第II層の間に堆積する(図版5)。いずれの層にも岩盤由来の小礫・礫が含まれ、特に北堆1層ではそれらを多量に含む。なお、北堆2・3層と北堆4・5層は分布範囲が異なりそれらの新旧関係を確認することは出来なかった。そのため、これら4層については便宜的に層番号を付けている。分布では、北堆1～3・6～9層が現況で最も標高が高いN317・W530周辺で認められる(図版6)。層の厚さは北堆1・6層において最大で40cm以上となり、それ以外は24cm以下である。



図版5 A区 層序模式図

北堆1層：にぶい黄褐色(10YR5/3) 砂質シルトで、古代以降の人為的な盛土である。調査区より北側、あるいは調査区のW525より東側が掘削・削平された際に生じた土ないし礫に由来すると推定される。厚さは20～50cmで、特にN315・W528からN319・W532付近で40～50cmと厚い。この範囲は土手状の高まりの範囲と一致しており、この高まりは北堆1層の堆積状況を反映したものと考えられる。

北堆2層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルトで、厚さ16cmである。

北堆3層：明褐色(7.5YR5/6)砂質シルトで、厚さ24cmである。

北堆4層：褐色(10YR4/6)砂質シルトで、厚さ22cmである。

北堆5層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルトで、厚さ13cmである。

北堆6層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルトで、厚さ20～42cmである。

北堆7層：灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトで、厚さ10～24cmである。

北堆8層：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトで、厚さ10cmである。

北堆9層：褐色(7.5YR4/6)砂質シルトで、厚さ12～18cmである。

〔南堆積層〕 大別6層、細別25層ある。整地層との重複関係により大別した。この中で一定の範囲に分布する層については単独で層番号を付け、それ以外の標高が低い部分に局所的に分布するものについては、複数の層をまとめて1つの大別層として扱うこととした。南堆1～3層は第I層とSX3387整地層との間、南堆4層はSX3387整地層とSX3386整地層との間、南堆5・6層はSX3386整地層とSX3385整地層との間に堆積する(図版5)。また、南堆6層上面でSK3394・3395土坑を確認した。分布では、南堆1層が広範囲に分布するが、それ以外は標高の低い南端あるいは南東部に認められる(図版6)。層の厚さは最下層の南堆6層が最大で100cm以上で、それ以外は20cm以下である。

南堆1層：褐色(10YR4/4)ないしにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトで、厚さ7～26cmである。

南堆2層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルトで、厚さ5～17cmである。

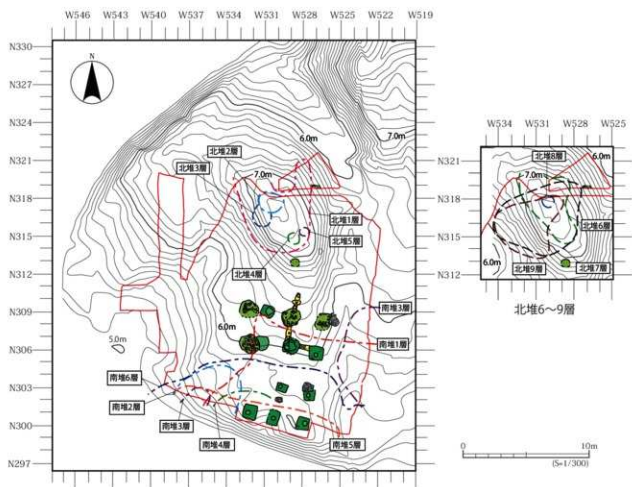
南堆3層：3a～gの7層に細分した。3a～c層は南西部に分布し、3a層は褐色(10YR4/4)シルト、3b層は褐色(7.5YR4/4)砂質シルト、3c層は褐色(10YR4/6)砂質シルトである。3d～g層は南東部に分布し、3d層はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト、3e層は褐色(10YR4/4)砂質シルトで第II層(灰白色火山灰)小ブロックが含まれる。3f層はにぶい黄褐色(10YR6/3)シ

ルト、3g層は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトである。

南堆4層：灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、厚さ4～5cmである。古代の旧表土とみられる。

南堆5層：灰黄褐色(10YR4/2)シルトないしにぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルトで、厚さ2～6cmである。古代の旧表土とみられる。

南堆6層：6a～nの14層に細分した。6a～e層は南西部に分布し、6a層は褐色(7.5YR4/6)シルト、6b層は褐色(10YR4/6)砂質シルト、6c・d層は褐色(10YR4/6)シルトで、6d層には岩盤小礫が多量に含まれる。6e層は褐色(10YR4/6)砂質シルトである。6f～n層は南東部に分布し、6f層は暗褐色(10YR3/3)シルトで焼土小ブロックと炭化物を含み、6g層は暗褐色(10YR3/4)シルト、6h層は灰黄褐色(10YR4/2)シルト、6i層はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト、6j層は褐色(10YR4/4)シルト、6k層はにぶい黄褐色(10YR6/3)シルト、6l層は褐色(10YR4/4)砂質シルト、6m層はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト、6n層はにぶい黄褐色(10YR5/4)シルトである。なお、6f～n層とSX3385整地層との新旧関係については直接の重複関係はないが、SX3385は地山直上で検出され、地山との間に堆積層が認められないことから、6f～n層を南堆6層に含めることとした。



図版6 A区 調査前の地形と堆積層の分布



1 調査区の位置（北東から）

[Z7782]



2 調査区近景（西から）

[Z7788]



3 調査区近景（南から）

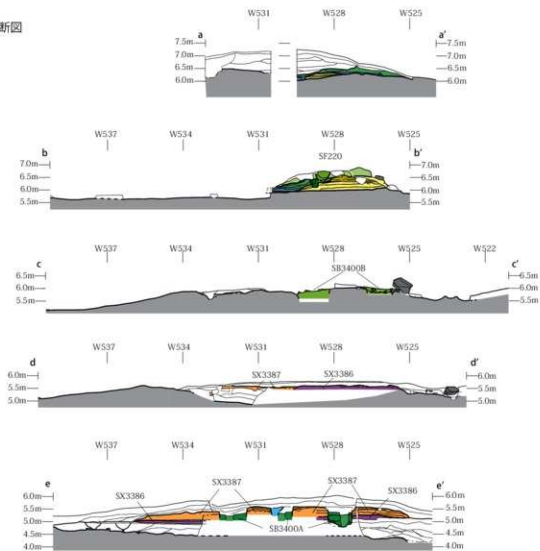
[Z7787]

図版7 第93次調査区 近景写真

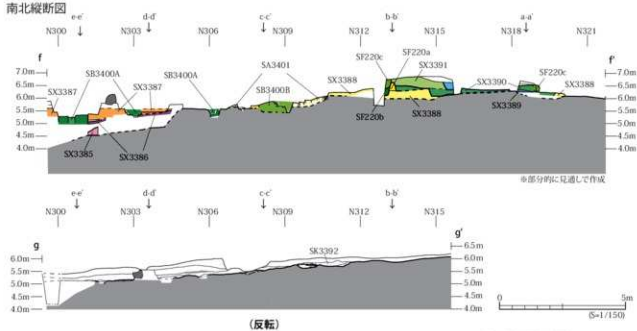


図版8 A区遺構配置図

東西横断面



南北縦断面



図版9 A区 東西横断面、南北縦断面

色の凡例は図版8と同様
図版8(平面図)a-a'-g-g'の位置に対応



図版 10 A区 平面図



2) 発見遺構と出土遺物

発見した遺構は、門2棟、築地塀3条、材木塀1条、整地層7箇所、切り通し状遺構1条、土坑6基、溝3条、ピットである(図版8)。出土遺物は、土師器、須恵器、灰輪陶器、中世陶器、近世陶器、瓦、転用砥、鉄製品、鉄滓、石器である(第5～7表)。以下、検出した遺構について種類ごとに記述する。なお、遺構以外から出土した遺物については、特筆すべきものに限って報告する。

①門

【SB3400門】

調査区中央から南端で検出した南北3間、東西2間の南北棟建物である。調査区北部で検出した外郭西辺の築地塀の南側延長線上に、建物北妻の棟通りの柱穴ないし掘穴が位置すること、北から2間目の柱間がその南北の柱間より広いこと、北・南から1間目の建物内部に位置する柱穴の規模が小さく、深さも浅いことから、三間一戸の八脚門と考えられる。外郭西辺の北部に位置することから、外郭西北門と呼称する。柱穴と掘穴を検出し、1箇所では平面での重複があり掘穴の方が新しいことから、1度建て替えられている(A→B)。構造はSB3400Aが掘立式、SB3400Bが礎石式である。どちらも基壇は残存していない。

SB3400A(平面図:図版11、断面図:図版13、遺物:図版15)

【検出】地山の岩盤上で4個、SX3387整地層上面で5個、SB3400B北妻棟通りの礎石掘穴断面で1個の計10個検出した。未検出の北東隅柱は、SB3400Bの掘穴と重複する位置にあり、西側柱列南から1間目の柱穴は倒木により壊されたと考えられる。2個で柱採取穴、7個で柱痕跡を確認した。

【重複】棟通り中央間の北側と東側柱列北から1間目の柱穴がSA3401材木塀、西側柱列北から1間目がピット、南妻棟通りの柱穴がSD3398溝と重複し、SA3401とピットより新しくSD3398より古い。

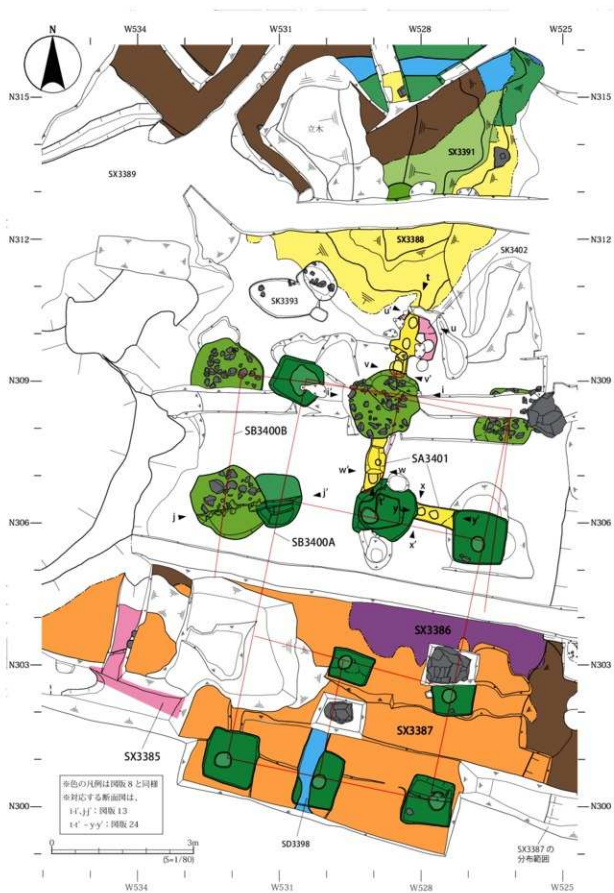
【平面】桁行は西側柱列で、北西隅柱の柱採取穴の中心から南西隅柱の柱痕跡まで8.2m、中央間は東側柱列で3.2m、南側の桁脇間は東側柱列で2.3m、中央間の南側と南妻棟通りが2.5m、北側の桁脇間は西側柱列で2.5mである(図版14)。梁行は南妻で総長4.6m、柱間寸法が西から2.1m、2.5mである。

【方向】南妻で測ると、東西基準線に対して東で南に12°偏る。

【柱穴】側柱の掘方は長軸100～120cmの隅丸方形、隅丸長方形で、深さが北妻棟通りで56cm、西側柱列北から1間目で60cm、南東隅で74cm、底面の標高が北妻棟通りで5.5m、西側柱列北から1間目で5.1m、南東隅で4.8mである(図版13j-j'、e'-e)。棟通り中央間の掘方は長軸90cmの長方形、不整な隅丸長方形である。半載していないため深さは不明だが、どちらも検出面から15～20cmの一段下げを実施したところ部分的に底面に達した。一段下げた面の標高は、中央間の北側が5.5m、南側が5.3mである。棟通り中央間の柱穴は、側柱に比べて規模が小さく浅い特徴が認められる。埋土は、岩盤由来の小礫・礫、焼土・炭化物を含むシルトの互層である。

柱痕跡は径30～40cmの円形、楕円形である。

【出土遺物】掘方埋土から土師器杯、須恵器碗(図版15-1)、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB類、柱痕跡から土師器杯・甕、丸瓦ⅡB類、平瓦、柱採取穴から須恵器杯、丸瓦、平瓦ⅡB類、遺構確認面から



図版 11 SB3400 門、SA3401 材木堀 平面図



1 全景（南東から）

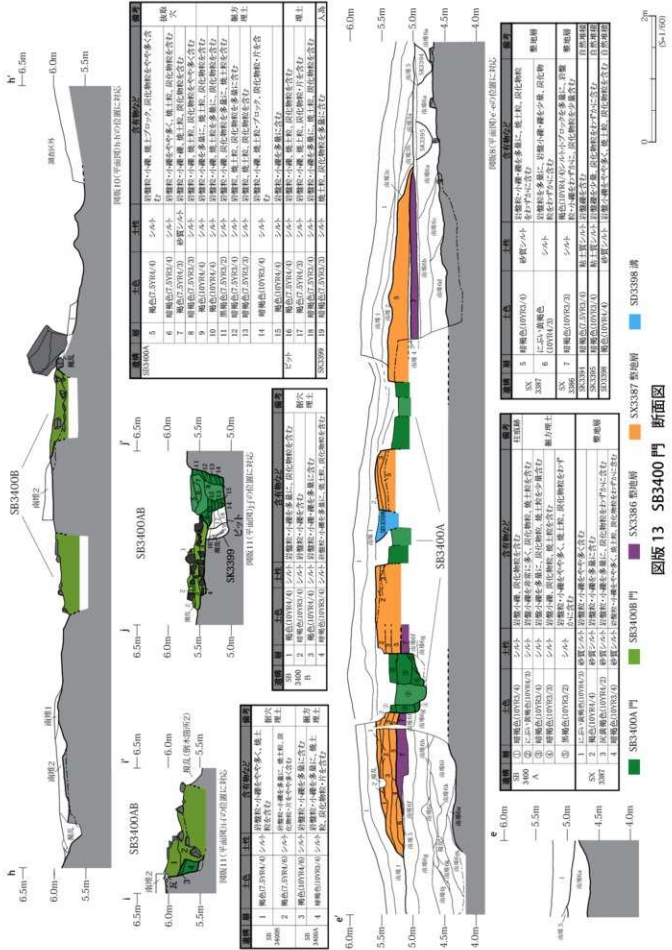
[Z7777]



2 全景（西から）

[Z7779]

図版 12 SB3400 門 全景写真



同図10(平面図)の位置に示す

同図11(平面図)の位置に示す

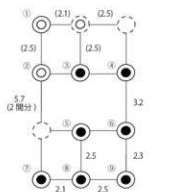
同図12(平面図)の位置に示す

図版13 SB3400門 断面図



■ SB3400A門 ■ SB3400B門 ■ SB3386 整地線 ■ SB3387 整地線 ■ SB3398溝

須恵器甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦Ⅰ・ⅡB類が出土した。掘方埋土と柱抜取穴から出土した平瓦ⅡB類にはaタイプ1がある(2・4)。掘方埋土と柱痕跡から出土した土師器環(3)はいずれもロクロ整形である。また、掘方埋土から出土した平瓦には焼瓦が認められた。



SB3400A 欄式図 ※単位はm

- 掘方・柱痕跡検出
- ◎ 掘方・抜取穴検出
- ⊙ 掘方・抜取穴断面で検出
- 柱穴未検出



1 柱穴①検出 (南から) [Z7623]



2 柱穴②検出 (南から) [Z7626]



3 柱穴④検出 (南から) [Z7627]



4 柱穴④検出 (北から) [Z7630]



5 柱穴⑥検出 (南から) [Z7632]



6 柱穴⑥検出 (南から) [Z7634]



7 柱穴⑥検出 (北から) [Z7636]

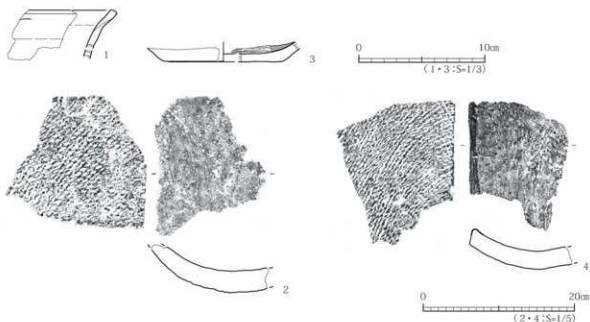


8 柱穴②断面 (図版 13j) (南から) [Z7625]



9 柱穴⑨断面 (図版 13e'-e) (北から) [Z7639]

図版 14 SB3400A 門 検出・断面写真



No.	層	種類	形状	法量	特徴	写真図版	登録	番番号
1	㊸方埋土	灰土層	口縁部	—	外内:ロクロナダ 外面に接合痕 破壊の可能性あり	37-3	R2	B16003
2	㊸方埋土	平瓦	破片	厚さ:(2.9)	目B類aタイプ1	37-1	R4	B16003
3	㊸柱痕跡	土師器	杯	体~底1/6 底径:(9.0)	外:ロクロナダ 内:放射状ヘラミダキ一黒色地埋 底:摩滅により切り離し不明	37-4	R5	B16003
4	㊸後取穴	平瓦	破片	厚さ:(2.8)	目B類aタイプ1	37-2	R1	B16003

図版 15 SB3400A 門出土遺物

SB3400B(平面図:図版11、断面図:図版13)

〔検出〕地山の岩盤上で礎石据穴を4箇所検出した。SB3400Aの柱穴とほぼ同じ位置で重複していることから、八脚門と考えられる。据穴は、北東隅と北妻棟通りではSB3400Aの柱穴位置とほぼ同じだが、西側柱列では柱穴より1.0~1.6m西に移動している。それに伴い各柱間の値がSB3400Aより大きくなっており、西・南側に門の規模が拡大する。

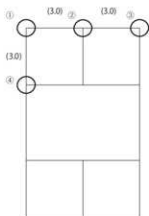
礎石は全て失われているが、北東隅の据穴の東側斜面上に、調査前の段階から確認されていた長軸90cm、短軸70cm、高さ45cmの大型の石が所在し(図版16-3)、この石には長軸約60cm、短軸50cmの平坦面が認められる。石の大きさや形状、据穴との位置関係から、本来的には北東隅の据穴に設置されていた礎石で、門廃絶後に位置が移動したものと考えられる。これ以外にも調査区内には3個の大型の石が分布しており、石の直下または周辺で据穴は検出できなかったが、北東隅の状況から、これらは全てSB3400Bの礎石で、門廃絶から現代に至る過程で位置が移動したものと考えられる。

〔重複〕北妻棟通りでSA3401、西側柱列北から1間目でSK3399土坑と重複し、これより新しい。

〔平面〕据穴のほぼ中心で測ると、桁行総長は不明だが、西側柱列の桁脇間が3.0m、梁行は北妻で総長6.0m、柱間寸法が3.0m等間である(図版16)。

〔方向〕北妻で測ると、東西基準線に対して東で南に10°偏る。

〔据穴〕北東隅と北妻棟通りでは、SB3400Aの柱抜取穴を据穴に利用したと推定される(図版13i-i')。規模は、長軸150~160cm、短軸140~150cmで、平面は楕円形である。深さは北妻棟通りが62cm、西



SB3400B 模式図 ※単位はm



1 掘穴①検出 (北から) [Z7649]



2 掘穴②断面 (図版 13i-f) (北から) [Z7643]



3 掘穴③断面 (図版 13h-h') (南から) [Z7640]



4 SB3400B④と SB3400A②の検出 (南から) [Z7651]



5 掘穴④断面 (図版 13j-j') (南から) [Z7654]

図版 16 SB3400B 門 検出・断面写真

側柱列北から1間目が25cm、底面の標高はどちらも5.4mである。

埋土は焼土・炭化物を含むシルトである。埋土内には長軸10~36cmの円礫・亜角礫の根石が多く遺存しており、その天端標高は、北東隅と北妻棟通りが6.0m、北西隅が5.9m、西側柱列北から1間目が5.8mである。

〔出土遺物〕掘穴埋土からロクロ整形の土師器坏、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB類が出土し、平瓦ⅡB類にはaタイプ1がある。また、丸瓦には焼瓦が認められる。

②築地堀

【SF220築地堀とSX3388・3390・3391整地層】

第17次調査で検出されたSF220は、外郭北西隅に位置し外郭西辺を区画する北東—南西方向の築地堀である(図版2)。第93次調査では調査区の北部で認められ、平面検出と断ち割りによる断面観察の結果、基礎整地層を含めた2回の改修によるa～cの変遷を確認した。各時期とも、築地堀本体と基礎整地層東半が後世に大きく削平されており、残存状況は悪い。重複関係から、SF220aとSX3388、SF220bとSX3390、SF220cとSX3391が伴うと考えられる。これらは遺構名や遺構番号は異なるが、それぞれ一連の工程で造成された一体のものであるため、併せて記述する。その際、造成工程を考慮して、整地層、築地堀の順に記述する。

〈SF220a築地堀、SX3388整地層〉(平面図:図版17、断面図:図版9・18・19・24)

SX3388

〔検出〕SF220aの基礎整地層で、調査区中央から北部にかけて平面と断面で部分的に検出した(図版17)。検出範囲は、南北10.7m(N310～321)、東西5.8m(W526～532)である。

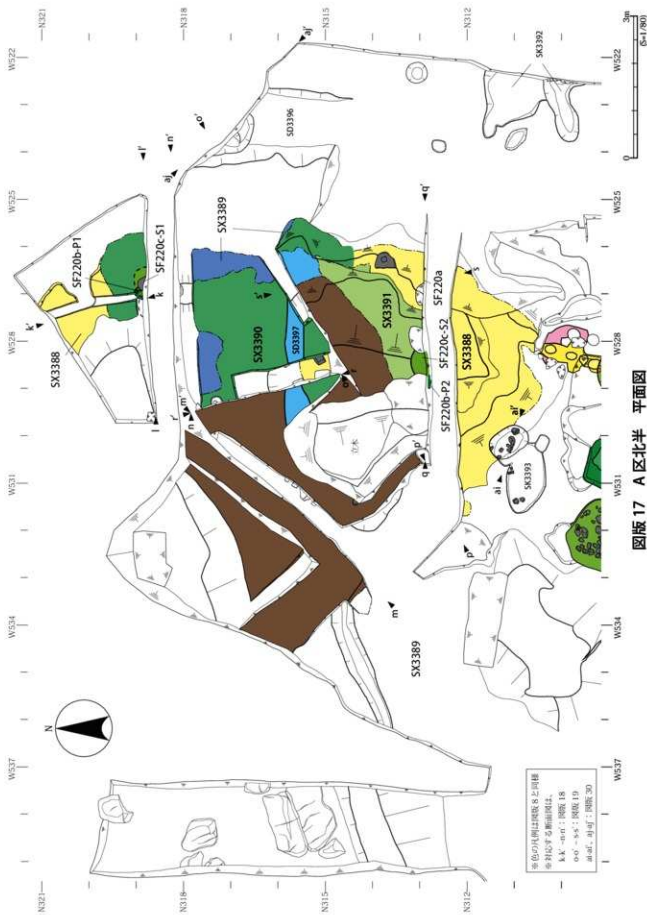
〔重複〕SA3401材木堀、SX3390・3391整地層、SX3389切り通し状遺構、SK3393・3402土坑と重複し、SA3401、SK3402より新しく、それ以外より古い。

〔造成〕SX3388は範囲の異なる3種類の地形に造成されている。調査区北端は北西から南東方向(図版2のN330・W531からN321・W525)、調査区北部から南西は南西から北東方向(N306・W543からN315・W534)に入り込む沢状地形、調査区中央は北から南方向に標高を下げながら傾斜する緩斜面である。

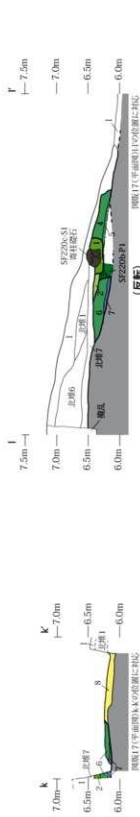
調査区北端(N319～321・W526～529)では、東西2.0m、南北1.6mの範囲で検出した。盛土範囲に旧表土が認められないことから、沢状地形の北東斜面の旧表土が岩盤まで削られ、その上に盛土整地による平坦面の造成が行われたと推定される。整地層の厚さは5～12cm、上面の標高は6.3mである(図版18k-k')。

調査区北部から南西(N315～318・W526～529)にかけては、沢状地形の東端がN315～318・W525付近まで延びることを確認した。この沢状地形の凹地内に盛土整地による平坦面ないし緩斜面の造成が行われたと推定される。SX3389により削られており、残存するのは凹地の深部(図版19r-r')とSX3389底面の傾斜変換点付近(図版18n-n')のみである。N315・W529地点の凹地深部(r-r')においては岩盤まで精査しておらず、整地層の厚さについては不明である。整地層上面の標高は5.8mである。N318・W528～530のSX3389底面の傾斜変換点付近(n-n')では旧表土が認められず、整地層に岩盤由来の小礫が含まれることから、旧表土と岩盤が削られたと推定される。盛土整地は、削られた岩盤直上に厚さ2～10cmの単位で行われている。整地層上面の標高は6.4mである。

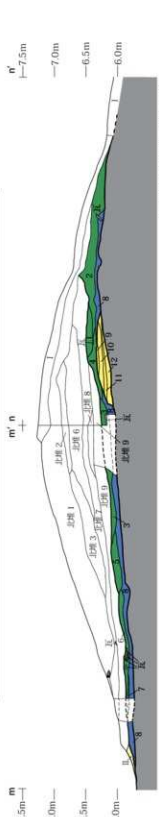
調査区中央(N310～315・W525～533)では東西5.8m、南北4.0mの範囲で検出した。ここでは、岩盤が東西5.8m以上(図版19p-q')、南北方向4.0m以上(図版9f-f')の範囲にわたってほぼ水平に削られ、最初にW528から東側に厚さ10～12cm、次に、この上面と削られた岩盤上に厚さ20～30cmの盛土整地が行われて、この上にSF220aが造られる(p-q')。整地層の幅は東西5.8m以上である。



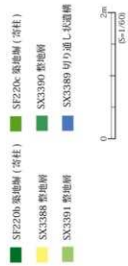
図版17 A区北半 平面図



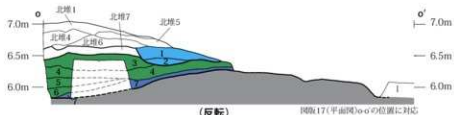
層	土質	構造	透水性	透水量
SF220a	1 褐色土(107184.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
SX3381	2 褐色土(57814.0)	シルト	透水性弱	透水量少
SF220b	3 褐色土(107184.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
SX3380	4 明黄褐色(107185.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
	5 褐色土(107185.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
SX3389	6 褐色土(107185.2)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
SX3388	8 褐色土(107184.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少



層	土質	構造	透水性	透水量
SX3390	1 褐色土(107185.2)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
	2 褐色土(57814.0)	シルト	透水性弱	透水量少
	3 褐色土(107184.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
	4 褐色土(107185.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
	5 褐色土(107185.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
	6 褐色土(107185.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
	7 褐色土(107185.2)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
SX3389	8 褐色土(107184.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
SX3388	10 褐色土(57814.0)	シルト	透水性弱	透水量少
	11 褐色土(107184.0)	砂質シルト	透水性弱	透水量少
	12 褐色土(107184.0)	シルト	透水性弱	透水量少

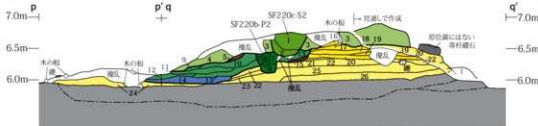


図版 18 SF220 築地層、SX3388・3390・3391 整地層、SX3389 切り返し状遺構 断面図



(反転) 図版17(平面図)oの位置に対応

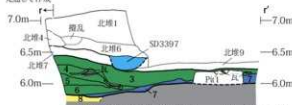
遺構	層	土色	土質	含有物など	備考
SD3397	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	岩盤小礫をわずかに含む	自然堆積
	2	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	岩盤礫、炭化物粒をわずかに含む	
SX3390	3	褐色(7.5YR4/6)	シルト	岩盤礫・小礫を多量に含む	SF220a基礎整地層 上層
	4	黄褐色(10YR5/6)	シルト	岩盤小礫、炭化物粒をわずかに含む	
	5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物粒をわずかに含む	SF220a基礎整地層 下層
	6	褐色(10YR4/6)	シルト	炭化物粒をわずかに含む	
SX3389	7	にぶい黄褐色(10YR6/4)	粘土質シルト		自然堆積



図版17(平面図)p・p'・q'q'の位置に対応

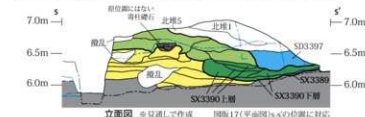
遺構	層	土色	土質	含有物など	備考	
SF220a	1	にぶい黄褐色(10YR3/4)	砂質シルト	岩盤粒を少量含む	礎石式竪柱 柱敷穴	
	2	にぶい黄褐色(10YR3/2)	砂質シルト	岩盤粒・小礫を多量に、横土粒をわずかに含む		礎石式竪柱 竪穴
SX3391	3	にぶい黄褐色(10YR3/2)	砂質シルト	岩盤粒・小礫をやや多く、炭化物粒を少量含む	SF220a基礎整地層	
	4	にぶい黄褐色(10YR3/4)	砂質シルト	岩盤粒・小礫を含む、炭化物粒・片をわずかに含む		
SF220b	5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	岩盤粒を含む	崩壊土	
	6	褐色(10YR4/6)	砂質シルト	岩盤粒を少量含む		願立式竪柱 柱敷層
	7	にぶい褐色(7.5YR5/4)	砂質シルト	岩盤粒を含む		
	8	にぶい褐色(7.5YR5/3)	砂質シルト	岩盤粒を多量に、小礫を少量含む		
SX3390	9	明赤褐色(5YR5/9)	シルト	岩盤粒をやや多く含む	SF220b基礎整地層 上層	
	10	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	岩盤粒・小礫をやや多く含む		
	11	にぶい黄褐色(10YR6/3)	シルト	岩盤粒をやや多く、小礫を少量含む		
	12	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	岩盤粒をやや多く含む		
	13	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	岩盤粒・小礫を多量に含む		
	14	灰黄褐色(10YR6/2)	砂質シルト	岩盤粒・小礫をやや多く含む		自然堆積
SX3389	15	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	岩盤粒・小礫を含む		
SF220a	16	明赤褐色(5YR5/8)	シルト	岩盤粒・小礫を含む	崩壊土	
	17	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	岩盤粒・小礫をやや多く含む		
	18	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	岩盤粒・小礫をやや多く含む		
	19	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	岩盤粒・小礫を含む		積土
	20	明赤褐色(5YR5/6)	シルト	岩盤粒・小礫を多量に含む		
	21	明赤褐色(7.5YR5/6)	シルト	岩盤粒・小礫、赤褐色(5YR4/8)シルトブロックを含む		
	22	赤褐色(5YR4/8)	シルト	岩盤粒・小礫を多量に含む		
	SX3388	23	赤褐色(5YR4/6)	シルト		岩盤粒・小礫をやや多く含む
24		明赤褐色(5YR5/6)	シルト	岩盤粒・小礫を含む		
25		褐色(7.5YR4/4)	砂質シルト	岩盤粒・小礫を非常に多く含む		
26		褐色(7.5YR4/6)	砂質シルト	岩盤粒・小礫を多量に含む		

見通しで作成



図版17(平面図)rの位置に対応 ※3~7層はoの3~7層に対応

遺構	層	土色	土質	含有物など	備考
SX3388	9	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒をわずかに含む	SF220a基礎整地層



図版19 SF220a築地塼、SX3388・3390・3391整地層、SD3397溝 断面図

- SF220a 築地塼
- SF220b 築地塼 (竪柱)
- SF220c 築地塼 (竪柱)
- SF220 築地塼崩壊土

- SX3388 整地層
- SX3390 整地層
- SX3391 整地層
- SX3389 切り通し状遺構
- SD3397 溝





1 SF220bc, SX3390・3391 断面 (図版 18f') (北から) [Z7659]



2 SF220c 寄柱礎石 (図版 18f') (北西から) [Z7660]



3 SX3388~3390 断面 (図版 18n-e') (南から) [Z7664]



4 SX3390 断面 (図版 18m-m') (南から) [Z7666]



5 SF220, SX3388~3391 断面 (図版 19q-q') (南から) [Z7674]



6 SX3388~3390, SD3397 断面 (図版 19r-r') (北東から) [Z7669]



7 SX3388~3391, SD3397 断面 (図版 19s-s') (東から) [Z7673]



8 原位置にはない SF220c 寄柱礎石 (図版 19q-q'・s-s') (北東から) [Z7682]

図版 20 SF220 築地堀、SX3388・3390・3391 整地層、SD3397 溝 断面写真

東西方向の断ち割りを行ったN313・W528地点の整地層上面の標高は6.4m(p-q)、SA3401と重複するN311・W528地点が6.2mである(図版24t-r)。

〔出土遺物〕須恵器甕、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB類が出土した。丸瓦ⅡB類には「田」Aの刻印瓦、平瓦ⅡB類にはaタイプ2がある。また、丸瓦Ⅱ・ⅡB類には焼瓦が認められ、その中には「田」Aの刻印瓦も含まれる(図版37-5)。

SF220a

〔検出〕SX3388の上部に築造された築地塀本体である。調査区中央(N313)の断ち割り調査を実施した断面(図版19p-q)で積土を確認した。検出範囲は東西1.8mである。寄柱や添柱は未検出で、それらの有無は不明である。本体の西側は犬走り状に平坦となっている。

〔方向〕SX3388の分布範囲から北東―南西方向と推定されるが、詳細は不明である。

〔規模〕調査区中央(N313)の断ち割り断面(p-q)では、残存高が28cm、基底幅が1.8m以上、検出された積土上面の標高が6.6mである。

〔積土〕5層認められ(p-q)、東西方向ではほぼ水平に厚さ5～10cmの単位で版築されている。

〔崩壊土〕西側裾部で1層認められた(p-q)。

〔出土遺物〕なし。

〈SF220b築地塀、SX3390整地層〉(平面図:図版17、断面図:図版18・19・27、遺物:図版21・22)

SX3390

〔検出〕SF220bの基礎整地層で、調査区北部で検出した(図版17)。検出範囲は、南北7.0m(N313～320)、東西6.9m(W525～533)である。

〔重複〕SF220ac築地塀、SX3388・3391整地層、SX3389切り通し状遺構、SD3397溝と重複し、SF220a、SX3388・3389より新しくSF220c、SX3391、SD3397より古い。

〔造成〕N314～320の範囲では、SX3389の埋め戻しを兼ねた整地、N313～314の範囲ではSF220a西側の嵩上げ整地が行われる。

SX3390は盛土の特徴から上下2層に大別され、下層(図版18・19)はSX3389堆積土直上に南北(N314～317)2.0m、東西(W525～533)7.1mの範囲に分布する。後述するSX3389の底面で検出した土坑状の窪みの範囲に厚く堆積すること(図版27ae-ae')、層中には軒丸瓦をはじめ多量の瓦が含まれていることから、SX3389の埋め戻しとともに瓦の廃棄も兼ねた盛土整地と推定される。N314～317・W531～533の範囲では厚さ6～12cm、上面の標高が5.8～6.1m(図版18m-m')、N315・W527～529付近では厚さ50cm、上面の標高が6.3～6.4mである(図版19o-o')。

上層(図版18・19)は南北(N313～320)6.9m、東西(W525～531)5.1mの範囲に分布する。N314より北側ではSX3389を埋め戻し(図版18k-k'、l-l'、m-n'、図版19o-o'、r-r'、s-s')、N313～314の範囲では、SF220a崩壊土とSX3388、SX3389堆積土直上に盛土整地を行い、築地基底部の嵩上げを行っている(図版19p-q)。N319・W527地点では厚さ21cm、上面の標高が6.5m(l-l')、N318・W528周辺では厚さ25cm、上面の標高が6.6m(m-n')、N315・W528地点では厚さ25cm、上面の標高が6.5m(o-o')、N313・W528付近では厚さ26cm、上面の標高が6.5mである(p-q)。

下層・上層の盛土整地によって、N313より北側に南北約6mにわたる標高6.5～6.6mの平坦面が造られる。

〔出土遺物〕下層から土師器、軒丸瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類(図版21-2)、平瓦ⅡB・ⅡC類(3)が出土した。軒丸瓦は細弁蓮花文310A(1)で、平瓦ⅡB類にはaタイプ1・2がある。この他に、一枚作りの平瓦で両面に糸切りの後にナデが施され、凸面に側端部圧痕のあるもの(図版22-1)がある。丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦には焼瓦が認められる。上層から須恵器、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB類が出土し、丸瓦には刻印瓦(3)、平瓦ⅡB類にはaタイプ2・3(2)がある。また、丸・平瓦には焼瓦が認められる(図版37-10)。

SF220b

〔検出〕SX3390整地層上面で確認した掘立式寄柱から存在を想定した築地塼であり、本体は残存していない。

〔重複〕SF220c築地塼、SX3388・3390・3391整地層、SX3389切り通し状遺構と重複し、SX3388～3390より新しく、SF220c、SX3391より古い。

〔方向〕寄柱を直線で結んだ方向で測ると、南北基準線に対して北で東に18°偏る。

〔寄柱〕2個(P1・2)検出した(図版17)。P1はN319・W527地点、P2はN313・W529付近に位置し、SF220bの西側の寄柱である。P1については断面と一部平面で掘方埋土(図版181-I')、P2については断面で柱痕跡と掘方埋土を確認した(図版19p-q')。P2は、SF220a積土の西側裾部から約65cm西に所在する。P1の中心とP2柱痕跡の柱間は6.3mである。掘方は長軸27～36cmで形状は不明、深さは33cmである。柱痕跡はP2が長軸15cmである。上面の標高はP1が6.3m、P2が6.5mである。

〔崩壊土〕西側裾部で1層認められた(図版19q-q')。

〔出土遺物〕なし。

〈SF220c築地塼、SX3391整地層〉(平面図:図版17、断面図:図版18・19)

SX3391

〔検出〕SF220cの基礎整地層で、調査区北部で検出した(図版17)。検出範囲は、南北2.3m(N313～316)、東西2.6m(W526～529)である。

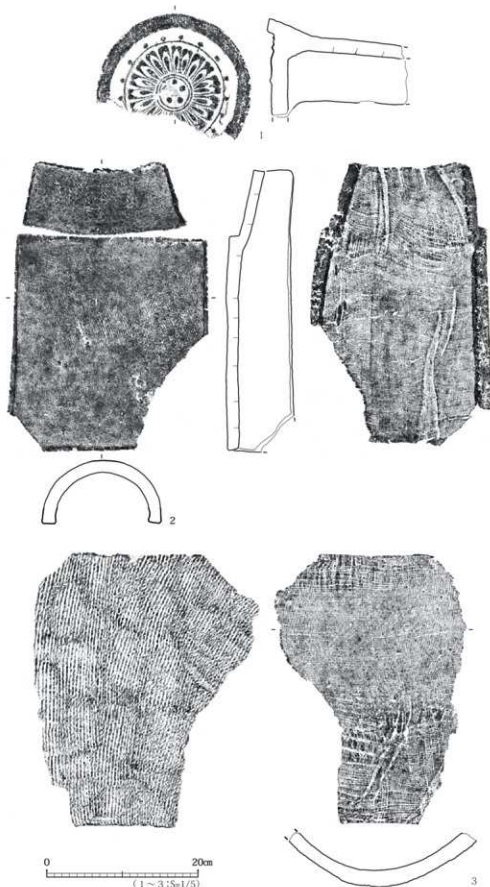
〔重複〕SF220ab築地塼、SX3388・3390整地層、SD3397溝と重複し、SF220ab、SX3388・3390より新しく、SD3397より古い。

〔造成〕SF220bの嵩上げ整地である。SF220b掘立式寄柱を抜き取り、SF220b本体をSF220a積土まで削り、SF220a・SX3390上に盛土整地による嵩上げをして基礎を造り出している。N319・W527地点では整地層の厚さ8cm、上面の標高が6.4m(図版181-I')、N313・W528～529地点では整地層の厚さ30cm、上面の標高が6.8～6.9mである(図版19p-q')。

〔出土遺物〕丸瓦ⅡB類、平瓦が出土した。

SF220c

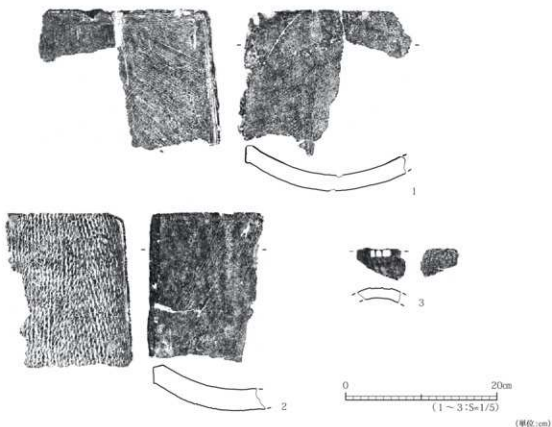
〔検出〕SX3391整地層上面で検出した礎石式の寄柱から存在を想定した築地塼で、本体は残存していない。



No.	層	種類	残存	法量	特徴	写真図版	登録	調査号
1	下層	刺丸瓦	瓦当部4/5	瓦当面径:20.2 瓦当部厚S:(2.2) 丸瓦部厚S:(1.3)	瓣弁蓮花文310A 珠文:瓦唇 丸瓦部目黒	37-6	R16	B16005
2	下層	丸瓦	ほぼ完形	長:37.5 狭端部幅:15.5 厚S:1.8 玉縁部厚S:1.4 玉縁部長:8.8	目黒組	37-7	R22	B16005
3	下層	平瓦	4/5	長:35.8 厚S:2.3	目C組	38-1	R20	B16006

(単位:cm)

図版 21 SX3390 整地層下層出土遺物



No.	層	種類	形状	寸法	特徴	写真図版	図録	番号
1	下層	平瓦	1/5 厚さ:2.2	目付型 凸面・糸切ワ→ナダ 凹面・糸切ワ→糸目→ナダ	37-9	B18	B16007	
2	上層	平瓦	1/4 厚さ:2.8	目付型・クイアツ	37-11	R23	B16007	
3	上層	丸瓦	破片 厚さ:(1.0)	目付型 丸瓦器凸面に刷印文字「口」	37-9	R27	B16007	

図版 22 SX3390 整地層下層・上層出土遺物

〔方向〕 寄柱の中心を直線で結んだ方向で測ると、南北基準線に対して北で東に15°偏る。

〔寄柱〕 2個(S1・2) 検出した(図版17)。S1はN319・W527地点、S2はN313・W528付近に位置し、SF220cの西側の寄柱である。S1については寄柱礎石と断面で据穴埋土(図版18I-I')、S2については平面・断面で寄柱礎石抜取穴と据穴埋土を確認した(図版19p-q)。S1の寄柱礎石の中心は掘立式寄柱P1の中心より20cm東に、S2の据穴埋土の中心は、P2の柱痕跡より40cm東に位置する。S1寄柱礎石とS2抜取穴の中心間の距離は6.2mである。

S1の寄柱礎石は、長軸30cm、短軸20cm以上、高さ24cmの垂角礫である。据穴は長軸58cmの円あるいは楕円形で、深さ21cmである(I-I')。S2の据穴は長軸58cmの円あるいは楕円形で、深さ38cmである(p-q)。標高はS1の礎石天端が6.5m、S2の抜取穴上面が6.8mである。

なお、N314・W526~527地点で長軸40cm、短軸30cmの平面が台形で、高さ20cmの垂角礫を検出した。表面は平坦であり、石材、形状、大きさから寄柱礎石と判断した。ただし、明瞭な据穴が認められず、位置や標高値から原位置ではなく移動したものとみられる。表面の中央には12cm四方の範囲に敲打のような痕跡が明瞭に認められ(図版20・8)、寄柱は一辺12cmの角材であったと推定される。

〔出土遺物〕 なし。

③材木堀

【SA3401材木堀】(平面図:図版11、断面図:図版24)

〔検出〕 調査区中央から南部で検出した南北方向と東西方向の材木堀で、遺構確認面は岩盤である(図版11)。南北方向南端と東西方向西端がSB3400A柱穴と重複しており、両者の接続部分は未検出だが、南北方向においてはSB3400A柱穴よりも南に、東西方向においては西に延びないこと、両者の方向はほぼ直角であること、ともに埋土に焼土や炭化物を含むことから、「L」字形の材木堀と推定される。



1 N309より北側(南北方向)(南から) [Z7685]



2 N309より南側(南北方向)(南から) [Z7692]

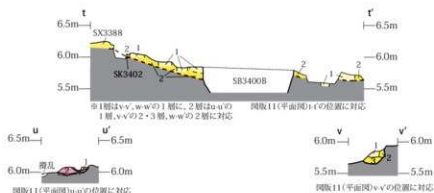


3 N306付近の屈曲部(南から) [Z7697]



4 N306付近(東西方向)(南から) [Z7698]

図版 23 SA3401 材木堀 検出写真

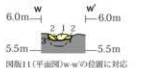


遺構	層	土色	土性	含有物など	備考
SA3401	1	にぶい赤褐色(10YR5/4)	シルト	焼土粒、炭化物粒を少量含む	榎方埋土
SK3402	2	にぶい赤褐色(5YR5/4)	シルト	岩礫等を多量に、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む	人為

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色(7.5YR4/4)	砂質シルト	焼土粒を少量、岩礫粒・小礫、炭化物粒・片を含む	材飯跡
2	褐色(7.5YR4/3)	シルト	岩礫粒・小礫を多量に、焼土粒をやや多く、炭化物粒・片を含む	榎方埋土
3	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	岩礫粒・小礫、焼土粒、炭化物粒・片を含む	



1 SA3401, SK3402 断面 (u-u') (北から) (Z7688)



層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒、炭化物粒を少量含む	材飯跡
2	にぶい赤褐色(10YR5/4)	シルト	焼土粒、炭化物粒を含む	榎方埋土
3	黄褐色(10YR5/4)	シルト	岩礫小礫、炭化物粒をわずかに含む	



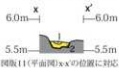
3 w-w' 断面 (北から) (Z7695)



※1・2層はx-x'に対応



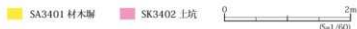
2 v-v' 断面 (南から) (Z7689)



層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒、炭化物粒・片を含む	材飯跡
2	黄褐色(10YR5/4)	シルト	岩礫小礫、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む	榎方埋土



4 x-x' 断面 (西から) (Z7700)



図版24 SA3401 材木堀、SK3402 土坑 断面図・断面写真

〔重複〕SB3400AB門、SX3388整地層、SK3402土坑と重複し、SK3402より新しく、SB3400AB、SX3388より古い。なお、SX3388とは平面的に新旧関係を確認し、断面観察を行うためN310～311・W528の重複部分に東西方向の断ち割りを行ったが、SA3401は残存状況が悪く、断ち割り部分の北壁ではその延長を確認できなかった。

〔方向〕南北方向では南北基準線に対して北で東に15°、東西方向では東西基準線に対して東で南に13°偏る。

〔規模〕検出長は、南北方向が4.0m、東西方向が0.9mである。

〔掘方〕断面逆台形の布掘りで、幅34～65cm、検出面からの深さはN310～311・W528地点で9cm、底面標高は6.0m(図版24u-u')、N309・W528～529地点で29cm、底面標高は5.7m(図版24v-v')、N307・W528～529地点で10cm、底面標高は5.7m(図版24w-w')、N306・W528地点で20cm、底面標高は5.5mである(図版24x-x')。底面は、北から南に標高を下げながら傾斜する(図版24t-t')。

埋土は、図版24u-u'とx-x'で1層、v-v'とw-w'では2層認められた。このうち、w-w'の2層とu-u'の1層とv-v'の2・3層、w-w'の3層とx-x'の2層とではそれぞれ土色や焼土・炭化物の含まれる量がやや異なり、これについては時期差を示す可能性もある。

〔材痕跡〕南北方向で6個、東西方向で2個の計8個検出した。径16～23cmの円・楕円形である。底面が掘方埋土内に収まるものと地山である岩盤に達するもの、岩盤よりも深いものがある。底面の標高は、N309・W528～529地点が5.8m(v-v')、N307・W528～529地点が5.7m(w-w')、N306・W528地点が5.6mである(x-x')。

〔出土遺物〕遺構確認面から平瓦ⅡB類が出土した。

④整地層

SX3385～3387・3403である。北東から南西方向へ標高を下げながら傾斜する丘陵の先端部は、調査区南西部の南西から北東方向へ入り込む沢状地形(図版2のN309・W540)により2つ(N312・W543、N303・W534)に分かれており、その南側の幅の狭い丘陵尾根は調査区南西隅(N303・W537)の方向に延びている。この尾根と調査区南壁が接続する地点(N303・W537)より東側は、南から北方向に沢状地形が入り込む凹地となっており(図版9d-d'、e-e'、f-f')、調査区南端で検出したSX3385～3387はこの凹地部分に、SX3403は凹地に面した丘陵縁に分布する。前述の通り、SX3385～3387間には自然堆積層が認められ、SX3385とSX3386の間には南堆5・6層、SX3386とSX3387の間には南堆4層が堆積しており、新旧関係はSX3385が最も古く、SX3386、SX3387の順に新しくなる。

〔SX3385整地層〕(平面図:図版8・10、断面図:図版13・26)

〔検出〕調査区南西部の東西・南北方向の断ち割りトレンチ断面でのみ確認した。その範囲は、東西2.1m、南北2.3mである。東側に分布が広がるとみられるが、南壁東端の断ち割りトレンチ断面では認められず(図版13e-e)、限定的な確認である。厚さは最大で39cmである。

〔造成〕北東から南西方向に調査区南西隅へ向かって延びる丘陵尾根の南東斜面の地山が階段状に削られ、盛土整地が行われている(図版26ab-ac)。断面観察を行った範囲においては、盛土は東から



1 南壁西端断面(図版13e'-e)(北西から) [Z7701]



2 南壁西端断面(図版13e'-e)(北東から) [Z7704]



3 南壁東端断面(図版13e'-e)(北から) [Z7711]



4 SX3403(図版26z-z')検出(南から) [Z7712]

図版 25 SX3385・3386・3387・3403 整地層 検出・断面写真

西(ad-ad')、南から北(ab-ac')の順で行われ、緩斜面が造られる。上面の標高は、緩斜面の北端が5.1m(ab-ac')、南縁が4.9m(ab-ac')、南裾が4.5m(ab-ac')である。

〔出土遺物〕なし。

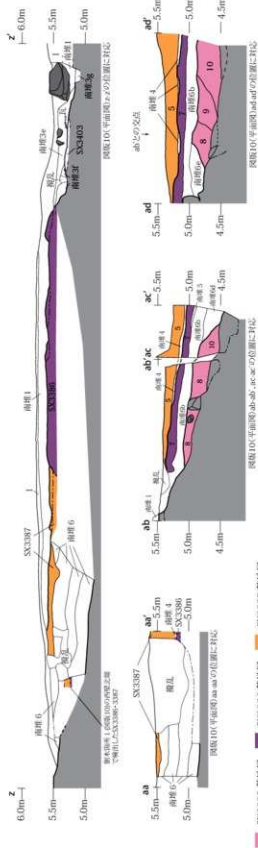
【SX3386整地層】(平面図:図版8・10、断面図:図版13・26)

〔検出〕調査区南西部と南壁東端の断ち割りトレンチ断面、南東部の平面で検出した。確認した範囲は東西10.2m、南北4.0mで、南側に分布は広がる。厚さは南壁西側が16cm、東側が19cmである。

〔造成〕SX3385を覆う南堆5・6層の直上に盛土整地が行われ、東西断面では平坦面、南北方向では緩斜面が造られる(図版13e'-e、図版26ab-ac'、ad-ad')。旧表土層とみられる南堆5層は、調査区南端に一定の厚さで堆積しているが、南西部の斜面上では分布が途切れること(ab-ac')、南東部では断続的な分布となること(e'-e)、また、SX3386が南堆6層に入り込む部分があること(e'-e)から、これらの範囲においては、盛土の前段階で南堆5・6層が削られたと推定される。

上面の標高は、調査区南壁の西側が5.0m(e'-e)、東側が5.3m(e'-e)、南北断ち割りトレンチ北端が5.4m(ab-ac')、分布範囲の北端が5.6m(図版26z-z')である。整地層は非常に固くしまっている。

〔出土遺物〕なし。



※ab-ab'ac-ac'ad-ad'の3・7層は図版136のeの5・7層に於て

遺構	用途	時期	調査年度
SX3385	掘り出し物	古墳時代	1975年度
	掘り出し物	古墳時代	1976年度
	掘り出し物	古墳時代	1977年度
	掘り出し物	古墳時代	1978年度
	掘り出し物	古墳時代	1979年度
	掘り出し物	古墳時代	1980年度
	掘り出し物	古墳時代	1981年度
	掘り出し物	古墳時代	1982年度
	掘り出し物	古墳時代	1983年度
	掘り出し物	古墳時代	1984年度
	掘り出し物	古墳時代	1985年度
	掘り出し物	古墳時代	1986年度
	掘り出し物	古墳時代	1987年度
	掘り出し物	古墳時代	1988年度
	掘り出し物	古墳時代	1989年度
	掘り出し物	古墳時代	1990年度
	掘り出し物	古墳時代	1991年度
	掘り出し物	古墳時代	1992年度
	掘り出し物	古墳時代	1993年度
	掘り出し物	古墳時代	1994年度
	掘り出し物	古墳時代	1995年度
	掘り出し物	古墳時代	1996年度
	掘り出し物	古墳時代	1997年度
	掘り出し物	古墳時代	1998年度
	掘り出し物	古墳時代	1999年度
	掘り出し物	古墳時代	2000年度
	掘り出し物	古墳時代	2001年度
	掘り出し物	古墳時代	2002年度
	掘り出し物	古墳時代	2003年度
	掘り出し物	古墳時代	2004年度
	掘り出し物	古墳時代	2005年度
	掘り出し物	古墳時代	2006年度
	掘り出し物	古墳時代	2007年度
	掘り出し物	古墳時代	2008年度
	掘り出し物	古墳時代	2009年度
	掘り出し物	古墳時代	2010年度
	掘り出し物	古墳時代	2011年度
	掘り出し物	古墳時代	2012年度
	掘り出し物	古墳時代	2013年度
	掘り出し物	古墳時代	2014年度
	掘り出し物	古墳時代	2015年度
	掘り出し物	古墳時代	2016年度
	掘り出し物	古墳時代	2017年度
	掘り出し物	古墳時代	2018年度
	掘り出し物	古墳時代	2019年度
	掘り出し物	古墳時代	2020年度



1 ab-ab' 断面 (北西から) [Z7709] 2 ac-ac' 断面 (西から) [Z7708] 3 ad-ad' 断面 (南から) [Z7706]

図版26 SX3385・3386・3387 整地層 断面図・写真

【SX3387整地層】(平面図:図版8・10、断面図:図版13・26)

〔検出〕 調査区南側のN305以南で検出した整地層で、SB3400A門の遺構確認面である(図版10)。検出した範囲は東西11.0m、南北5.0mである。南壁(図版13e'-e)での東西方向の断面形は頂部が平坦な台状で、この高まりの東縁については3m検出した(図版10)。厚さは南壁西側が36cm(e'-e)、東側が32cm(e'-e)、分布範囲の北端が17cm(図版26z-z')である。

〔造成〕 SX3386を覆う南堆4層とSX3386、SX3386の分布範囲外では南堆5・6層の直上に盛土整地が行われ、東西・南北ともに平坦面が造られる(e'-e、図版26ab-ac'、ad-ad')。旧表土層とみられる南堆4層は一定の厚さで堆積しているが、南西部の斜面上では分布が途切れ(ab-ac')、断続的な分布となること(e'-e)、南東部では確認できないことから(e'-e)、盛土の前段階で南堆4層やSX3386が削られたと推定される。

標高は、南壁西側が5.4~5.5m(e'-e)、東側が5.5m(e'-e)、分布範囲の北端が5.6m(z-z')である。

〔出土遺物〕 土師器、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類が出土し、平瓦ⅡB類にはaタイプ1がある。

【SX3403整地層】(平面図:図版10、断面図:図版26)

〔検出〕 調査区南東部で検出した。遺構確認面は岩盤で、南堆3e・3f層に覆われている(図版26z-z')。検出範囲は東西0.8m、南北1.0m、断ち割りを行っていないため深さは不明である。埋土には長軸2~13cmで、特に2~6cmの小礫が多く含まれ、瓦の小破片も少量認められる。

〔出土遺物〕 平瓦が出土した。

⑤その他

SX3389切り通し状遺構、SK3392~3395・3399・3402土坑、SD3396~3398溝である。

【SX3389切り通し状遺構】(平面図:図版27、断面図:図版18・19・27、遺物:図版29)

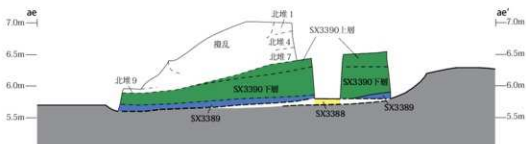
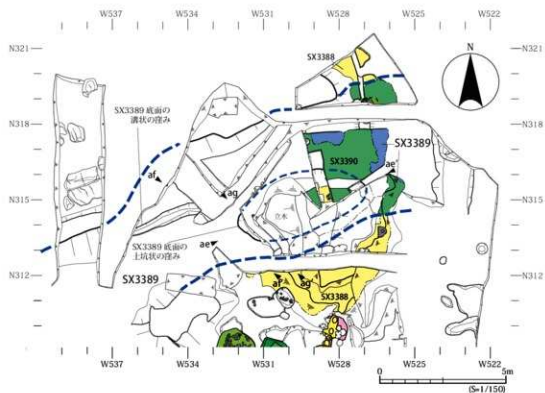
〔検出〕 調査区西部中央から北端(N310~320・W525~539)で検出した、北東-南西方向に外郭西辺を切り通す遺構である。確認した範囲では、底面はN318・W528~530付近(図版18m-n')と、N314~316・W525~529周辺(図版19r-r')がSX3388、それ以外が岩盤である。W525より東側は後世の削平により残存しておらず、W539より西側は丘陵緩斜面に接続し立ち上がり不明瞭になる。

〔重複〕 SF220b築地塼、SX3388・3390整地層と重複し、SX3388より新しく、SF220b、SX3390より古い。

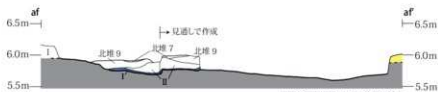
〔方向〕 北壁で測ると、東西基準線に対して東で北に18~22°偏る。

〔規模〕 検出長は14.2mで、平面は細かな凹凸があり直線的ではない。上幅は4.0~5.0m、底面幅は2.8~4.2mである。深さは、N312~314・W538地点で46cm、N318・W528付近で40cm(図版18l-l'、m-n')、N315・W525~526地点で36cm(図版19s-s')である。底面の標高は、N312・W538地点で5.4m、N316・W529付近で6.0m(r-r')、N315~316・W529で6.2m(図版19o-o')であり、底面は北東から南西方向へ標高を下げながら傾斜する緩斜面となる。

底面では、中央やや東寄り(N313~316・W527~532)で土坑状の窪み、西部(N313~315・W533

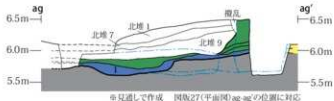


図版27(平面図)ae-ae'の位置に対応



図版27(平面図)af-af'の位置に対応

- SX3388 整地層
- SX3390 整地層
- SX3389 切り通し状遺構



見通しで作成 図版27(平面図)ag-ag'の位置に対応

層	土色	土質	含有物など	備考
1	灰黄褐色(0YR5/2)	砂質シルト	珪砂粒、炭化物粒・片(少量含む)	自然堆積

図版 27 SX3389 切り通し状遺構 平面・断面図



1 全景 (西から)

[Z7791]



2 af-af' 断面 (南西から)

[Z7713]



3 ag-ag' 断面 (南西から)

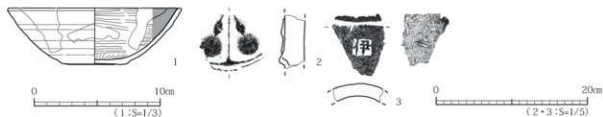
[Z7720]

図版 28 SX3389 切り通し状遺構 写真

～537) で溝状の窪みを検出した。土坑状の窪みは長軸5.3m、短軸1.4m以上の楕円形で、深さは西端(N314・W532)が底面から10cm、東端(N316・W527)が40cm、北端(N316・W529)が10cmである。窪みの底面標高は、西端が5.6m、東端と北端が5.8mで、底面はほぼ平坦である(図版27ae-ae')。溝状の窪みは検出長2.9m、幅30～50cm、深さ5～10cmである。

〔堆積土〕1層で、自然堆積である。N314～315・W533～534では堆積土直上に第Ⅱ層である灰白色火山灰層が認められる(図版27af-af')。

〔出土遺物〕堆積土上面からロクロ整形の土師器(図版29-1)、堆積土から須恵器、軒丸瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB類が出土した。軒丸瓦には重弁蓮花文(2)、丸瓦ⅡB類には「伊」の刻印瓦(3)、平瓦ⅡB類にはaタイプ1がある。また、平瓦には焼瓦が認められる。



No.	層	種類	残存	法数	特徴	写真図版	登録	調査号
1	埴積土 上層	土師器 坏	口~底部	1	口径:(13.8) 底径:(6.0) 器高:(4.5)	外:ロクロナデ 内:放射状へラギキ一色色処理 底:回転糸切	38-4	R14 B16004
2	埴積土	軒丸瓦	破片	厚さ:(3.3)		裏字墨花文	38-2	R10 B16004
3	埴積土	丸瓦	破片	厚さ:(1.7) 玉縁部厚さ:(0.7)		II B類 丸瓦腹凸面に黒印文字「伊」	38-3	R12 B16004

図版 29 SX3389 切り通し状遺構出土遺物

【SK3392土坑】(平面図:図版10、断面図:図版30、遺物:図版31)

〔検出〕調査区東壁中央で西部を検出した。遺構確認面は岩盤である。

〔規模〕平面は不整形形で、東西1.4m、南北2.1m、深さ20cm、断面は皿状で底面には凹凸がある。

〔埴積土〕2層あり、どちらも自然堆積である。

〔出土遺物〕2層から須恵器、丸瓦Ⅱ・ⅡB類(図版31-1)、平瓦ⅡB・ⅡC類(2~4)、1層から平瓦ⅡC類が出土した。2層から出土した平瓦ⅡB類にはbタイプがある。

【SK3393土坑】(平面図:図版17、断面図:図版30)

〔検出〕調査区中央で検出した。遺構確認面はSX3388整地層と岩盤である。

〔重複〕SX3388と重複し、これより新しい。

〔規模〕平面は楕円形の土坑が連結した形状で、東西1.9m、南北1.2mである。断面は階段状で、西側の深さが2~14cm、一段窪む東側の深さが30cmである。

〔埋土〕1層で礫を多量に含み、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕なし。

【SK3394土坑】(平面図:図版8、断面図:図版13)

〔検出〕調査区南壁西端の断面で確認した。遺構確認面は南堆6a層上面で、南堆5層に覆われる。

〔規模〕平面形は不明で、規模は東西0.7m、深さ28cmである。断面は「V」字状である。

〔埴積土〕1層で、自然堆積である。

〔出土遺物〕なし。

【SK3395土坑】(平面図:図版8、断面図:図版13)

〔検出〕調査区南壁西端の断面で確認した。遺構確認面は南堆6a層上面で、南堆5層に覆われる。

〔規模〕平面形は不明で、規模は東西0.6m、深さ26cmである。断面は「U」字状である。

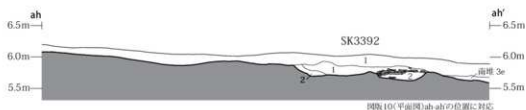
〔埴積土〕1層で、自然堆積である。

〔出土遺物〕なし。

【SK3399土坑】(断面図:図版13、遺物:図版32)

〔検出〕調査区中央で、SB3400AB門の西側柱列北から1間目の柱穴と据穴を半載した断面で確認した。

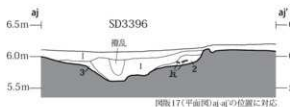
〔重複〕SB3400B、ピットと重複し、これより古い。



層	土色	土質	含有物など	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物粒・焼土粒をわずかに、岩盤小礫を含む	自然堆積
2	褐色(10YR4/4)	シルト		



層	土色	土質	含有物など	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	礫を多量に、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む	人為



層	土色	土質	含有物など	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	岩盤小礫、焼土粒、炭化物粒をわずかに含む	自然堆積
2	にがい黄褐色(10YH4/3)	シルト		
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	岩盤小礫をわずかに含む	



1 SK3392(ah-ah')断面 (北西から) [Z7739]



2 SK3392 遺物出土状況 (西から) [Z7735]

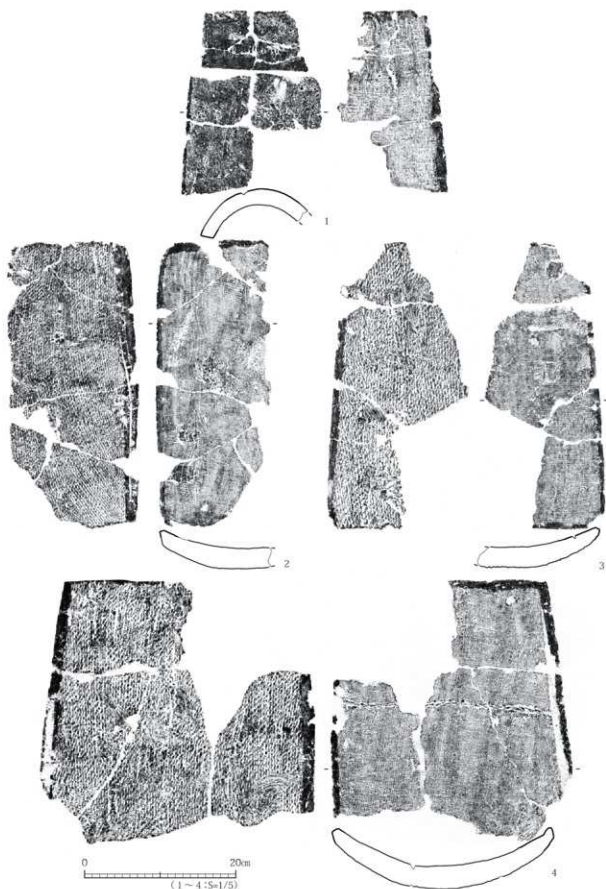


3 SK3393(ai-ai')断面 (南から) [Z7724]



4 SD3396(aj-aj')断面 (南から) [Z7728]

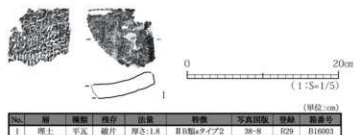
図版30 SK3392・3393土坑、SD3396溝 断面図・写真



No.	層	形状	残存	出處	特徴	写真図版	登録	調査号
1	2層	丸瓦	1/4 厚さ:2.1 主線部厚さ:1.6 主線部長:8.1		目0類	38-5	R35	B16009
2	2層	平瓦	1/2 長:37.8 厚さ:2.9		目C類 凹面に方形の突出2箇所 布目 1辺2.4~2.5cm 凸面にへ ツ書き「J」・「//」	38-6	R33	B16008
3	2層	平瓦	1/2 長:37.5 厚さ:2.8		目C類 凹面に方形の突出1箇所 布目→ナデ 1辺2.1~3.1cm	38-7	R32	B16008
4	2層	平瓦	1/2 厚さ:3.1		目C類	39-1	R34	B16009

(単位:cm)

図版 31 SK3392 土坑出土遺物



図版 32 SK3399 土坑出土遺物

〔規模〕 平面・断面形は不明で、規模は東西0.2m以上、深さ36cmである。

〔埋土〕 1層で、炭化物粒・焼土粒を多量に含み、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕 丸瓦Ⅱ類、平瓦Ⅱ類が出土し、平瓦Ⅱ類にはaタイプ2(図版31-1)がある。

〔SK3402土坑〕(平面図:図版11、断面図:図版24)

〔検出〕 調査区中央で検出した。遺構確認面は岩盤である。

〔重複〕 SA3401材木堀、SX3388整地層と重複し、これらより古い。なお、SX3388とは平面上で新旧関係を検出し、断面観察するため重複部分に断ち割りを行ったが、SK3402は残存状況が悪く、断ち割り部分の北壁ではその延長を確認できなかった。

〔規模〕 平面は不整形で、東西0.8m、南北1.0m、深さ13cmで、断面は皿状で底面には凹凸がある。

〔埋土〕 1層で、焼土や炭化物をわずかに含み(図版24u-u)、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕 平瓦が出土し、この中には焼瓦が認められる。

〔SD3396溝〕(平面図:図版17、断面図:図版30)

〔検出〕 調査区北東隅で検出した南北方向の溝である。遺構確認面は岩盤である。

〔方向〕 南北基準線上である。

〔規模〕 検出長3.4m、上幅1.4~1.7m、下幅0.9~1.1m、深さ20cmで断面は逆台形である。北端は東西0.8m、南北0.9mの範囲が土坑状に窪み、深さは40cmである。

〔堆積土〕 3層あり、いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕 瓦が出土したが取り上げていない。

〔SD3397溝〕(平面図:図版17、断面図:図版19)

〔検出〕 調査区北側で検出した東西方向の溝である。遺構確認面は北堆7層上面である。

〔重複〕 SX3390・3391整地層と重複し、これらより新しい。

〔方向〕 東西基準線上である。

〔規模〕 検出長2.7m、上幅0.3~0.5m、深さは30cmで、断面は逆台形である。

〔堆積土〕 2層あり、どちらも自然堆積である。

〔出土遺物〕 平瓦が出土した。

〔SD3398溝〕(平面図:図版11、断面図:図版13)

〔検出〕 調査区南壁中央で検出した北東-南西方向の溝である。遺構確認面はSX3387整地層上面である。

〔重複〕 SB3400A門南妻棟通りの柱穴と重複し、これより新しい。

〔方向〕 南北基準線に対して北で東に16°偏る。

〔規模〕 検出長1.7m、上幅0.3～0.4m、深さは20cm以上である。

〔堆積土〕 1層で、自然堆積である。

〔出土遺物〕 平瓦ⅡB類が出土した。

⑥その他の出土遺物

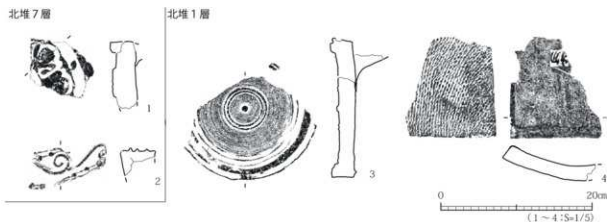
北・南堆積層、第1層から出土した遺物である。北堆1～9層は第Ⅱ層の上位に堆積し、南堆3e層には第Ⅱ層ブロックが含まれ南堆1～3c層はSX3387を覆っていることから、北堆1～9層と南堆1～3e層は第Ⅱ層より後に形成された10世紀前葉以降の層である。

【北堆1～8層】(図版33、第5～7表)

北堆8層から土師器環、須恵器環、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB類が出土した。須恵器環には底部の切り離しが回転糸切り無調整のもの、平瓦ⅡB類にはaタイプ2・bタイプがある。また、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。

北堆7層から須恵器環・高台杯・甕、軒丸・軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB類、石器が出土した。軒丸瓦には宝相花文422(図版33-1)、軒平瓦には偏行唐草文620(2)、平瓦ⅡB類にはbタイプがある。平瓦には「丸」の刻印瓦が含まれる。また、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。石器は石匙である。

北堆6層から土師器甕、須恵器甕、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅠC・ⅡB・ⅡC類、転用砥、鉄滓が出土した。平瓦ⅡB類にはbタイプがある。平瓦には「物」・「丸」の刻印瓦も含まれる。また、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。転用砥は須恵器甕の胴部内面を利用したものである。鉄滓(図版39-4)は椀形滓の可能性はある。



No.	層	種類	残存	法量	特徴	写真図版	登録	番番号
1	北堆 7層	軒丸瓦	破片	厚さ: (3.2)	宝相花文422	39-2	FC9	B16010
2	北堆 7層	軒平瓦	瓦当部1/3	厚さ: (3.1)	偏行唐草文620bタイプ 断面ナダ	39-3	R40	B16010
3	北堆 1層	軒丸瓦	瓦当部2/3	瓦当面径: (18.4) 厚さ: 3.0	唐園文241 瓦当面にロコ目 縦目 中房に范歯	39-5	R51	B16011
4	北堆 1層	平瓦	破片	厚さ: (2.1)	B自製aタイプ1 断面に刻印文字跡A	39-6	R53	B16011

図版33 北堆1・7層出土遺物

北堆3層からロクロ整形と考えられる土師器坏、須恵器甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類、転用砥が出土した。平瓦ⅡB類にはaタイプ1がある。また、丸瓦Ⅱ類、平瓦には焼瓦が認められ、そのなかには「丸」Aの刻印瓦も含まれる。転用砥は須恵器甕の胴部を利用したものである。

北堆2層から丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類が出土した。平瓦ⅡB類にはbタイプがある。また、丸瓦、平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。

北堆1層から土師器坏、須恵器坏・高台坏・長頸瓶・甕、軒丸瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅠB・ⅡB・ⅡC類が出土した。軒丸瓦には重圏文241(図版33-3)、重弁蓮花文がある。丸瓦ⅡB類には「田」Aの刻印瓦も含まれる。平瓦ⅠB類にはbタイプ、ⅡB類にはaタイプ1・2・bタイプがある。平瓦ⅡB類aタイプ1には「物」Aの刻印瓦も含まれる(4)。また、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB類・ⅡB類aタイプ2には焼瓦が認められる。

【南堆1～3層】(図版34、第5～7表)

南堆3d～g層から土師器坏、須恵器坏・甕、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB・ⅡC類が出土した。平瓦ⅡB類にはaタイプ1・bタイプがある。丸瓦ⅡB類、平瓦には焼瓦が認められる。

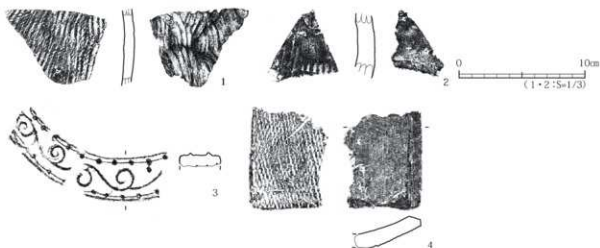
南堆2層からロクロ整形の土師器坏、須恵器坏・鉢・長頸瓶・甕、灰陶器壺または瓶(図版39-8)、中世陶器甕、軒丸・軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB・ⅡC類、転用砥が出土した。須恵器には外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が認められ、胎土に海綿状骨針が含まれる甕(図版34-1)、大戸窯産の広口瓶と考えられるものがある。中世陶器甕(2)の外面には、糜状の押印が認められ、胎土・色調から常滑窯産の可能性がある。転用砥は須恵器瓶・甕の胴部が利用され、なかには大戸窯産の瓶も認められる。軒丸瓦の瓦当文様は不明である。軒平瓦には偏行唐草文620(3)、平瓦ⅡB類にはaタイプ・aタイプ1・2・bタイプがある。そのなかには凸面にヘラ書きされたものも含まれる(4)。また、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅡB・ⅡB類aタイプ2には焼瓦が認められる。

南堆1層からロクロ整形の土師器坏・甕、須恵器坏・鉢・長頸瓶、軒丸・軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類、転用砥が出土した。軒丸瓦には重弁蓮花文(図版34-5)、重圏文(6)、軒平瓦には均整唐草文721A(7)、偏行唐草文620(8)がある。平瓦ⅡB類にはaタイプ1がある。また、丸瓦Ⅱ類、平瓦には焼瓦が認められる。転用砥は須恵器甕の胴部や丸瓦凹面を利用したものである。

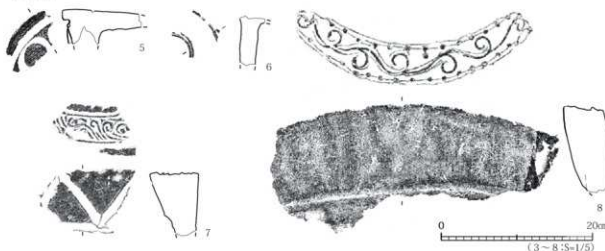
【第1層】(図版35・36、第5～7表)

土師器坏・高台坏・埴・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・長頸瓶・甕、近世陶器、軒丸・軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡA・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅠB・Ⅱ・ⅡA・ⅡB・ⅡC類、転用砥、鉄製品、鉄滓、石器が出土した。須恵器長頸瓶(図版36-5)は大戸窯産で、内面にカキメが施されている。近世陶器は肥前産の呉器手碗である(註1)。軒丸瓦には細弁蓮花文310A、細弁蓮花文310B(図版35-1)、歯車状文427(2)、細弁蓮花文ないし宝相花文(3)、重弁蓮花文(4)、重圏文の可能性のあるもの、細弁蓮花文ないし歯車状文、軒平瓦には偏行唐草文620(5・6)がある。丸瓦Ⅱ類には「伊」、ⅡB類には「田」A(8)の刻印瓦が含まれる。丸瓦Ⅱ類(13～15)にはヘラ書きされたものがある。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅠB類にはbタイプ、ⅡB類にはaタイプ・aタイプ1・2・bタイプがある。この他に分類不明だが、凸面に縄叩き目、凹面に等間隔の凹凸と、それを覆う縄叩き目がみられるものがある(7)。

南堆2層



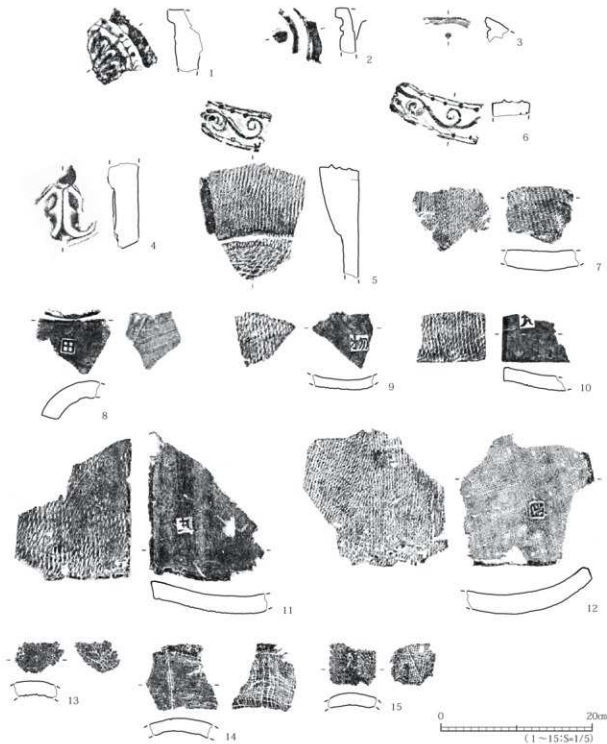
南堆1層



(単位:cm)							
No.	層	種類	西存	法量	特徴	写真図版	登録番号
1	南堆 2層	須恵器 甕	胴部		外:平行タタキ 内:同心円当て具痕 胎土に陶師杖青針含む	39-7	R64 B16011
2	南堆 2層	中世陶器 甕	胴部		外:ヘラケズリ一層状の押目 内:ナデ 常滑産	39-9	R60 B16011
3	南堆 2層	軒平瓦	瓦当部4/5	厚さ:5.4	編行唐草文820aタイプ 瓦当裏面にヘラケズリ 珠文に范傷	39-10	R57 B16011
4	南堆 2層	平瓦	破片	厚さ:(2.1)	目形類 凸面にヘラ書き1/1	39-11	R59 B16011
5	南堆 1層	軒丸瓦	破片	瓦当部厚さ:(4.0) 丸瓦部厚さ:(2.0)	垂弁蓮花文 丸瓦部凸面にヘラ書き「×」形 垂弁に赤切り痕	39-12	R68 B16012
6	南堆 1層	軒丸瓦	破片	瓦当部厚さ:(2.5)	垂蓮文 瓦当面にロクロ目	39-13	R69 B16012
7	南堆 1層	軒平瓦	瓦当部1/3	瓦当部厚さ:6.4	均整唐草文721Aaタイプ 裏面:刷書文	39-14	R128 B16012
8	南堆 1層	軒平瓦	瓦当部ほぼ完形	厚さ:5.5 瓦部厚さ:(2.0)	編行唐草文820bタイプ 裏面:ナデ 珠文に范傷 木目	39-15a-b	R71 B16012

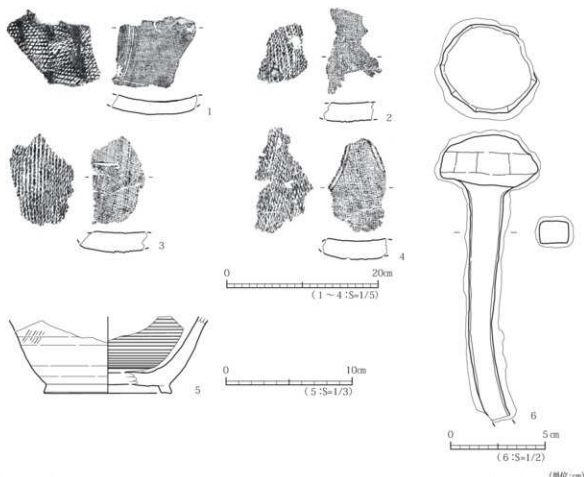
図版 34 南堆1・2層出土遺物

平瓦ⅡB類には「物」A(9)・「丸」A(10)・「丸」B(11)、ⅡC類には判読不明の刻印が施されたものが含まれる(12)。平瓦ⅠB類(図版36-1)、Ⅱ類(2)、ⅡC類(3・4)にはヘラ書きされたものがある。また、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。転用砥は須恵器蓋・甕の胴部を利用したものである。鉄製品(6)は大型の釘、石器は石匙と剥片である。



No.	種類	残存	数量	特徴	写真図録	図録	番号
1	軒丸瓦	破片	瓦当部厚さ: (3.6)	細弁蓮花文310B	40-1	R90	B16013
2	軒丸瓦	破片	瓦当部厚さ: (2.0)	曲帯状文427	40-2	R82	B16013
3	軒丸瓦	破片	瓦当部厚さ: (3.3)	角縁部に珠文1個残存 細弁蓮花文or宝相花文	40-3	R85	B16013
4	軒丸瓦	瓦当部1/5	瓦当部厚さ: (4.1)	重弁蓮花文	40-4	R130	B16013
5	軒平瓦	瓦当部1/4	瓦当部厚さ: (5.2 平瓦部厚さ: (2.0)	編行唐草文620aタイプ 裏面: 縄印き目 平瓦部目目型aタイプ1	40-5	R88	B16013
6	軒平瓦	瓦当部1/3	瓦当部厚さ: (4.9)	編行唐草文620aタイプ 瓦当裏面: ヘタキゼミ	40-6	R90	B16013
7	平瓦	破片	厚さ: (2.5)	凸面: 縄印き目 凹面: 等間隔の凹凸一直交方向に縄印き目	40-7	P97	B16014
8	丸瓦	破片	厚さ: (2.4)	B凸面 凸面に刷印文字「田」A	40-8	R109	B16016
9	平瓦	破片	厚さ: (1.4)	B凸面 凹面に刷印文字「物」A	40-9	R100	B16015
10	平瓦	破片	厚さ: (1.9)	B凸面 凹面に刷印文字「丸」A	40-10	R102	B16015
11	平瓦	1/4	厚さ: (2.2)	B凸面 凹面に刷印文字「丸」B	40-11	R103	B16015
12	平瓦	1/3	厚さ: 2.5	B凸面 凹面に刷印文字「口」	40-12	R104	B16015
13	丸瓦	破片	厚さ: (1.8)	B凸面 凹面にヘタ書き「×」	40-13	R110	B16016
14	丸瓦	破片	厚さ: (1.8)	B凸面 凸面にヘタ書き「」	40-14	R111	B16016
15	丸瓦	破片	厚さ: (1.6)	B凸面 凹面にヘタ書き「×」a,b	40-15	R112	B16016

図版 35 第1層出土遺物(1)



No.	種類	残存	寸法	特徴	写真記録	登録	調査号
1	平瓦	破片	厚さ:11.9	I 甲類・タイプ 凸面・唇子突き目 凹面にへら書き「口」	40-16	R108	B16010
2	平瓦	破片	厚さ:12.4	II 類 凹面にへら書き「」	40-17	R105	B16015
3	平瓦	破片	厚さ:12.6	II 乙類 凹面にへら書き「口」	40-18	R106	B16015
4	平瓦	破片	厚さ:12.3	II 乙類 凹面にへら書き「口」	40-19	R107	B16015
5	須恵系 長頸瓶	胴下半～底1/6	底径:(10.0)	外:ロクナダ 平行タタキ 内:カキメ 底:同輪へら切の無調整 内面に自然 輪・灰付着 高台は台形状 大戸痕	40-20	R116	B16016
6	鉄製品	鉄釘	2/3 長:(15.0) 胴部径:5.3 幅:1.4 厚さ:1.2	胴部は円形に近いがゆるい角をもつ 断面方形	40-21	R125	B16016

図版 36 第1層出土遺物(2)

(2) B区

調査区が立地する地形は、北東から南西方向に標高を下げながら傾斜する緩斜面である(図版2・3-8)。第17次調査区の位置を明確にするため南北方向のトレンチを設定した(図版41)。その結果、N335の線上で第17次調査区南壁、N335・W513の地点で南東隅、N337～339・W514～516の範囲で土層観察用ベルトを検出し、調査区がN335～363・W498～525の範囲に位置することを確認した(図版2)。層序については、5層確認したが、基本層序に位置づけたのは、表土と地山のみである。第1層は、現代の表土が1a層、第17次調査区の埋め戻し土が1b層である。厚さは1a層が10～14cmである。第II層は明褐色(7.5YR5/6)砂質シルトの地山である。その他の3層は自然堆積層で、これらについては、調査区の面積の関係で分布範囲を確認することが出来なかったことから、堆積層として扱うこととした。堆積層1層は褐色(7.5YR4/3)シルト、堆積層2層は暗褐色(10YR3/3)シルト、堆積層3層は褐色(7.5YR4/4)シルトである。



図版 37 SB3400A 門、SX3388・3390 整地層出土遺物写真



図版 38 SX3390 整地層、SX3389 切り通し状遺構、SK3392・3399 土坑出土遺物写真



1 : SK3392. 2・3 : 北堆7層. 4 : 北堆6層. 5・6 : 北堆1層
7・8・9・10・11 : 南堆2層. 12～15 : 南堆1層

(4・7～9 : S=1/3. それ以外は S=1/5)

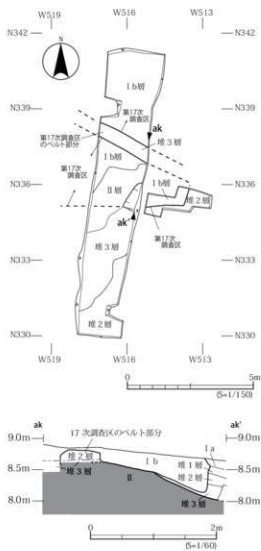
図版 39 SK3392 土坑、堆積層出土遺物写真



図版 40 第1層出土遺物写真

(20 : S=1/3, 21 : S=1/2, それ以外は S=1/5)

調査では、東壁の断面観察部分のみ一部掘り下げたが、それ以外は平面検出のみにとどめている。遺構は認められなかった。遺物は堆積層2層から丸瓦、第1層から土師器、須恵器、丸・平瓦が出土した。



図版 41 B区 平面・断面図、写真

3. 総括

(1) 遺物について

土器、灰軸陶器、中世陶器、近世陶器、瓦、転用砥、鉄製品、鉄滓、石器が出土し、瓦が主体を占める(註2)。遺物の時期は古代が主体で、ごくわずかに古代以前、中世以降の遺物が認められる。量・種類ともに第1層からの出土が多く、遺構からの出土は少ない(第5～7表)。以下、種類ごとに特徴的なものと時期について記述する。

1) 瓦

破片数で6359点(総重量660.55kg)出土した。遺構別・層位別に集計した軒丸・軒平瓦の型番、丸・平瓦各型の出土状況は第6・7表に示した通りである。その内訳は軒丸・軒平瓦32点(重量12.06kg)(註3)、丸・平瓦6327点(重量648.49kg)である。なお、軒丸瓦のうち、范傷を確認できた細弁蓮花文310A・310Bについては、『図録編』に掲載されている多賀城跡出土瓦の分類の根拠となっている資料(以下、基準資料)と比較し、現段階で推定される相対的な順序を検討する。

① 軒丸瓦

A. 概要

細弁蓮花文310A(図版21-1)、細弁蓮花文310B(図版35-1)、宝相花文422(図版33-1)、歯車状文427(図版35-2)、重圏文241(図版33-3)、この他に型番不明の重弁蓮花文(図版29-2・34-5・35-4)と重圏文(図版34-6)がある。時期が分かるものについては241が第Ⅱ期、310Aが第Ⅲ期、310B・422・427が第Ⅳ期である。

B. 范傷について

范傷が認められたのは、SX3390整地層下層出土の細弁蓮花文310A(図版21-1)、第Ⅰ層出土の細弁蓮花文310B(図版35-1)、北堆Ⅰ層出土の重圏文241(図版33-3)の3点である。

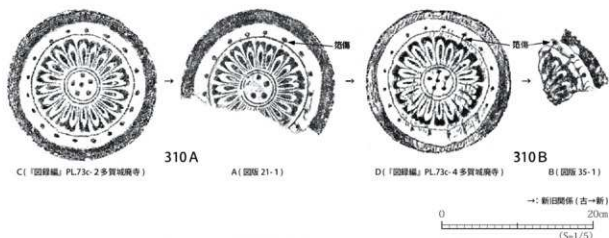
〔細弁蓮花文310A・310B〕

第93次調査で出土した310A(図版42-A)の文様は鮮明であるが、珠文の一部に范傷が認められる。310B(B)の文様は不鮮明で、(A)にみられる范傷もみられる。一方、310Aの基準資料(C)の文様は鮮明で、范傷はみられない。したがって、(A)より古い。(B)は310Bの基準資料(D)と比較すると文様は不鮮明で、范がより摩耗した段階に製作されたものである。また、(D)には(A)にみられる范傷も確認できる。

以上のことから、范傷の有無という点で(A)は310Aのなかでも310Bに近い特徴をもっており、製作年代は第Ⅲ期のなかでも新しい方に位置付けられる。現段階で推定される相対的な順序は(C)→(A)→(D)→(B)となる。

〔重圏文241〕

図版33-3は圏線・ロクロ目が鮮明であるが、中房に縦方向の范傷が認められるため(図版39-5)、同范瓦のなかで最も古い個体ではないと考えられる。



図版 42 細弁蓮花文軒丸瓦 310A・310Bの相対的順序

②軒平瓦

A. 概要

偏行唐草文620(図版33-2・34-3・8・35-5・6)、均整唐草文721A(図版34-7)がある。時期については620が第Ⅱ期、721Aが第Ⅲ期である。

B. 偏行唐草文620について

今回の調査で8点出土した。620については、これまでの多賀城跡の調査で計176点出土しているが、このうち164点は政庁地区からの出土である(『本文編』・『補遺編』)(註4)。大半が政庁地区から出土し、第93次調査での出土数は次いで多い。これらのなかで、北堆7層の1点(図版33-2)、南堆2層の1点(図版34-3)、南堆1層の1点(8)、第1層の2点(図版35-5・6)の5点については、全体的な文様構成は同じであるものの唐草文の太さや珠文の大きさ、顎面調整・接合技法、胎土に違いが認められた。以下、その詳細を記述する(註5)。

620は顎面調整技法と平瓦との接合技法の違いによってa・bタイプに分けられる(『本文編』)。aタイプは3点(図版43-A・B・C)、bタイプは2点(D・E)ある。

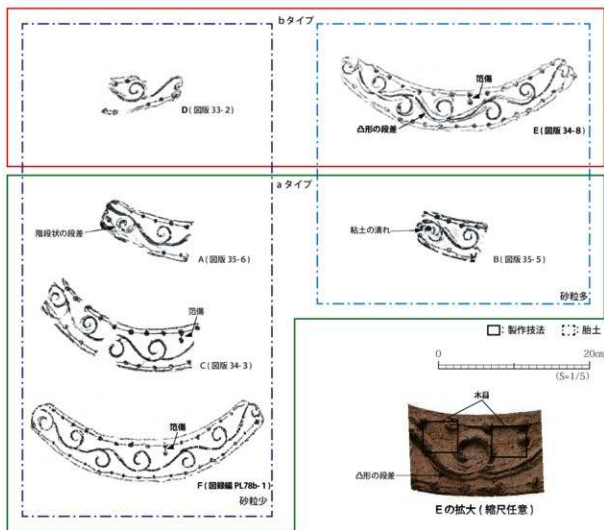
(A)は左側端部付近の破片資料である。端部近くの唐草文には階段状の段差が認められる。胎土はほとんど砂粒を含まないが、粗い。

(B)は左側端部付近の破片資料である。端部近くの唐草文は潰れている。胎土は砂粒を多く含み、粗い。

(C)は左側端部から中心部付近にかけての資料である。珠文には範傷が認められる。今回出土した620と比較すると、唐草文の幅は太く、珠文は大きい。胎土は砂粒をほとんど含まず、緻密である。

(D)は右側端部付近の破片資料である。唐草文の幅は後述する(E)と同様である。胎土は砂粒をほとんど含まず、緻密である。

(E)はほぼ完形の資料である。唐草文の幅は他と比べて細い。右側端部付近以外の唐草文の両脇には段差が認められ、断面は凸形を呈する。珠文には範傷、中心部に範の木目が認められる。胎土は



図版 43 偏行唐草文軒平瓦 620

砂粒を多く含み、粗い。

第93次調査で出土した620は、顎面調整・接合技法、胎土に違いが認められたが、全体的な文様構成は同じであることから、製作には同じ范が使用されたものと考えられる。したがって、(A)・(B)・(E)にみられる唐草文の段差ないし粘土の濃れは、①范の唐草文部分に粘土紐を詰める、②さらに粘土塊を詰めて互当を成形する、といった製作手順が反映されたものと考えられる。また、(C)の唐草文が太く、珠文が大きいのは、焼成時における粘土の収縮率の差に起因すると考えられる。なお、620の基準資料(F)には、珠文の范傷、中心部に范の木目が認められることから、今回出土した620は基準資料と同じ特徴をもつものと考えられる。

③平瓦

I・I A・I B・I C・II・II A・II B・II C類がある。時期は第I～IV期であるが、第I期が少なく、第II・IV期が多い。

図版22-1は一枚作りで凸面に糸切り後のナデ調整と凹型台側端部圧痕、凹面には糸切り後の布目とナデ調整が認められる。側端部圧痕がみられるため、II B類bタイプに類似するが、II B類bタイプは凸面に縄叩き目を残し、ナデ調整は行われない。類似する資料は、与兵衛沼窟跡新堤地区で出土しており、凸面に糸切り後の縄叩き目と凹型台側端部圧痕、凹面には糸切り後の布目とナデ調整が認められる(仙台市教育委員会2010)。Iは厳密にはこれまでの多賀城跡における平瓦の分類に当てはまらないが、一枚作りであること、凸面に凹型台側端部圧痕、凹面に布目とナデ調整が認められること、出土量が少ないことから、現段階では広義のII B類に含めておきたい。

図版31-2・3はII C類で、凹面に方形の突出が確認できる。2の突出は広端部の側面近くに2箇所あり、ともに布目を残している。3の突出は狭端部に1箇所あり、ナデが施されている。いずれも凸型台に方形の窪みを彫り込んだものの圧痕と考えられる。II C類で方形突出が確認できるものは、五本松窟跡で出土しているが、凸面に凹型台方形突出をもつ点が異なる(仙台市教育委員会1987)。

④刻印・ヘラ書き瓦

刻印瓦が20点、ヘラ書き瓦が8点出土した。刻印は丸瓦II・II B類の丸瓦部凸面、平瓦・平瓦II B・II C類の凹面に押印されている。刻印には文字を押印したものが18点(「物」・「物」A・「丸」・「丸」A・B・「田」A・「伊」)、判読不明なものが2点ある。

図版22-3は丸瓦II類に押印されており、平面形は方ないし長方形で輪郭線はなく、陽刻である。類似しているのは「伊」の下半部であるが(図版29-3)、それに比べると刻印の線が細い。

図版35-12は平瓦II C類に押印されており、平面形は方形で輪郭線があり、陰刻である。

時期は12が第四期、判読できた18点については第II期である。

ヘラ書き瓦は断片的な資料で、判読不明なものが多い。丸瓦II類の凹・凸面、平瓦II・II C類の凹面、I B・II B類の凸面にヘラ書きされている。

2)土器

土師器52点、須恵器131点、灰軸陶器1点、中世陶器1点、近世陶器1点、縄文土器と考えられるもの2点である。大半が第I層出土で、堆積層出土がそれに次ぐ。遺構からの出土は少ない(第5表)。

①土師器

年代の検討可能なものは、SX3389切り通し状遺構出土の坏(図版29-1)で、灰白色火山灰層である第II層直下の堆積土上面から出土した。ロクロ整形で底部の切り離しが回転糸切り無調整である。器壁が薄く口径に対し底径が小さく、内面には放射状のヘラミガキが施されており、この特徴は多賀城跡出土土器編年のE群土器に比定される(白鳥1980)。E群土器は灰白色火山灰の上下から出土が認

められるが、SX3389出土土器はその下位から出土したものである。類似するものに第61次調査の鴻の池地区第10層で出土した土器(『年報1991』)があり、これらは9世紀第3四半期～10世紀前葉に位置づけられている(『年報1997』)。したがって、この土器は9世紀第3四半期～10世紀前葉と考えられる。

②大戸窯産須恵器

長頸瓶5点、広口瓶と考えられるもの1点の計6点が出土した。長頸瓶はいずれも第1層、広口瓶と考えられるものは南堆2層出土である。長頸瓶(図版36-5)は、胴下部から底部にかけての破片である。高台の接地面が外側から内側へ斜めに上がる台形状で、8世紀後半から9世紀中頃に比定される南原33号窯式～19号窯式の範疇に収まると考えられる(会津若松市教育委員会1994)。

③灰釉陶器

壺または瓶(図版39-8)が、南堆2層から出土した。胴部の小破片で、外面に灰オリーブ色の自然釉が付着している。胎土は緻密で全体に灰白色を呈し、白色粒や黒色粒を少量含んでいる。胎土の特徴から東海西部産と考えられる(『施釉陶磁器』)。

3)その他

大型の鉄釘(図版36-6)が第1層から出土した。断面方形の角釘で、頭部は円形に近いが稜が認められ、緩い角をもっている。円頭にしようとした際の鍛打痕跡か、あるいは意図的に多角形の頭にしようとしたものなのかは不明である。こうした大型の鉄釘は、多賀城跡では南門地区で5点認められている(『外郭1』)。したがって、今回検出した門に用いられていた可能性がある。

鉄器生産に関わる遺物は、鉄滓2点(うち椀形滓と考えられるもの1点)、転用砥14点がある。転用砥は須恵器蓋・瓶・甕、丸瓦の破片を利用したものである。出土層は北堆6層から椀形滓と考えられるもの(図版39-4)、鉄滓が第1層、転用砥は北堆6層から1点、北堆3層から2点、南堆2層から3点、南堆積層1層から2点、第1層から6点である。これらの出土遺物から、鍛冶遺構は検出されていないが、近隣で鉄器生産活動が行われていたと考えられる。

(2)遺構

発見した遺構は、門、築地塀、材木塀、整地層、切り通し状遺構、土坑、溝、ピットである。以下では、A区の遺構を対象に、遺構の年代と変遷、そして個別の遺構について検討を行う。

1)遺構の年代と変遷

遺構の重複関係と対応関係から遺構期を設定し、各遺構期の様相、年代を検討して変遷をまとめる。

①重複関係と対応関係

A区では南部と北部で遺構の分布が異なる。そのため、最初にそれぞれで遺構の重複関係と、埋土や堆積土に含まれる焼土や炭化物に注目して遺構の変遷を検討し、その後、南北の遺構の対応を行う。

A. 南部の変遷

〔重複関係〕SX3385～3387整地層は、自然堆積層を挟んでSX3385、SX3386、SX3387の順に変遷し、このうち、SX3386の直下に堆積する南堆6層上面には焼土と炭化物が認められる。

SB3400門はA→Bの順に変遷する。SB3400AについてはSX3387上面で検出し、掘方埋土に焼土と炭化物を含むSA3401材木堀、焼土と炭化物を多量に含む土で埋め戻されているSK3399土坑より新しく、SD3398溝より古い。SX3387はSB3400Aの南半に分布し、この範囲の平坦面の造成を目的とした整地層と考えられる。SX3387は後述するSF220a築地層の基礎整地層であるSX3388と一連の整地で、SF220aの基礎整地層の想定も成り立つが、多賀城の外郭区画施設の築地層は地形の傾斜に沿って造られる例が多いこと、丘陵から低湿地へ傾斜する斜面が平坦に整地され、その上面でSB3400Aの柱穴が検出されたことから、SX3387はSB3400A建設に伴う整地層と推定される。

SD3398はSB3400Bと重複はないが、位置関係からSB3400Bに伴うとは考えられず、これより新しいと推定される。SA3401は埋土に焼土と炭化物が含まれるSK3402土坑より新しい。

〔変遷〕焼土と炭化物を埋土に含む遺構が調査区南半にかけて認められることから、周辺で何らかの火災が生じたことが推定される。したがって、変遷は、〈SX3385〉→〈火災〉→〈SX3386、SK3402〉→〈SA3401、SK3399〉→〈SB3400A・SX3387〉→〈SB3400B〉→〈SD3398〉となる。

B. 北部の変遷

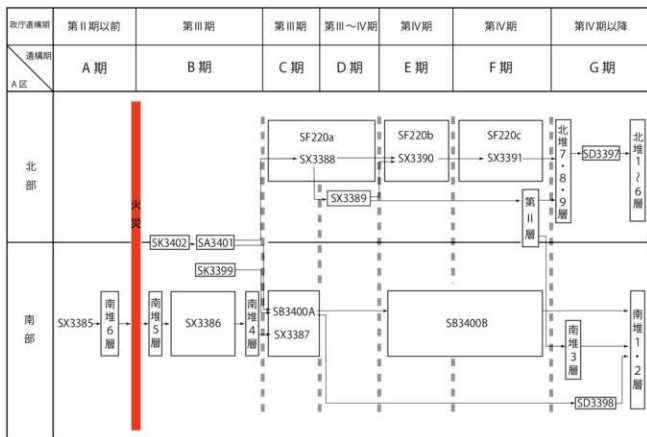
〔重複関係〕SF220はa→b→cの順に変遷し、SF220aの基礎整地層であるSX3388は、SA3401とSK3402より新しく、SK3393土坑より古い。また、SX3389切り通し状遺構はSX3388より新しく、SF220bの基礎整地層であるSX3390より古い。SD3397溝はSF220cの基礎整地層であるSX3391より新しい。なお、SD3396溝は堆積土の特徴が表土に類似し、他の古代の遺構とは異なることから、SF220より新しいと考えられる。

〔変遷〕SA3401から南部と同じく火災を想定すると、変遷は、〈火災〉→〈SK3402→SA3401〉→〈SF220a・SX3388〉→〈SX3389〉→〈SF220b・SX3390〉→〈SF220c・SX3391〉→〈SD3396・3397〉となる。

C. 遺構期の設定

南部と北部で想定された火災の存在から、SX3385以外は全て火災後の遺構と考えられる(図版44)。また、丘陵部でのSX3388の盛土整地にあたっては、地山であるシルト層や岩盤が削られて平坦面が造成され、低地へ至る沢状地形の凹地は、岩盤由来の小礫や礫が多量に含まれるSX3387により平坦化され、北側の岩盤上面とも高低差がなくなる。SX3387はその含有物の特徴から、SX3388の造成により生じた礫やシルトを盛土素材にしたことが想定され、したがって、SX3387・3388は丘陵部から凹地部分の範囲を平坦化する一連の地業と考えられる。SX3387はSB3400Aと、SX3388はSF220aに伴うことからこれらは同時期のもので、これより古いSA3401とSX3386、これより新しいSB3400BとSF220b・SX3390が伴うと考えられる。なお、SF220cとSX3391に対応する門については、SB3400が2時期のみの確認であるため、礎石式であるSB3400Bが存続したと推定される。

以上より、南部と北部の遺構については、A～Gの7期に大別できる(図版44)。火災前のA期：SX3385、火災後で後述するように外郭区画施設が材木堀となるB期：SA3401・SX3386、SK3399・3402、



図版 44 A区 遺構の重複関係

門の建設と外郭区画施設が築地塀になるC期:SB3400A・SX3387とSF220a・SX3388、切り通し状遺構が造られるD期: SX3389、門と築地塀が改修されるE期: SB3400BとSF220b・SX3390、門は存続し、築地塀のみ改修されるF期: SB3400BとSF220c・SX3391、門と築地塀の廃絶後であるG期: SD3396～3398である。

②遺構期の様相

A～G期について、遺構の理解と遺構期の様相を検討する。

A期 (図版45・46)

A期はSX3385により整地がなされる時期である。SX3385は、上面の標高が北側で検出された岩盤の標高よりも低く、分布範囲がこれ以後に同位置で認められるSX3386・3387整地層よりも東西・南北方向ともに狭い。したがって、一定の範囲に平坦面を造成するというような整地ではなく、調査区南部の南から北方向に入り込む沢状地形の凹地に部分的に施した相対的に小規模な整地であったと推定される。その性格については限定的な確認であるため不明である。

B期 (図版45・46)

B期はSX3386により整地がなされ、SA3401、SK3399・3402が造られる時期である。

SA3401は、検出された位置から外郭西辺の区画施設と考えられる。ただし、北側がSX3388に、東側がSB3400建設に関わる造成により破壊され、南側も調査区内では検出できていない。平面形は城内側へ直角に屈曲する「L」字形である。類例には、第53・54次調査において第Ⅱ期の外郭東門付近で検出されたSA1769材木崩があり、これは伊治公皆麻呂の乱により焼失した東門に代わって建てられた第Ⅲ-1期のSB1768棟門に接続する崩である(『年報1988』)。SA1769の平面形は西側の城内に入り込む「コ」字形で、SB1768の北側では、SB1768の柱穴から北に約5.4m延び、そこから東に直角に折れ曲がり約5.8mで外郭東辺に接続する。SA3401は規模が不明で、SA1769とは外郭区画施設との取り付け方が異なるが、その平面形を参考にとすると、SA3401も本来的には東側の城内方向に「コ」字形に入り込むものと推定され、さらに、接続する門が存在する可能性がある。

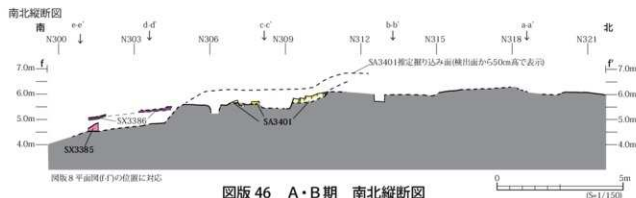
SA3401は残存する深さが9～29cmであった。SA1769は掘方の深さが80cmであり、これを参考にすると、SA3401はC期のSX3388により50～70cm程度削平され、SA3401造成時の旧地形は、丘陵部での表面の凹凸や、沢状地形との高低差が大きかったと推測される(図版46)。

SX3386は、A期のSX3385の直上に堆積する南堆6層により埋積が進み、丘陵斜面の傾斜が緩やかになった沢状地形の凹地に施されている。整地層中には沢状地形に堆積した自然堆積層由来の小ブロックが多量に含まれ、岩盤由来の小礫はわずかである。丘陵部の地山を削った痕跡は限定的で、かつ層の厚さは20cm以下であり、凹地部分を対象とした地業と考えられる。その目的としては、SA3401造成に伴い行われた盛土整地と推定される。非常に固くしまる特徴と、SA3401が城内側へ屈曲し、門の存在が推定される範囲に分布することから、門に接続する道路の路面であった可能性もある。



図版 45 A・B期の遺構

A期 (SX3385)、B期 (SA3401、SX3386)

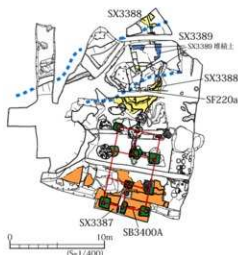


図版 46 A・B期 南北縦断面図

C期 (図版47・48)

C期はSX3387・3388による整地がなされ、SB3400AとSF220aが造られた時期である。地形の改変と門建設、築地塀の造成と、各遺構期の中で最も規模の大きな造成が行われた。

SX3387はSB3400A、SX3388はSF220aの基礎を造成した整地層で、SX3387とSX3388は一連の地業と考えられる。SX3388に伴う造成では、SA3401とSA3401が立地していた丘陵部を50~70cm程度削平したと推定される。削られた岩盤礫を多量に含むシルト土はSX3387として調査区南部の沢状地形の盛土整地に利用され、丘陵から沢状地形まで平坦化される(図版48南北縦断面図)。



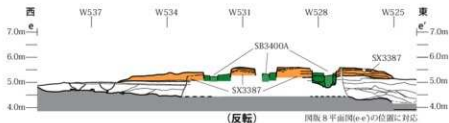
図版 47 C・D期の遺構

SX3387の東西方向の断面形は低平な台状で(図版48東西横断面図)、西縁は不明瞭だが、東縁については3m検出した。また、SX3387北側のSB3400AB北半を検出した岩盤の面と調査区東壁では約30cmの高低差があり、その法面は緩やかな傾斜である(図版26z-z')。岩盤の面と法面によって形成される縁は、SX3387東縁の北側延長線上に位置し、倒木箇所4まで2.5m分を確認できる(図版10)。その縁の東裾部は岩盤で、その直上には南堆3e~g層が堆積し、3e層には第II層小ブロックが含まれる。したがっ

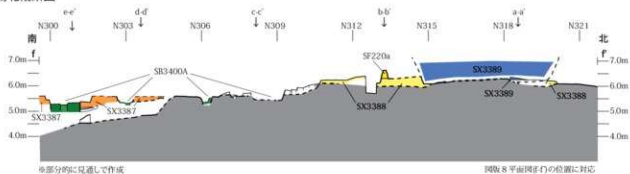
C期 (SB3400A・SX3387・SF220a・SX3388)

D期 (SX3389・SF220a・SX3388)

東西横断面図



南北縦断面図



図版 48 C・D期 東西横断面図、南北縦断面図

て、この裾部から東壁までの岩盤面は古代の遺構面であり、後世の削平の影響は限定的と考えられる。SX3387東縁とその北側の縁は、SB3400A東側柱列に平行し、柱穴の東辺からの距離は前者が1.1～2.0m、後者が1.2mである。第53・54次調査では、第Ⅱ期の外郭東門であるSB1762の基壇が残存しており、門の西側柱列では基壇の西縁まで1.3mあることが確認されている(『年報1988』)。これによると、SX3387東縁の一部とその北側の縁はSB3400Aの基壇の東縁の位置を反映している可能性があり、したがって、SX3387については、明確に基壇築成土を確認できていないが、門の基礎となる平坦面とともに基壇の造成を目的とした整地層、北側の岩盤の縁についても基壇造成に関わる削り出しの可能性もある。

SB3400Aは、丘陵部とSX3387により拡幅された平坦面上に建設される。掘立式の八脚門で、規模は桁行総長8.2m、梁行総長4.6m、中央間は3.2mである。方向は東に傾いており、その角度は外郭西辺と類似したものである(図版55)。側柱の底面標高は4.8～5.5mであり、この差は、5.5mの地点の底面が岩盤、4.8mの地点の底面が自然堆積層であることから、柱穴底面の地盤の強度に関わると考えられる。

SF220aはSX3388上に築造される。一部しか検出できておらず、方向や門との取り付け方は不明である。

D期(図版47・48)

D期はSX3389が造られた時期で、SX3389と重複していない部分においては、SF220a・SX3388も存在し、機能していたと考えられる。SB3400A解体やSB3400B建設とも時期が重複した可能性があり、C期とE期の移行期として位置づけられる。

調査区南西部から北部に位置し、SF220a・SX3388を長さ約5mにわたり南西—北東方向に切り通す遺構で、通路と考えられる。SX3388と岩盤が削られて、中央東寄りには長軸5.3m、短軸1.4m以上の、底面がほぼ平坦な土坑状の窪みが造られる。この窪みは、通行を容易にするために設けられたと考えられる。一定期間は機能していたが、その後埋め戻されて再度築地塀が築造されていることから、一時的な通路であったと考えられる。これまでの多賀城跡の調査で類似する遺構は認められず、初例である。

E期(図版49・50)

E期は門がSB3400Bに建て替えられ、築地塀がSF220b・SX3390に改修された時期である。門の礎石化と大型化、それに伴う整地層の拡張と基壇の造成、築地塀の改修と、C期に続く大規模な造成が行われた。

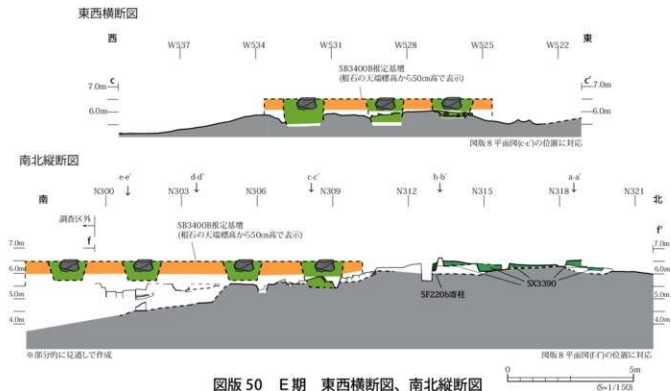
SB3400BはSB3400Aを礎石式に建て替えた八脚門である。礎石掘穴は4箇所検出され、柱間はすべて3.0mである。これは、多賀城跡で検出された礎石式八脚門では第Ⅲ・Ⅳ期の外郭南門と第Ⅳ期の外郭西門と類似する。掘穴は北東隅と北妻棟通りではSB3400Aの柱穴とほぼ同位置だが、西側柱列では柱穴より西に位置することから、SB3400BはSB3400Aを西・南側に拡張し規模を大きくしたものと考えられる。そして、この拡張に伴い、調査区外のため未検出ではあるが、SX3387の南端よりまさるに南側に整地がなされ、丘陵斜面の平坦化が行われたと想定される。

基壇は残存していないが、北東隅の掘穴に近接して位置する礎石の高さ(45cm)と、礎石掘穴に認められる根石の天端標高(6.0m)から、掘穴の掘り込み面である基壇上面は、掘穴の検出面から50cm程度上であったと推定される(図版50)。

SX3390はSX3389の埋め戻しとSF220aの嵩上げ整地である。SB3400B北側の南北約6mの範囲が平坦化され、SF220bの基礎が造られる。SF220bには掘立式寄柱が伴い、寄柱を結んだ線の南延長はSB3400Bの北妻棟通り付近に斜行するが、実際の門への取り付け方は接続部分が残存しておらず不明である。



E 期 (SB3400B、SF220b・SX3390)



F期 (図版51・52)

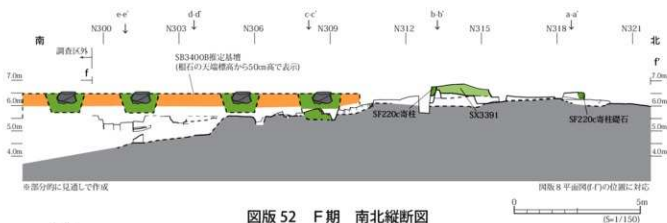
F期は、礎石据穴に改修された痕跡が認められないことからSB3400Bが存続し、築地塼がSF220c・SX3391に改修された時期である。

SF220c造成にあたっては、SF220bの積土が基底部まで削りとられ、SX3390と地点によってはSF220aの直上にSX3391の盛土整地がなされている。また、SF220cには礎石式寄柱が伴う。寄柱を結んだ線の南延長はSB3400Bの北妻棟通り付近に斜行するが、実際の門への取り付け方は接続部分が残存しておらず不明である。



図版 51 F期の遺構

F期 (SB3400B、SF220c・SX3391)



図版 52 F期 南北縦断面

G期

G期は門と築地塼が廃絶した後にSD3396～3398が造られた時期である。

その他

上記の遺構以外で、重複関係や配置などから遺構期を限定できないものにSX3403、SK3392～3395がある。SX3403は小礫を主体に瓦の小破片を含む整地層で、SX3387東縁の裾部に位置する。第Ⅱ層小ブロックを含む南堆3e層に覆われることから、F期には存在したと考えられるが、それ以前については不明である。なお、門に近接して小礫を敷き詰めた遺構には、第Ⅲ・Ⅳ期の外郭東門の西側で検出されたSX314小石敷路面(『年報1971・1994』)があり、外郭東門と西門を接続するSX2250東西道路の路面と考えられている。SX3403は、ごく一部の範囲で確認したため詳細は不明だが、外郭西北門から城内側への道路想定位置にあたることから、路面の一部の可能性もある。

SK3392は堆積土中から平瓦ⅡC類がまとめて出土しており、後述する遺構期の年代からE期あるいはF期のものと考えられる。SK3393は、C期のSX3388より新しくC期以降、SK3394・3395は、南堆6a層を掘り込み南堆5層に覆われていることからA期あるいはB期と推定される。

③遺構期の年代

遺構の重複関係と、埋土に含まれる焼土や炭化物により推定される火災との新旧関係に基づき、出土遺物から各遺構期の年代と政庁遺構期との対応関係を検討する。

今回の調査で想定した火災は、北側の第17次調査でも焼瓦や焼土が検出されていることから、広範囲にわたるものと推定される。後述するC期の年代と遺構の重複関係から、火災は第Ⅲ期以前と考えられ、この時期に多賀城跡で認められる規模の大きい火災には、宝亀11(780)年の伊治公哲麻呂の乱がある。したがって、想定した火災もこれに起因するものと考えられ、A期は火災との関係から、第Ⅱ期以前の可能性がある。

B期は、SA3401、SK3399・3402の埋土に焼土や炭化物が含まれ火災以後であること、重複関係よりC期のSB3400AとSX3388より古いことから第Ⅲ期で、その中でも古い段階と考えられる。類例となる第53・54次調査で検出されたSA1769の年代から、第Ⅲ-1期に相当する可能性がある。

C期は、SX3388から第Ⅱ期の劔印瓦で焼瓦、SX3387から第Ⅱ期の平瓦ⅡB類aタイプⅠが出土していること、第Ⅲ期以降の瓦が出土していないことから第Ⅲ期と考えられる。また、B期よりも新しいことから第Ⅲ期の中でも新しい段階で、第Ⅲ-2期に相当する可能性がある。

D期は、重複関係からC期のSX3388より新しくE期のSX3390より古いこと、第Ⅳ期の瓦が出土していないことから、第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけての時期で第Ⅲ期終盤から第Ⅳ期でも古い段階と推定される(註6)。

E期は、SX3390下層より第Ⅲ期の中でも新しい段階の細弁蓮花文軒丸瓦310Aと、第Ⅳ期の平瓦ⅡC類が出土していることから、第Ⅳ期と考えられる。

F期は、重複関係から第Ⅳ期で、寄柱の掘穴埋土や築地塀の基礎整地層に灰白色火山灰層である第Ⅱ層が認められないことから、造られたのは10世紀前葉以前と考えられる。

G期は、重複関係からSB3400BやSF220cが廃絶した後の時期で、古代以降と考えられる。

④変遷

以上より、各遺構期の概略をまとめると、次のようになる(図版44)。

- A期**：第Ⅱ期以前の可能性がある整地層である。この時期の外郭区画施設は不明である。
- B期**：伊治公哲麻呂の乱と考えられる火災後で、小規模な整地層と材木堀による外郭区画施設が設置される。時期は第Ⅲ期の古い段階と考えられ、第53・54次調査での類例から、B期は火災後の暫定的な復興で、第Ⅲ-1期に相当する可能性がある。なお、B期を第Ⅲ-1期と仮定すると、周辺には材木堀に伴う門に加えて、火災前の第Ⅱ期の門や外郭区画施設が存在することも予想される。
- C期**：大規模な造成により、掘立式八脚門と築地塀が造られる。時期は第Ⅲ期の新しい段階と考えられ、火災後の本格的な復興期である第Ⅲ-2期に相当する可能性がある。
- D期**：第Ⅲ～Ⅳ期で、築地塀を切り通すSX3389切り通し状遺構が造られる。SX3389は、これまでの多賀城跡の調査では類例が認められない特殊な遺構で、時期は第Ⅲ期終盤から第Ⅳ期の古

い段階に限定できる。この時期に多賀城の外郭区画施設が切り通されていることから、造成の契機は貞観11(869)年の陸奥国大地震で、SX3389は、その被害に対する城内の復旧・復興のために設けられた仮設の通路と考えられる。その際、約5m南にはSB3400が所在しており、近接して2つの通路が位置することになる。これについては、SB3400AからSB3400Bの建て替えが整地層や基壇の拡張という大規模な地業を必要とし、そのため通路として利用できなかったこと、SB3400B建設と城内の復旧・復興作業が同時並行で進められたことがその要因として考えられる。

E期：門が礎石式に建て替えられ、SX3389の埋め戻しと築地塼の改修が行われる。築地塼には掘立式寄柱が設置される。C期に続いて大規模な造成が行われた時期で、第IV期と考えられる。

F期：門がE期から存続し、10世紀前葉以前に築地塼が改修され、寄柱が礎石式になる。第IV期と考えられる。

G期：古代以降と推定されるが詳しい年代は不明である。

2) 遺構の検討

第93次調査で発見された外郭西北門と、外郭区画施設である築地塼について、これまでの多賀城跡の調査で確認された遺構との比較を行う。

①SB3400門

位置、立地、規模と構造についてまとめ、外郭西門との比較から両者の関係を検討する。

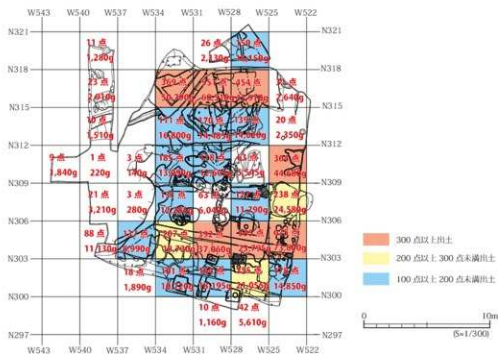
〔位置〕 政庁正殿から北西に約617m、外郭西門から北に約480m、座標では、N299～310・W526～533に位置し、門の中心はN304・W529である。

〔立地〕 巨視的には、低湿地へ向かって大きく張り出す丘陵先端部に立地する。外郭西門も同様の立地であり、多賀城の西辺ではこのような地形が門の設置位置に選ばれたと考えられ、その要因としては、周囲からの景観とともに、城内の官衙や城外の河川等の交通路との接続が意図されたと推定される。微視的には丘陵先端部から低湿地へ至る斜面に立地する。安定した地盤ではないが、門の背後に丘陵尾根が近接せず平坦面が確保でき、城内側に直線的な道路を造ることが出来るという地形的な要因により、この場所が選地されたと推定される。

〔規模・構造〕 SB3400Aは掘立式八脚門である。規模は桁行総長8.2m、梁行総長4.6mで、これまで多賀城跡で検出されている八脚門の中で最小である(第8表)。城内官衙で唯一八脚門が確認されている大畑地区のSB707よりも小さい。

SB3400Bは礎石式に構造が変化し、さらに規模が拡大して他の外郭各門と同規模となる。また、第IV期の軒丸瓦や平瓦が出土していること、SB3400周辺で瓦の出土量が多いことから(図版53)、屋根には瓦が葺かれていたと推定される。したがって、SB3400Bの段階になり、西北門の規模や外観の整備が進められ、多賀城内における位置づけが上がったと考えられる。

〔西北門と西門〕 西辺には第三期以降2箇所にも門が存在する。現状で外郭区画施設に門が2箇所確認されているのは、第I期外郭東辺のみである。ここでは、東辺中央の急斜面に面した丘陵先端部に



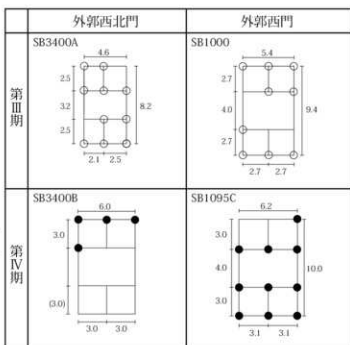
図版53 グリッド別瓦の出土状況

SB3030八脚門、国府津に想定されている

る塩竈から延びる丘陵尾根の南緩斜面にSB1761棟門が位置し、両者には位置や立地の他に、規模・構造に相違が認められる。この相違は、SB3030が形式を重視した門、SB1761が実用的な門という目的や役割を反映したものと考えられている(『年報2010』)。西北門と

西門については、第Ⅲ期(C期)の掘立式の西北門は西門よりも規模が小さく、第Ⅳ期(E期)の礎石式の段階になって、両者の規模や構造が同程度になる(図版54、第8表)。したがって、第Ⅲ期以降の外郭西辺においては西門が西北門よりも格式が高く、第Ⅲ期の掘立式の西北門の段階ではその格差が大きいが、第Ⅳ期の礎石式の段階では西北門の格が上がることでその差が小さくなったと想定される。

両者の比較から、第Ⅲ～Ⅳ期の外郭西辺においては西門が正式な門として機能していたと考えられ、西北門は低地との高低差が小さく、城外と接続しやすい立地であることから、実用的な役割を担った門と推定される。ただし、周辺の遺構の状況が不明であり、その具体的な役割については今後の課題である。



○:掘立柱 ●:礎石もしくは礎石掘穴 単位:m 上が北 S=1/400

図版54 外郭西北門と西門の模式図

遺構	位置	構造	遺構期 (年代)	規模				柱穴			文献			
				軒行		梁行		柱方		柱穴				
				総長	中央間	幅間	総長	片間	規模(m)	深さ(m)	柱径(m)	規模(m)	深さ(m)	
SB101A	政庁 南門	竪立式	I	9.8	4.2	2.8+2.8	6.0	3.0+3.0	1.2~1.5	1.3~1.5	0.4			本文編
SB101B		礎石式	II	9.9	3.9	3.0+3.0	6.0	3.0+3.0				1.6~1.8	1.0~1.2	本文編
SB101C		礎石式	III-IV	9.9	3.9	3.0+3.0	4.9	2.45+2.45						本文編
SR2776	外郭 南門	竪立式	I	10.5	3.9	3.3+3.3	6.6	3.3+3.3	1.0~1.3	1.0	0.3~0.4			外郭1
SR201A		礎石式	II	10.5	3.9	3.3+3.3	6.6	3.3+3.3						外郭1
SR201B		礎石式	III-IV	9.9	3.9	3.0+3.0								外郭1
SR3030	外郭 東門	竪立式	I	10.5	3.9	3.3+3.3	5.4	2.7+2.7	1.8~1.9	1.3~1.9	0.45~0.55			年報2010
SB1762		礎石式	II	10.5	3.9	3.3+3.3	5.4	2.7+2.7						年報1988
SR307A		竪立式	III	9.4	3.9	2.7+2.752	5.5	2.74+2.74	0.7~1.8	1.1				年報1971・1994
SR307B		礎石式	IV	9.4	3.9	2.7+2.752	5.5	2.74+2.74						年報1971・1994
SB1095A	外郭 西門	竪立式	II	10.9	4.1	3.39+3.41	5.5	2.78+2.76	1.6	1.1~1.6				年報1985
SB1095B		礎石式	III	10.9	4.1	3.39+3.41	5.5	2.78+2.76				1.6~1.8	0.2~0.8	年報1985
SB1096		竪立式	IV	9.4	4.0	2.7+2.7	3.4	2.7+2.7	0.75~1.2	0.5				年報1977
SB1095C		礎石式	IV	10.9	4.0	3.0+3.0	6.2	3.1+3.1				1.5	0.2~0.6	年報1985
SB3400A	外郭 西北 門	竪立式	III	8.2	3.2	2.5+2.5	4.6	2.5+2.1	0.9~1.2	0.56~0.74				年報2019
SB3400B		礎石式	IV	(9.9~ 10.0)	(3.9~ 4.0)	(3.0+3.0)	6.9	3.0+3.0				1.5~1.6	0.25~0.62	年報2019
SB307		大塙 竪立式	III	9.9	4.0	2.95+2.96	6.3	3.09+3.2	1.1~1.7	0.4~1.2	0.4			年報1993

第8表 多賀城跡で検出された八脚門

②SF220築地塼

A. 外郭西辺の変遷

これまでの外郭西辺の調査成果を整理し、次に、近接する第17次調査で検出された遺構との対応について検討する。

外郭西辺を対象とした調査には、第10・17・33・46・47次調査がある(図版55)。各調査成果を概観すると、西辺北端の丘陵部を対象とした第17次調査では、3時期の築地塼(SF220A→B→C)が検出された(『年報1972』)。SF220Aは断面での確認で、削られた地山の上面に積土により基礎と本体が造成されている。SF220BについてはSF220Aを削り、ほぼ同位置に基礎と本体を造成したもので、積土には焼土や炭化物が含まれ、焼瓦と第Ⅱ期の平瓦が出土した。また、掘立式の寄柱が確認されている。SF220CについてはSF220A本体と崩壊土を削り、それらの上面に盛土を行って嵩上げし、本体を造成している。時期は、重複関係や出土遺物等からSF220Aが第Ⅲ期以前、SF220Bが第Ⅲ期、SF220Cが第Ⅳ期と考えられている。

西辺中央の低湿地部を対象とした第10・47次調査では3時期の材木塼(第10次:SF220A→B→C、第47次:SA1513A→B→C)が検出された(『年報1970・1984』)。第10次調査では、SF220を築地塼の基礎の一部としていたが、約100m北に位置する第47次調査において、これらが材木塼であること、SF220BがSF220Aの工程差として理解できること、SF220Cの掘方埋土に含まれるとしていた灰白色火山灰が、掘方埋土ではなく切り取り溝の埋土に含まれること、に見解が改められた(『年報1984』)。そして、整地層を中心とした重複関係、材の径や底面の礎板の有無等から、SF220AとSF1513B、SF220CとSA1513Cが対応し、全体としてはSA1513A、SA1513B、SA1513Cの3時期の変遷が確認された。

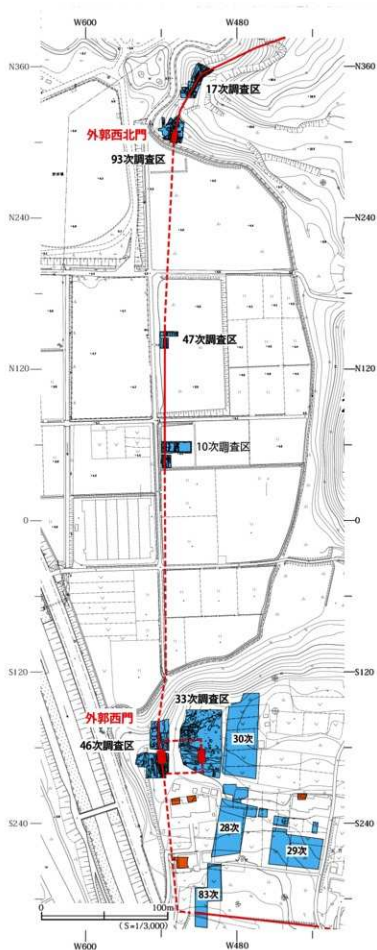
時期は、SA1513Cの切り取り溝に含まれた灰白色火山灰の年代と、想定される材木塼の耐久性から、SA1513AとSA1513Bがともに9世紀代の構築、SA1513Cが9世紀末～10世紀前半に構築され10世紀前半～中頃に廃絶したと考えられている(註7)。

西辺南側の丘陵部を対象とした第33・46次調査では、4時期の築地塼や基礎整地層が検出された。

第33次調査では、SF1089築地塼とその崩壊土上で第Ⅳ期の瓦を多量に含むSX1090積土遺構、約35m東に所在するSB1000外郭西門の桁行方向と直交した位置で、SF1077築地基礎地業が認められた(『年報1978』)。SF1089は版築土と地山切り出しによる基礎で、掘立式寄柱が確認されている。SF1077は第Ⅱ期の焼瓦が出土したSK1076土坑9層上面に行われた基礎地業で、整地層の上半部には第Ⅱ期の平瓦や丸瓦が敷き詰められ、東西方向に直線的に延びる北端縁は20cm前後の川原石で補強されている。第46次調査では、3時期の築地塼(SF1471A→B→C)が検出された(『年報1985』)。SF1471Aは基礎整地層と本体であり、SF1471BはSF1471A東側の嵩上げ整地、SF1471CはSF1471A西側の自然堆積層の上面に行われた嵩上げ整地から推定されたものである。それぞれSB1095ABC外郭西門に伴う。

時期は、遺構の重複関係と出土遺物から、SF1471Aが8世紀後半～末頃で第Ⅱ期、SF1471Bが8世紀末頃～9世紀中頃に第Ⅲ期、SF1077・1089基底部分が9世紀中頃～後半で第Ⅲ～Ⅳ期、SF1471Cが9世紀末頃～10世紀前半で第Ⅳ期、この他に、SX1089版築土とSX1090が第Ⅳ期以降である。

以上を整理したのが図版56であり、西辺では北西隅以外の広範囲にわたり第Ⅲ期以降ほぼ同位置で2度の改修が行われ、直線的な外郭区画施設が形成されていたと考えられる(図版55)。



図版 55 外郭西辺の全体図

遺構期	年代	外郭西辺の調査				
		第17次	第93次	第10・47次	第33次	第46次
第Ⅰ期	724年前後～ 8世紀中頃					
第Ⅱ期	8世紀中頃～ 780年	SF220A ※第Ⅲ期以前				SF1471A ※8世紀後半～ 末頃
第Ⅲ期	780～869年	SF220B	B期：SA3401 C期：SF220a	SA1513A ※9世紀 SA1513B(10次 SF220A) ※9世紀	SF1077・ 1089 基底部 ※9世紀中頃～ 後半	SF1471B ※8世紀末～ 9世紀中頃
第Ⅳ期	869年～ 11世紀前半	SF220C	D期：SF220a E期：SF220b F期：SF220c	SA1513C(10次 SF220C) ※9世紀末～ 10世紀中頃	SF1089 版築土 ※第Ⅳ期か SX1090 ※第Ⅳ期か	SF1471C ※9世紀末～ 10世紀前半

図版 56 外郭西辺における遺構の対応関係

第93次調査とその15m北に位置する第17次調査との対応関係としては、第17次SF220Bは、基礎整地層が黄褐色土と赤褐色土の版築により造成される点、出土遺物に焼瓦や第Ⅱ期の平瓦がある点で、SF220aの基礎整地層であるSX3388と類似する。時期も両者ともに第Ⅲ期であることから、SF220aはSF220Bに対応し、重複関係から、第93次SF220bcは第17次SF220Cに対応すると考えられる(図版56)。

B. SF220bcの寄柱について

SF220築地塼は残存状況が悪く、本体の規模が不明である。この内、SF220bには掘立式、SF220cには礎石式寄柱が認められた。それぞれ2個ずつ確認し、掘立式寄柱の掘方は長軸27～36cm、柱痕跡は径15cm、推定される寄柱間の距離は3.1～3.2mである。寄柱礎石は長軸30cm、短軸20cm以上、高さ24cmの垂角礫で、推定される寄柱間の距離は3.1mである。多賀城跡の外郭区画施設を構成する築地塼において、寄柱が検出された事例は多くない。ここでは築地塼の寄柱に注目して、寄柱が設置された築地塼の位置や時期を概観し、その中でSF220bcの寄柱の特徴を確認する。

築地塼の寄柱の検出が報告されているのは、南辺4箇所(第87次ほか、第88次、第34次、第24次調査)、東辺3箇所(第13・65次、第17次のSF300とSF300A)、西辺3箇所(第17次、第93次、第33次)である(図版1、第9表)。位置としては、門周辺5箇所(第87次ほか、第13・65次、第17次のSF220B、第93次、第33次)、南東隅周辺3箇所(第88次、第34次、第24次)、北東隅周辺2箇所(第17次のSF300とSF300A)で、門やその周辺で検出される事例が多い。時期は、南辺が第Ⅱ～Ⅳ期、東・西辺が第Ⅲ・Ⅳ期であり、第Ⅱ期で寄柱が設置されるのは南辺のみである。寄柱間の柱間は3.0mが主体で、一部では2.0m前後のものがある。掘立式寄柱は第Ⅲ・Ⅳ期の南・東・西辺、礎石式寄柱は第Ⅱ・Ⅲ期南辺と第Ⅳ期の西辺で認められる。礎石式寄柱は、今回の調査で検出したSF220c以外は

位置	遺構名	次	文献	遺構期	寄柱		備考	
					構造	柱間(m)		
南辺	南門周辺	SF202a	87はか	外郭Ⅰ	Ⅱ	礎石式	3.0	礎石は長軸20～50cmの扁平な礎
	東部	SF202a	88	年報2015	Ⅱ	礎石式	約3.0	礎石は大きさ25cm前後、厚さ15～20cmの角礎
		SF202b			Ⅲ	礎石式	約3.0	礎石は長軸40cm前後の角礎
		SF202b			Ⅱ	礎石式	約3.0	礎石は長軸25cm、短軸18cmの扁平な礎
		SF202c			Ⅲ	礎石式	約3.0	礎石は長軸45cm、短軸30cmの礎
	SF202D	Ⅳ	掘立式	約3.0	掘方は径25cmの円形			
	SF202f	Ⅳ	掘立式	約3.0	掘方は径5cmの円形			
SF202f'	24	年報1974	Ⅲ	掘立式	3.0	寄柱には5坪の礎で替えあり		
東辺	東門周辺	SF300A	13-65	年報1971・1994	Ⅲ	掘立式	3.2	掘方は一辺30cmの隅丸方形、柱直縁は一辺10～15cmの方形
	北部	SF300B	17	年報1972	Ⅳ	掘立式	2.7(2.5～3.0)	掘方は一辺30cmの隅丸方形、柱直縁は一辺10～15cmの方形
		SF300			Ⅲ	掘立式	1.6～2.0	林形地区 掘方は一辺約30cmの方形
	SF300A	Ⅲ	掘立式	不明	北東隅 掘方の平面形は隅丸方形			
西辺	西北門周辺	SF220b	93	年報2019	Ⅲ	掘立式	2.4	北西隅 掘方は一辺約20cmの隅丸方形
	SF220c	Ⅳ			掘立式	約3.1	掘方は長軸27～36cmで平面形は不明、柱直縁は径15cm	
	SF220c	Ⅳ			礎石式	約3.1	礎石は長軸30cm、短軸20cm以上、高さ24cmの亜角礎	
	西門周辺	SF1089			33	年報1978	Ⅳ	掘立式

第9表 寄柱が検出された築地塼

全て南辺に位置し、偏在する傾向がある。

築地塼の寄柱は門に近接した位置で設置される事例が多く、今回の調査で検出されたSF220bcの寄柱についても、この脈絡の中で理解できる。SF220bの掘立式寄柱は掘方の規模や柱間が南・東辺のものに類似し、SF220cの礎石式寄柱についても礎石の形状に大きな違いは認められない。ただし、礎石式寄柱の検出事例に限られる点は注意される。これを第Ⅳ期の外郭西北門の評価に関わるものとするか、築地塼の残存状況の問題で確認できていないだけとするかは現状では判断できず、今後の調査の進展を待って検討する必要がある。

(3)まとめ

第93次調査の目的は、第17次調査区の南側隣接地を対象に、区画施設の変遷と各時期の構造を確認すること、区画施設に伴う櫓等の施設を把握することの2点であった。

調査の結果、以下の成果を得た。

①門、築地塼、材木塼、整地層、切り通し状遺構、土坑、溝、ピットを検出した。遺構はA～G期の遺構期に大別でき、このうち古代はA～F期である。

A期は第Ⅱ期以前の可能性がある整地層である。B期は第Ⅲ期の外郭区画施設である材木塼とそれに伴う整地層、この他に土坑である。C期は第Ⅲ期の掘立式八脚門と整地層、外郭区画施設である築地塼とその基礎整地層、D期は第Ⅲ～Ⅳ期の切り通し状遺構、E期は第Ⅳ期の礎石式八脚門、築地塼とその基礎整地層、F期は第Ⅳ期の礎石式八脚門、築地塼とその基礎整地層、G期は古代以降の溝である。

②外郭区画施設については、第Ⅱ期に遡る遺構を確認することは出来なかったが、第Ⅲ期(B期)の材木塼、第Ⅲ期(C期)と第Ⅳ期(E・F期)の築地塼を検出した。第Ⅲ～Ⅳ期の築地塼は、北側の第17次調査で確認された築地塼に対応すると考えられる。また、第Ⅲ～Ⅳ期(D期)に外郭西辺の築地塼を切り通す遺構を検出した。その特殊性から貞観11(869)年の陸奥国大地震による城内の復旧・復興作業に関わる通路と推定した。

③区画施設に伴う遺構については、調査区南部で新たに外郭西北門を発見した。門は八脚門で、2時期の変遷があり、掘立式から礎石式に建て替えられている。掘立式八脚門は多賀城跡でこれまでに確

認されている八脚門の中で最も規模が小さい。一方、礎石式八脚門は、同時期の外郭各門と同規模と推定される。時期はSB3400Aが第三期(C期)、SB3400Bが第四期(E・F期)と考えられる。これにより、第三期以降の多賀城の外郭西辺には、西門と西北門の南北2箇所に門が設置されていたことが判明した。

外郭西北門の発見により、城内では門に接続する道路やそれに面した官衙ないし工房等の施設の存在が予想され、多賀城の西半部の状況を検討していく上で注目される。

④出土遺物は土器、灰釉陶器、中世陶器、近世陶器、瓦、転用砥、鉄製品、鉄滓、石器である。古代が主体で、その中でも瓦の割合が高い。出土した軒丸瓦には范傷を確認できるものがある。

註

註1)宮城県教育庁文化財課の齋藤和機氏に御教示いただいた。

註2)瓦のうち、偏行唐草文620、平瓦ⅡB類(図版22-1)、平瓦ⅡC類(図版31-2・3)の観察にあたっては、宮城県教育庁文化財課の廣谷和也氏に御教示いただいた。

註3)同一個体とみられるものでも接合しない破片はそれぞれを1点として数えた。

註4)この他、政庁南面地区で5点(『南面Ⅰ』、『年報2013』)、西門・五万崎地区で4点(『年報1976・1977・2018』)、東門・大畑地区で2点(『年報1971・1994』)、南辺東地区で1点(『年報1982』)の計12点出土している。

註5)残り3点については小破片のため、除外した。

註6)SX3389の堆積土上面から9世紀第3四半期～10世紀前葉の土師器が出土しているが、出土層と遺構の重複関係からSX3389ではなく、これ以降のE～F期の年代を示すものと考えられる。

註7)SF220A・SA1513BとSF220C・SA1513Cの年代については、第10次調査のSF220ACの材を対象に年輪酸素同位体比分析が行われた。その結果、SF220Aの材は790～837年、SF220Cの材は917～920年という年代値が得られ、前者は9世紀中頃、後者は10世紀初頭の920年頃に構築された可能性が指摘されている(『年報2017』)。

引用文献

会津若松市教育委員会1994『会津大戸窓―遺物編―』会津若松市文化財調査報告書第37号

白鳥良一1980『多賀城跡出土土器の変遷』『研究紀要』Ⅶ pp.1-38宮城県多賀城跡調査研究所

仙台市教育委員会1987『五本松窯跡』仙台市文化財調査報告書第99集

仙台市教育委員会2010『与兵衛沼窯跡』仙台市文化財調査報告書第366集

古川雅清1979『東北地方古代城壕官衙の外郭施設―所謂「櫓」跡について―』『研究紀要』Ⅵ pp.29-81

宮城県多賀城跡調査研究所

Ⅲ. 第92次調査出土遺物の追加報告

平成30年度の第92次調査で出土した遺物について追加報告を行う。報告するのは、土師器12点、須恵器11点、硯1点、土製品1点、埴1点の計26点である。これらは、昨年度刊行した『年報2018』の中で写真でのみ報告したものや、年報には掲載しなかったが出土例が多くはなく特徴的なもの、また、五万崎地区東部の土地利用の変遷を考える上で有益と判断されるものである。発掘調査の概要及び出土遺構・層については『年報2018』で詳述しているため、ここではそれらの記載を省略し、遺物の特徴のみ記述する。なお、追加報告する遺物は遺構・層の存続時期に伴うものではなく、いずれも二次堆積と考えられる出土状況であるため、古代とそれ以前に大別し(註1)、それぞれ遺物の種類ごとに説明を行う。

1. 特徴

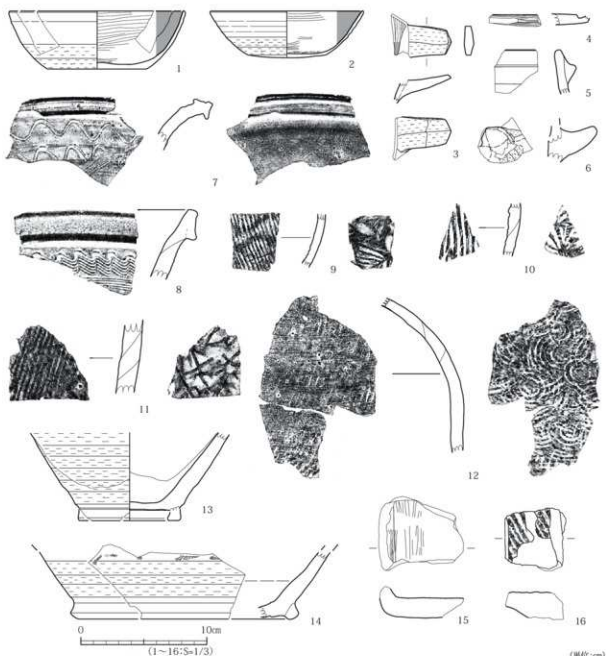
(1) 多賀城創建後(図版57)

1～5は土師器である。1・2はロクロ整形で、どちらも器壁が2～3mmと薄い。胎土は混入物が少なく精良である。底部切り離し後に体下部から底部全面に回転ヘラケズリが施される。これらの特徴は多賀城跡出土土器編年のC群土器に比定され(白鳥1980)、類似するものには第60次調査SE2101井戸跡第Ⅲ層出土土器(『年報1991』)がある。SE2101第Ⅲ層出土土器の年代は、共伴した漆紙文書から天長9(832)年以降の9世紀前半代に位置づけられることから、1・2の年代は9世紀前半と考えられる(註2)。3は双耳環の耳部で、平面五角形である。坏部は器壁が薄く、胎土は精良である。4は托とみられ、内外面ともヘラミガキの後に黒色処理される。類例は同じ第92次調査で出土した須恵器製のもの(『年報2018』図版16-11)等少なく、珍しい遺物である。5は羽釜形土器で、鐙の幅が狭く口縁部が短く内傾する。東北地方で出土した羽釜形土器を検討した古川一明氏の分類ではⅡB類に該当し、主に9世紀後半～10世紀代の年代幅に収まることが指摘されている(古川2014)。

6～14は須恵器である。6は甕あるいは鉢の把手部である。7～12は甕で、7・8が口縁部、9～12が胴部である。7は口唇部内面に突帯が巡る。8は頸部に櫛描波状文と沈線がある。9は内面に矢羽根状当て具、10は放射状当て具、11は十字当て具、12は同心円当て具の痕跡が認められる(註3)。なお、8は口縁部の形状や頸部の特徴、12は当て具痕の特徴から、古墳時代後期の可能性もある。

13・14は大戸窠産であり(会津若松市教育委員会1994)、13は長頸甕で9世紀前半の上雨屋12号窠式、14は大平鉢で9世紀後半の上雨屋107号窠式以降と考えられる(『年報2018』)。

この他に土師器製の風字硯(15)や、埴(16)がある。埴は8条の沈線が認められ、『本文編』のⅡA類に該当すると考えられる。文様のある埴は、政庁以外では出土が限られており珍しい。



(単位:cm)

No.	遺物・層	種類	西径	口径	直径	高さ	特徴	発見位置	発掘 層番号
1	SX3382 5a層	土師器 坏	口1/4~底 2/3	(14.0)	7.8	(4.6)	外:ロクロナデ(体下回転ヘラケズ) 内:縦方向ヒガキ→黒色処理 底:切離し不明→回転ヘラケズ 薄手 胎土層良	59-1	R270 B15968
2	SX3382 5b層	土師器 坏	口1/3~底 1/1	(12.2)	6.1	3.7	外:ロクロナデ(体下回転ヘラケズ) 内:放射状ヒガキ→黒色処理 底:切離し不明→回転ヘラケズ 薄手 胎土層良	59-2	R148 B15965
3	I層	土師器 双耳杯	耳部	—	—	—	外:ヘラケズ 内:ヘラミガキ→黒色処理	59-3	R419 B15973
4	I層	土師器 托台	体部	—	—	—	外内:ヘラミガキ→黒色処理	『年報2018』 図 版C1-22	R435 B15973
5	I層	土師器 羽釜形土師	口縁部	—	—	—	59-4 59-1 59-内:ロクロナデ	R420 B15973	
6	I層	須恵器 瓶 ^o	把手部	—	—	—	外:ヘラケズ→ナデ 内:ロクロナデ	59-5 R423 B15973	
7	SX3382 6c層	須恵器 壺	口縁部	—	—	—	外:1条の縞縞段状文が段 内:ロクロナデ	59-6 R127 B15965	
8	SX3382 6a層	須恵器 壺	口縁部	—	—	—	外:6条1単位の縞縞段状文と4条1単位の沈線 内:ナデ	59-7 R144 B15968	
9	I層	須恵器 甕	胴部	—	—	—	外:平行タタキ 内:矢羽根状当て具	59-8 R436 B15973	
10	SX3382 4層	須恵器 甕	胴部	—	—	—	外:平行タタキ 内:放射状当て具	59-9 R295 B15989	
11	SX3382 3a層	須恵器 甕	胴部	—	—	—	外:平行タタキ 内:十字当て具	59-10 R345 B15970	
12	SX3382 9層	須恵器 甕	胴部	—	—	—	外:平行タタキ→ロクロナデ 内:同心円当て具	59-11 R76 B15963	
13	SX3382 4層	須恵器 長頸瓶	胴~底部 1/8	8.0	—	—	外:回転ヘラケズ 内:ロクロナデ 大戸産産 上層層12号 瓶式	『年報2018』 図 版20-11	R497 B15976
14	I層	須恵器 大鉢	胴~底部	(15.8)	—	—	外:回転ヘラケズ→市目 内:ロクロナデ 大戸産産	『年報2018』 図 版21-24	H523 B15976
15	I層	土師器 風子碗	一部	—	—	—	外:ヘラミガキ 内:ヘラミガキ→黒色処理	59-12 R421 B15973	
16	SX3382 3b層	埴	一部	—	—	—	8条の沈線(断面=角形) 『本文編』B1A類	59-13 R316 B15989	

図版 57 第 92 次調査出土遺物の追加報告 (1)

(2) 多賀城創建以前(図版58)

1～6・9は土師器である。1・2は口縁端部が直立あるいは外傾し、境状の器形となる坏で、古墳時代中期の南小泉式(氏家1957)と考えられる。3は口縁部が「く」字状に短く外反する甕で、古墳時代前期の塩釜式(氏家1957)あるいは中期の南小泉式の時期と推定される。4・5は長胴形の甕で、4は口縁部が外反し頸部外面に段が巡る器形、5は頸部が内傾し口縁部が直立気味に立ち上がる器形である。6は無底の甕で、内外面にヘラミガキが施される。4～6はその特徴からいずれも古墳時代後期の栗皿式(氏家1957)と考えられる。9は小型の半球形で口縁端部が直立する器形であり、関東系土師器とみられ、北武蔵型坏(鈴木1983・1984)に出自を持ち、時期は7世紀後半と考えられる。

7・8は須恵器の甕の口縁部である。7は端部が折り返され肥厚し、8は端部に横位沈線が1条施される。類例には、多賀城跡の南西側に位置する山王遺跡のSI491住居跡(宮城県1997)やSD2050B河川跡(宮城県2001)出土須恵器があり、これらは古墳時代後期に位置づけられていることから、7・8も同様に古墳時代後期のものと考えられる。

この他に、円筒状の器形で作りが粗く、内外面に輪積み痕を残す円筒形土製品(10)が出土している。類例には大和町一里塚遺跡(宮城県1999)があり、7世紀後葉から8世紀初頭の時期で、カマドの構築材としての使用が推定されている。東北地方では出土例が少なく、山梨・長野県の甲信地域を中心に栃木・群馬県など北関東での出土が多い傾向にあるとされる。

2. 多賀城創建以前の遺物について

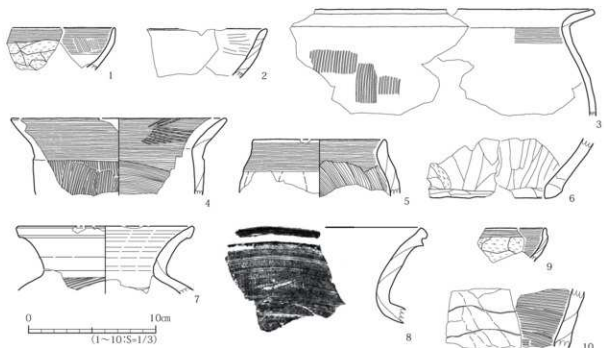
これまでに行われた多賀城跡の調査では、五万崎地区で古墳時代前期(『年報1977』)、坂下地区で中期(『年報2016』)、外郭北東隅で中期から後期(『年報1986』)、五万崎地区で後期(『年報2011』)の遺構や遺物が確認されている。多賀城跡の南から南西側に位置する山王・市川橋遺跡でもこの時期の遺構と遺物が多く検出されており(宮城県2018)、多賀城跡との関係が注目される。また、7世紀後半～8世紀初頭では、政庁(『図録編』、『補遺編』)や六月坂地区(『年報1971』)、大畑地区(『年報1993』)、外郭南門周辺(『外郭I』)、外郭東辺(『年報2010』)で遺構や遺物が検出されている。これらは、今回報告した図版58-9・10、昨年度報告した関東系土師器(『年報2018』図版17-1)とともに、多賀城創建以前の状況を知る上で重要な資料である。

註

註1) 創建以前の土器については宮城県教育庁文化財課の村田晃一氏に御教示いただいた。

註2) 城前地区のSK2548土壌出土土器は、多賀城跡土器編年のC群に比定され、SE2101第Ⅲ層出土土器と類似した特徴を持つ(『南面I』)。SK2548では、政庁第Ⅳ期の細弁蓮花文軒丸瓦310Bが共伴し、同時期とみられる東Ⅱ・Ⅳ層出土土器に擬投石灰軸陶器編年でⅥ期古(830～860年)からⅥ期中(860～890年)の過渡的資料にあたる灰軸陶器境が出土している。したがって、SK2548出土土器は9世紀中葉から第3四半期頃で、SE2101第Ⅲ層出土土器の年代も同様の可能性があることが指摘されている(『南面I』p.210)。

註3) 放射状当て具痕が認められる須恵器甕については、岩手県を中心とする東北地方の他に北陸地方等でも出土しており、その種類も複数あることが指摘されている(高橋1984)。



No.	遺跡・層	器物	西存	口径	口径	高さ	特徴	写真図版	図録	調査号
1	SX3382 6c層	土師器 坏	口縁部	—	—	—	外:(口)ナデ(体)ヘラケズリ 内:ナデ	59-14	R108	B15964
2	SX3382 5a層	土師器 坏	口縁部	—	—	—	外:残の悪く不明 内:ヘラミダキ	59-15	R252	B15967
3	SX3382 5a層	土師器 甕	口~胴上部	—	—	—	外:(胴)ハケメ 内:(胴)ヘラナデ	59-16	R188	B15965
4	SX3382 10a層	土師器 甕	口~胴上部1/6	(17.0)	—	—	外:(胴)ハケメ(口)ナデ 内:(口)ハケメナデ、(胴)ヘラナデ 外面被熱 内外面に付着物	59-17	R70	B15963
5	SX3382 8b層	土師器 甕	口~胴上部1/4	(10.6)	—	—	外:(胴)粗いナデ(口)ナデ 内:(口)ナデ(胴)ヘラナデ 外面被熱 内面に付着物	59-18	R54	B15962
6	SD3376 埋	土師器 甕	底部	—	—	—	外:ヘラケズリ、ヘラミダキ 内:ヘラミダキ	59-19	R16	B15961
7	SX3382 8b層	須恵器 甕	口~胴上部1/4	(14.0)	—	—	外:(口)コクロナデ(胴)平行タタキ 内:(口)コクロナデ	59-20	R55	B15962
8	SX3382 5a層	須恵器 甕	口~胴上部1/4	—	—	—	外内:コクロナデ	59-21	R192	B15966
9	I層	土師器 坏	口縁部	—	—	—	外:(体)ヘラケズリ(口)ナデ 内:ナデ 黒炭系土師器	59-22	R433	B15973
10	SX3382 8b層	内陶形土師器	胴部	—	—	—	外:粗いナデ 内:ハケメ	59-23	R51	B15962

図版 58 第 92 次調査出土物の追加報告 (2)

引用文献

- 会津若松市教育委員会1994『会津大戸窯—遺物編—』会津若松市文化財調査報告書第37号
- 氏家和典1957『東北土師器の型式分類とその編年』『歴史』第14輯 pp.1-14
- 白鳥良一1980『多賀城跡出土土器の変遷』『研究紀要』Ⅷ pp.1-38 宮城県多賀城跡調査研究所
- 鈴木徳雄1983『古代北武蔵における土師器製作手法の画期』『土曜考古』第7号 pp.13-21
- 鈴木徳雄1984『いわゆる北武蔵系土師器坏の動態—古代武蔵国における土師器生産と交易—』『土曜考古』第9号 pp.47-76
- 高橋与右衛門1984『須恵器大甕みられる「放射状当て具痕」について』『紀要』Ⅳ pp.1-48 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- 古川一明2014『古代東北地方における特殊な形態の煮炊用土器について』『東北歴史博物館研究紀要』15 pp.1-30
- 宮城県教育委員会1997『山王遺跡Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第174集
- 宮城県教育委員会1999『一里塚遺跡—第44・47次発掘調査報告書—』宮城県文化財調査報告書第179集
- 宮城県教育委員会2001『山王遺跡八幡地区の調査 2—県道「泉・塩釜線」関連調査報告書Ⅳ—』宮城県文化財調査報告書第186集
- 宮城県教育委員会2018『山王遺跡Ⅶ—三陸沿岸道路建設に伴う八幡・伏石地区発掘調査報告書—』宮城県文化財調査報告書第246集



図版 59 第 92 次調査出土遺物追加報告 写真

(1 ~ 23 : S-1/3)

番号	登録番号	番号	登録番号	番号	登録番号	番号	登録番号
1	Z7964	8左	Z7971	11右	Z7956	18	Z7952
2	Z7960	8右	Z7972	12	Z7606	19	Z7950
3	Z7604	9左	Z7965	13	Z7967	20	Z7953
4	Z7605	9右	Z7966	14	Z7957	21	Z7962
5	Z7970	10左	Z7968	15	Z7963	22	Z7607
6	Z7958	10右	Z7969	16	Z7961	23	Z7951
7	Z7959	11左	Z7955	17	Z7954		

第10表 図版59の遺物写真の登録番号一覧

IV. 付 章

1. 関連研究・普及活動

(1) 多賀城跡環境整備事業

令和元年度の多賀城跡環境整備事業は、第10次5ヵ年計画の最終年次にあたり(第11表)、令和5年度末の完成をめざした多賀城創建1300年記念総合活用整備事業として、事業費151,919千円(国庫補助50%)で下記の環境整備工事を行った。また、令和元年10月12日に発生した台風19号の災害復旧事業を事業費37,753千円(国庫補助70%)で行った。なお、災害復旧の対応や国庫補助金の交付決定時期の調整により、上記工事の一部は翌年度に繰り越している。

① 政庁南大路 路面・側溝復元舗装工

平成27・28年度に施工した政庁南大路の復元舗装と同じ仕様(セメント系自然土舗装:商品名 タフコートRS 日本エンバイロ株式会社)で、幅13mの路面を約91m復元舗装した。あわせて道路東側に幅90cm、深さ25cmの側溝を復元した。なお、計画の復元延長約148mのうち約57m分の舗装は翌年度に繰り越すこととなった。

② 政庁南大路 石垣復元工

昨年度施工した補強土壁工(テールアルメ)の前面に第79次調査で検出した石垣を復元した。石積の勾配(2分勾配;78.7度)、積み方(布積み)、石材(安山岩)等は発掘調査の成果にもとづいたが、地震等による落石を防ぐため、石材の背面で固定金具により、補強土壁工で設置したメッシュパネルに固定した。

③ 第Ⅰ期南門 表示工

政庁南面地区全体の整備方針では政庁第Ⅱ期の姿を表現することとしているが、政庁南大路の政庁の南方約190mの地点で第Ⅰ期の南門が検出されている。時期は異なるが、多賀城の外郭の変遷を表す重要な遺構であることから、当地区の他の第Ⅱ期の建築遺構の表現手法と差別化を図った上でこれを表示することとした。

第Ⅰ期南門は東西3間(中央間3.9m、脇間3.3m)、南北2間(3.3m等間)で、柱位置に直径39cmの黒御影石を、壁の位置に幅18cmの白御影石を路面と段差なく埋め込んだ平面表示とした。

④ 石組樹・瓦組暗渠 復元工

第44次調査で検出された石組樹(SX1414)と瓦組暗渠(SD1413C)を、政庁南大路の東側溝から西側の湿地域に排水する機能もあわせて復元的に整備した。石組樹はコンクリートで形作った掘方に径20~30cmの川原石を充填し、掘方の底部に設置したコンクリート樹と暗渠管で排水する仕組みとした。

⑤ 電気設備工

将来設置予定の照明灯までの電氣管路を舗装工、張芝工等に先行して埋設した。

⑥張芝工

法面部を優先して張芝を行った。

⑦台風19号災害復旧工事

現在整備工事を進めている政庁南面地区において、既整備部の法面が崩落し、土砂が流出して、隣接する道路や家屋へ土砂が堆積するなどの被害が生じたため、被災箇所の応急的な復旧を実施した。なお、本格復旧工事として更なる被害拡大の予防を図るため、造成工、張芝工を翌年度に繰り越して実施することとなった。

年 度	整備地区	計画内容	対象面積
平成 27 (2015)	政庁南面地区	政庁南大路跡復元舗装、総合解説広場補修	24,000 m ²
平成 28 (2016)		政庁南大路跡復元舗装、地形測量	
平成 29 (2017)		基盤整備工、実施設計	
平成 30 (2018)		造成工、法面工、擁壁工、雨水排水工	
令和 元 (2019)		政庁南大路跡石垣復元、遺構表示工	

第 11 表 多賀城跡環境整備事業第 10 次 5 ヶ年計画

(2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

特別史跡内の現状を変更する際には、現状変更の申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡に影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を行っている。令和元年度における現状変更は、昨年度の申請で工事が未着手だった 1 件(第 12 表 1)と、今年度に申請があった 4 件(2～5)を扱った。

1 は発掘調査の結果、浄化槽が現代の盛土およびその直下の地山層に収まることを確認した。2 は申請者の都合により実施されず、その旨の終了報告が提出された。3 は神社の神輿殿の改築に伴うもので、改築範囲を発掘調査した結果、表土下 20～70cm で自然堆積層、整地層、土坑を検出した。このうち整地層からは須恵器や瓦が出土しており古代である可能性があったため、施工に際してはそれ以上の掘削を止めて遺構面の保護を図った。4 については工事の立会を行い、表土のみの掘削に止めて、史跡の保存を図った。なお、5 については南門復元に支障となる樹木を伐採したもので、多賀城市教育委員会が立会った。

番号	変更事項	申請者	変更箇所	申請	文化庁・県教委許可	対応
1	浄化槽設置	個人	多賀城市市川字 大畑 28-2	平成 31 年 1 月 8 日	30 受文庁第 4 号の 663 平成 31 年 3 月 18 日	発掘調査 令和元年 5 月 17 日
2	農業用排水路改修	市川興農 実行組合長	多賀城市市川字 館前 29 地先	平成 31 年 4 月 25 日	元受文庁第 4 号の 57 令和元 6 月 21 日	(工事立会) 実施せず
3	神輿殿の改築等	總社宮司	多賀城市市川字 養社 1	令和元年 5 月 29 日	元受文庁第 4 号の 252 令和元年 7 月 19 日	確認調査 令和元年 8 月 26 日～9 月 3 日
4	住宅改築	個人	多賀城市市川字 大畑 33-2	令和元年 6 月 5 日	元受文庁第 4 号の 347 令和元年 7 月 31 日	工事立会 令和元年 9 月 6 日
5	南門復元工事等	多賀城市長	多賀城市市川字 坂下 19-1 ほか	令和元年 8 月 7 日	元受文庁第 4 号の 648 令和元年 11 月 15 日	工事立会 (市教委)

第 12 表 令和元年度現状変更一覧

(3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所は、多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について計画的な調査と研究を継続している。平成21年度からは多賀城創建期の窯跡群の発掘調査を実施し、造瓦体制とその社会的背景の解明を主目的とした多賀城関連遺跡発掘調査事業第8次5ヵ年計画を進めていたが、東日本大震災による復旧・復興事業に伴う発掘調査の支援を優先するため、3年次目の平成23年度から当面の間は事業を休止している。再開にあたっては従来の計画を継続し、大崎市大古山瓦窯跡の発掘調査に着手する予定である。

(4) 遺構調査研究事業

本事業は、多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査で検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は、秋田県横手市の大鳥井山遺跡について多賀城の終末期の建築遺構との比較検討、大仙市の弘田柵跡について政庁および外郭区画施設等の比較検討を行った。

(5) 多賀城跡調査研究所設立50周年記念関連事業

多賀城跡調査研究所は昭和44年(1969)に設立され、今年で50周年を迎えた。また昭和49年(1974)に多賀城跡に近接して開館された東北歴史資料館は、平成11年(1999)に東北歴史博物館としてリニューアル開館し、今年で20周年を迎えた。これを記念した特別展「蝦夷—古代エミシと律令国家—」(会期: 令和元年9月21日～11月24日)が開催され、当研究所では下記の関連事業の企画・実施を担当した。

1) 特別講演会の開催

特別展の開催に先立ち、プレ・イベントとして、古代城柵研究の第一人者による多賀城跡の調査研究の意義と成果を発信する目的で特別講演会を実施した。

【日 時】 令和元年8月24日(土)13:30～15:00

【会 場】 東北歴史博物館 3階講堂

【参加者】 240名

【演 題】 古代東北統治の拠点 多賀城

【講 師】 進藤秋輝氏(元東北歴史博物館長・元多賀城跡調査研究所長)

2) 公開講座の開催

当研究所の所員がそれぞれの専門分野の視点から、これまでの調査研究の蓄積を踏まえて、多賀城跡や古代東北地方に関する一般向けの講座を開催した。会場はいずれも東北歴史博物館の3階講堂を使用し、毎回300名前後の参加者を得た。

回数	日時	題目	担当
第1回	11月9日(土) 13:30~14:40	多賀城跡調査研究所 発掘調査50年のあゆみ	高橋栄一
第2回	11月9日(土) 14:50~16:00	辺国から古代都市を考える	村田晃一
第3回	11月16日(土) 13:30~14:40	考古学からみた“伊治公昔麻呂の乱”	村上裕次
第4回	11月16日(土) 14:50~16:00	発掘資料から多賀城と馬の関わりを探る	高橋 透
第5回	11月23日(土・祝) 13:30~14:40	東北経営を支えた二つの製鉄炉 —亶理南部製鉄遺跡群を中心に—	下山貴生
第6回	11月23日(土・祝) 14:50~16:00	古代多賀城にはどんな建物が建っていたのか —城前官衙の復元—	白崎恵介

3) 多賀城跡南門地区整備解説の開催

南門地区の南門復元のプロセスや、政庁南面地区の整備計画等について、特別展の観覧者のうち希望者を対象に現地で解説した。

【日時】 令和元年11月7日(木)11:00~12:00

【参加者】 4名

【担当】 白崎恵介

4) 出版物の刊行

①『多賀城跡—発掘のあゆみ2020—』

平成22年(2010)に「多賀城跡発掘調査50周年」を記念して刊行した多賀城跡の概説書『多賀城跡—発掘のあゆみ2010—』を、近年の調査成果を加え改訂した。

②『多賀城跡調査研究所沿革史』

当研究所が50年間に実施してきた事業や活動、組織の変遷などをまとめた沿革史を刊行した。

(6) その他

1) 宮城県内の震災復旧・復興事業に伴う発掘調査の支援

各地域の早期復旧を目指し、発掘調査の支援に職員1名を常時派遣した。

村田晃一 平成31年4月1日~令和2年3月31日

2) 現地説明会の開催、見学会などへの対応

発掘調査の成果を一般に公開するため、調査の進捗状況をホームページで公開するとともに、下記の現地説明会を行った。

多賀城跡第93次発掘調査現地説明会

村上裕次・下山貴生 令和元年10月14日

3) 資料の閲覧・貸出などに関する協力

以下の機関・団体等への資料の閲覧・貸出などに際し、準備・説明等をした。

秋田城跡歴史資料館、(株)河出出版社、(株)駿台文庫、(株)東北新社、(株)レマン、(株)山川出版社、(株)吉川弘文館、栗原市教育委員会、青野裕彦、七ヶ浜町教育委員会、多賀城市教育委員会、館内魁生、帝京大学総合博物館、東北歴史博物館、名取市教育委員会、早川文弥、富士山かや姫ミュージアム、藤原益榮、宮城県考古学会、みよし市歴史民俗資料館、結城 智

4) 各機関・委員会などへの協力

- 高橋栄一 秋田市秋田城跡環境整備委員会委員、秋田県弘田権跡環境整備審議会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会、多賀城市文化財保護委員会委員、岩沼市原遺跡調査検討委員、古代城柵官衙遺跡検討会世話人代表
- 白崎恵介 釜石市植野高が跡史跡整備検討委員会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会委員、松島町文化財保護委員会委員、亘理町三十三間堂遺跡整備計画検討委員会委員、松島町景観審議会委員
- 村田晃一 福島県湯川村堂後遺跡及び勝常寺旧境内調査指導委員、秋田城跡山地区の建物構造等についての遺構整理指導
- 高橋栄一・村上裕次・下山貴生 栗原市人の沢遺跡空中写真撮影協力
下山貴生 白石市鷹の巣古墳群空中写真撮影協力

5) 講演会・研究会などへの協力・執筆

- 村田晃一 「古代の地方都市と高速道路」最上街道研究会やくらい文化センター 平成31年4月14日
- 高橋 透 「長根堂跡群A地点1号出土土須恵器の再評価」『宮城考古学』第21号 令和元年5月11日
- 高橋 透 「土器の色調・規格からみた古代末の陸奥国府における土器消費」
日本考古学協会第85回総会 駒澤大学 令和元年5月19日
- 高橋 透 「2018年の考古学界的動向 古代 東北」『考古学ジャーナル』No.727 令和元年5月23日
- 高橋 透 「馬関連の遺構・遺物からみた陸奥国府とその周辺」古代交通研究会 早稲田大学 令和元年6月22日
- 村田晃一 「土器・家・ムラからみた蝦夷と柵戸」『蝦夷—古代エミシと律令国家—』東北歴史博物館 令和元年9月21日
- 高橋栄一 「秋田県城の城柵について」東北歴史博物館友の会第15回歴史探訪会 大仙市～横手市 令和元年10月26日
- 村田晃一 「移民を東北へ、蝦夷を全国へ—西へ、東へ— 考古資料から古代移民の時代を考える—」
蝦夷講座 東北歴史博物館 令和元年10月27日
- 村田晃一 「考古資料からみた栗原・鏡生以北—赤彩球胴甕境域の様相—」
令和元年度埋蔵文化財講座「蝦夷の赤い土器」滝沢市埋蔵文化財センター 令和元年12月7日
- 高橋 透 「みちのくの遠朝廷 多賀城を掘る」寺院・官衙シリーズ講演会 鈴鹿市考古博物館 令和元年12月8日
- 村上裕次 「多賀城跡第93次発掘調査」令和元年度宮城県遺跡調査成果発表会報告 仙台市博物館 令和元年12月14日
- 村田晃一 「考古資料からみた古代牡鹿郡の人々」令和元年度東松島市文化財講演会『牡鹿郡家・牡鹿権をおさめた人々』
矢本西市民文化センター 令和2年1月13日
- 村上裕次 「多賀城跡第93次調査」第46回古代城柵官衙遺跡検討会成果報告
大仙市グランドパレス川端 令和2年2月22・23日
- 村田晃一 「彦右エ門橋竈跡」 同上
- 村田晃一 「陸奥国域の未発見城柵」 同上

6) 連携大学院

東北大学大学院文学研究科長と宮城県教育委員会教育長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究指導にあたった。

- 高橋栄一 (客員教授) 文化財科学研究演習
高橋栄一 (客員教授)・白崎恵介 (客員准教授) 文化財科学研究実習Ⅰ

2. 組織と職員

〈宮城県教育委員会行政組織規則(抄)〉

(昭和41年4月26日教育委員会規則第4号 最終改正平成31年4月教育委員会第1号)

第13条の五 文化財課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条 特別史跡多賀城附寺跡(これに関連する遺跡を含む。以下同じ)の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

- 一 特別史跡多賀城附寺跡の発掘に関すること。
- 二 特別史跡多賀城附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。
- 三 特別史跡多賀城附寺跡の環境整備に関すること。
- 四 庶務に関すること。

第24条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもつて充てる。

〈職員〉

所 長 _____ (兼博物館 管理部長) _____ (兼博物館 管理部次長)
 高橋 栄一 _____ 沼倉 富美雄 _____ 狩野 智幸 _____

◀研究班▶

上席主任研究員(班長) 白崎 恵介
 上席主任研究員 村田 晃一
 研究員(副班長) 村上 裕次
 技 師 高橋 透
 技 師 下山 貴生

◀(兼東北歴史博物館管理班)▶

(兼博物館管理部次長) 高橋 伸昭
 (兼博物館主任主査) 小野寺 裕子(～5月)
 (兼博物館主任主査) 阿部 美歩 (6月～)
 (兼博物館主事) 四野見 聡
 (兼博物館主事) 渡邊 未希

3. 沿革と実績

(1) 宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年月	事項
大正11.10	多賀城跡が史蹟名勝天然記念物保存法により史蹟指定(大正11. 10. 12)、指定名称「多賀城跡附寺跡」
昭和35	郷土教育が多賀城跡発掘調査委員会を組織し、5カ年計画による多賀城跡の発掘調査の初年度事業として多賀城跡と多賀城跡寺跡の地形図を作成
36.	多賀城跡寺跡第1次発掘調査(北地)供養主体、多賀城町と河北文化事業団共催、調査主任は伊東信雄東北大学教授
37.	多賀城跡寺跡第2次発掘調査実施、主要伽藍配置が判明
38.	多賀城跡寺跡第3次発掘調査(北地)供養主体、以後40年(第3次)まで実施、政庁地区の順発掘的な建物配置が判明
41.	多賀城跡附寺跡特別史跡に昇格指定(昭和41. 4. 11)
43.11	多賀城町が多賀城跡政庁地区の発掘調査(第4次)を再開
44	宮城県多賀城跡調査研究所設立
47	多賀城跡調査研究所指導委員会設置(委員長伊東信雄)、研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44.10	色麻村日の出山宮跡の発掘調査実施
45.	『多賀城跡調査報告Ⅰ—多賀城跡寺跡—』刊行
45.	研究所による多賀城跡遺構整備事業開始
48.10	全県地区を対象とした第21次調査で計帳様文書断簡を発見
49.	外郭西辺地区の追加指定が官報告示(昭和49. 2. 18)
49.	多賀城跡西邊道路発掘調査事業開始
49.	純生城跡の発掘調査に着手(昭和50年度まで継続)
49.	アレーナ庁舎から東北歴史資料館の建物に移転
52.	伊治城跡の発掘調査に着手(昭和54年度まで継続)
53.	研究第一科—第二科の2科制となる、遺構調査研究事業開始
60.	断簡文書の発見を報道発表、これにより研究所が山本一郎知事から表彰を受ける
54.	多賀城跡調査研究所資料Ⅰ『多賀城跡断簡文書』刊行
55.	『多賀城跡 政庁跡 図録編Ⅰ』刊行
55.	熊前遺跡の追加指定が官報告示(昭和55. 3. 24)
55.	若生館遺跡の発掘調査に着手(昭和60年度まで継続)、初年度の調査で8世紀初期の官衙中核部を抽出
57.	『多賀城跡 政庁跡 本文編Ⅰ』刊行
58.11	第43~44次調査で政庁南前庭の道路遺構発見
59.	多賀城跡南前庭地区の追加指定が官報告示(昭和59. 3. 27)
60.	若生館遺跡関連色麻原瓦葺跡発掘調査実施
61.	東山遺跡の発掘調査に着手(平成4年度まで継続)
62.	若生館官衙遺跡の史跡指定が官報告示
62.11	第53次調査で奈良時代の外郭東門を発見
平成 2.	6 柏木遺跡の追加指定が官報告示(平成2. 6. 28)
2.11	多賀城跡調査研究所指導委員会に南門—政庁間整備活用専門部会を設置
4.11	日本最古の「かな」断簡文書について報道発表
5	下伊野聖徳寺跡の調査を実施し、3基の多賀城創建瓦葺跡を発見
5.9	山王遺跡千刈田地区の追加指定が官報告示(平成5. 9. 22)
6	純生城跡の発掘調査を再開(平成13年度まで継続)、政庁の全貌を解明
7.	第31回指導委員会において南門—政庁間整備活用計画案承認
9.11	多賀城跡埋没の解体修理および跡地地下部分の発掘調査を実施
10.	6 多賀城跡の重要文化財(古文書)指定が官報告示(平成10. 6. 30)
11.	『東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
11.	2科制が廃止され、研究室となる
11.	東北歴史博物館の建物に移転
14.	『多賀城跡等』の発掘調査を通して東北古代史の解明に尽くした功績』により第51回河北文化賞を受賞
14.	亀岡遺跡の発掘調査に着手(平成15年度まで継続)
15.	『多賀城跡—発掘のあゆみ—』刊行
15.	伊治城跡の史跡指定が官報告示
16.	多賀城政庁跡の西整備に先立ち、政庁地区の調査に着手(平成20年度まで継続)
16.	木戸聖徳寺の発掘調査に着手(平成18年度まで継続)
17.	多賀城跡調査研究所指導委員会を廃止、宮城県条例第13号により多賀城跡調査研究委員会を設置
19.	日の出山宮跡の発掘調査に着手(平成22年度まで継続)
20.	多賀城政庁跡の西整備に着手(平成26年度まで継続予定)
22.	『多賀城跡 政庁跡 補遺編Ⅰ』刊行
22.	多賀城跡発掘調査50周年記念事業を開催
22.10	『多賀城跡—発掘のあゆみ2010—』刊行
22.	第52次調査で第1期の外郭東門を新たに発見
23.	多賀城跡調査研究所資料Ⅱ『多賀城跡本巻Ⅰ』刊行
24.	東日本大震災の復旧工事に伴い、政庁正殿跡を調査、宝亀11(780年)の火災による焼失と建替史を確認
24.	多賀城跡調査研究所資料Ⅲ『多賀城跡本巻Ⅱ』刊行
26.	多賀城跡出土木簡と多賀城跡出土断簡文書の県指定有形文化財(古文書)指定が官報告示(平成26. 2. 25)
26.	多賀城跡調査研究所資料Ⅳ『多賀城跡本巻Ⅲ』刊行
28.	熊守府符の文書画について報道発表
28.	特別史跡多賀城跡附寺跡整備基本計画策定
29.	『多賀城跡 外郭跡Ⅰ—南門地区—』刊行
30.	『多賀城跡 政庁南前庭地区Ⅰ—城前官衙遺構—遺物編—』刊行
31.	『多賀城跡 政庁南前庭地区Ⅱ—城前官衙施設編—』刊行
令和 元.	第93次調査で第93期に隣の外郭西北門を新たに発見
2.	多賀城跡調査研究所資料Ⅴ『多賀城跡補遺編Ⅱ』刊行
2.	『多賀城跡調査研究所沿革史Ⅰ』刊行
2.	『多賀城跡—発掘のあゆみ2020—』刊行

(2) 事業実績

1) 多賀城跡発掘調査事業の実績

計画年度	年度	次数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)	計画年度	次数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)				
											調査面積	調査費用		
第1次5ヵ年計画	昭和44	5次	政庁地区南東部	1,980	9,000	第5次5ヵ年計画	平成元	56次	大畑地区北西部	1,550	29,000			
		6次	政庁地区北東部	2,079			57次	外郭東辺南西部(西沢地区)	500					
		7次	外郭南辺中央部(多賀城神付近)	264			58次	大畑地区中央部	1,470					
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	356			59次	大畑地区中央部東側	900					
		9次	政庁地区南西部	2,044			60次	大畑地区中央部	1,450					
		10次	外郭西辺中央部	491			61次	鴻の池地区	150					
	昭和46	11次	外郭東辺南部	660			62次	大畑地区南西部	1,100					
		12次	外郭中央地区北部	3,795			63次	大畑地区北西部	1,700					
		13次	外郭東辺東門付近	1,600			64次	大畑地区北部	3,000					
	昭和47	14次	外郭東地区北部	2,086			65次	外郭東門北部・現状変更に伴う調査	2,200					
		15次	鴻の池周辺	112			66次	大畑地区北西部	3,000					
		16次	政庁地区北西部	1,320			67次	大畑地区西部	3,000					
		17次	外郭東地区・北西隅	1,729			68次	大畑地区西部・多賀城神	2,650					
		18次	外郭中央地区北部	2,937			69次	城前地区南西部	2,900					
		19次	政庁地区北西部	2,640			70次	城前地区南部	2,000					
	昭和48	20次	外郭南辺中央部	990			71次	城前地区南部	2,000					
		21次	外郭西地区中央部	1,481			72次	南門西側築地帯跡・南門一政庁間道路跡	1,000					
		22次	城西南方(高平遺跡)	3,465			73次	南門東側築地帯跡・南門一政庁間道路跡	1,800					
第2次5ヵ年計画		昭和49	23次	外郭東地区北部(宇大類)	3,300	第8次5ヵ年計画	平成15	74次	南門一政庁間道路跡	1,000	25,220			
	24次	外郭南東隅	2,649	75次	外郭北辺中央部		500							
	昭和50	25次	多賀城礎寺跡南大門推定地	2,310	平成16		76次	政庁東築地・後堀・北辺地区	1,640					
		26次	多賀城礎寺跡南大門前方地区	2,310	平成17		77次	政庁東築地・西堀跡・南面地区	970					
	昭和51	27次	磐社西側南川大久保地区	660	平成18		78次	政庁地区・政庁南面地区・城前地区	2,700					
		28次	五方堀地区	2,310	平成19		79次	政庁一外郭南門間道路跡・城前・鴻の池地区	1,350					
	昭和52	29次	五方堀地区	2,310	平成20		80次	田屋築地地区・政庁南西地区	930					
		30次	五方堀地区	1,980	平成21		81次	鴻の池地区・政庁南西地区	900					
		31次	政庁北方隣接地区	1,980	平成22		82次	外郭東辺伊保石地区	380					
	昭和53	32次	政庁北方隣接地区	1,000	平成23		83次	外郭南辺五方堀地区	900					
		33次	外郭西門地区	1,000	平成24		84次	外郭南辺正殿跡	445					
	第3次5ヵ年計画	昭和54	34次	裏山地区南筑塚地	1,300		第10次5ヵ年計画	平成25	85次	政庁地区・正殿跡		415	11,294	
35次		鴻の池南地区	900	平成26	86次	外郭南辺坂下地区		350						
昭和55		36次	外郭東地域中央部作費地区	1,800	平成27	87次		外郭南辺田屋築地・坂下地区	910					
		37次	多賀城外南地方(砂押川東岸)地区	700	平成28	88次		外郭南辺立石地区	390					
昭和56		38次	作費南端低埋地(緊急調査)	50	平成29	89次		政庁南大路・城前地区	280					
		39次	外郭東地域中央部作費地区	2,500	平成30	90次		外郭南辺坂下地区	430					
昭和57		40次	外郭南辺壘地東半中央部(立石地区・緊急)	80	平成31	91次		外郭南門田屋築地(南北大路)	720					
		41次	外郭東辺南端部(田屋築地東端部)	1,200	平成32	92次		外郭西辺五方堀地区	200					
		42次	外郭東地域中央部(作費地区)	500	令和元	93次		外郭西辺丸山地区	300					
		昭和58	43次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	800	令和2		94次	政庁地区北方	280				
44次	外郭中央地区中央部(政庁南方)		2,500	令和3	95次	政庁地区北方	300							
第4次5ヵ年計画	昭和59	45次	坂下地区	70	第11次5ヵ年計画	令和4	96次	政庁地区北方	280					
		46次	外郭西門地区	750		令和5	97次	政庁地区北方	280					
		47次	外郭西辺中央部	1,000		調査面積累計	119,073㎡							
	昭和60	48次	外郭南門地区	800			調査費用累計	1,170,500						
		49次	外郭北門推定地区	450				指定地積面積	約1,070,000㎡					
	昭和61	50次	政庁南地区	900					調査面積/積面積	約1%				
		51次	外郭北東隅東地区	500						昭和62	52次	大畑地区及び東辺外の地区	500	
	昭和63	53次	外郭東門北東地区	1,000							昭和64	54次	外郭東門東地区	1,000
		54次	外郭東門東地区	1,000								昭和65	55次	外郭東辺中央部(作費地区)

2)多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

計画年度	対象地区	主な工事内容	事業費(千円)	
第1次5ヵ年計画	昭和45	南門裏筋跡・東脇筋跡表示工	10,000	
	昭和46	正殿跡・墓地塀跡表示工	20,000	
	昭和47	西脇筋跡・墓地塀跡表示工	25,000	
	昭和48	北西門跡・墓地塀跡表示工	20,000	
	外郭東門地区	東門跡・壘穴住居跡表示工		
昭和49	六月坂地区	創立建物跡・倉庫跡・道路跡表示工	20,000	
第2次5ヵ年計画	昭和50	外郭東南隅地区	木質遺構保存施設設置工	20,000
	昭和51	湧の池地区	湿地修景工・園路工	10,000
	昭和52		南辺築地塀跡表示工	16,000
	昭和53	南門地区	多賀城碑周辺修景工	16,000
	昭和54		南門跡・墓地塀跡保護工	
昭和54	南門地区	西門周辺区域の地形修復工・緑化修景工	20,000	
第3次5ヵ年計画	昭和55	南門地区	園路工・便益施設工・緑化修景工	30,000
	昭和56	外郭南築地東平部	緑化修景工	30,000
		園路(資料館・南門)	園路工・便益施設工・緑化修景工	
	昭和57	外郭南門地区東斜南	園路工	28,000
	昭和58	作賣地区	遺構保護盛土工・緑化修景工	30,000
建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工				
昭和59	作賣地区	土塁跡及び空堀跡表示工・便益施設工	27,000	
第4次5ヵ年計画	昭和60	作賣地区	遺構出土表示工・便益施設工・緑化修景工	27,000
	政庁南地区	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	27,000	
	作賣地区	便益施設工		
	雀山地区	緑化修景工	27,000	
	作賣地区北部	園路工・緑化修景工・便益施設工		
昭和62	政庁地区	便益施設工・園路工・緑化修景工	27,000	
昭和63	雀山地区	便益施設工・園路工・緑化修景工	27,000	
		便益施設工・園路工・緑化修景工		
平成元	北辺地区南平部	便益施設工・園路工・緑化修景工	27,112	
第5次5ヵ年計画	平成2	北辺地区北平部	便益施設工・園路工・緑化修景工	30,000
	平成3	北辺地区北平部	便益施設工	30,000
	平成4		地形修復工・園路工・緑化修景工	
	平成5	東門・大垣地区東側部	建物跡表示工・便益施設工	35,000
	平成6	東門・大垣地区東側部	便益施設工	35,000
第6次5ヵ年計画	平成7	東門・大垣地区西側北平部	遺構表示工・遺構復元表示工・便益施設工・緑化修景工	30,000
	平成8	東門・大垣地区西側北平部	地形修復工・道路跡復元工・緑化修景工	39,000
	平成9	南門地区	道路跡表示工・便益施設工	51,000
			多賀城碑覆層解体修理工	
	平成10	東門・大垣地区西側北平部	道路跡表示工・緑化施設工・緑化修景工	35,000
平成11	東門・大垣地区西側北平部	建物跡表示工・便益施設工・緑化修景工	31,500	

計画年度	対象地区	主な工事内容	事業費(千円)	
第7次5ヵ年計画	平成12	柏木遺跡	造成工・排水工・法面保護工	14,400
	平成13		法面工・園路工・植栽工・排水工	19,700
	平成14		法面保護工・園路工	9,300
	平成15		法面工・遺構表示工・園路工・植栽工	9,020
	平成16		掘削広場工・排水工・植栽工・照付設置工	8,266
第8次5ヵ年計画	平成17	案内板・標柱整備	案内板標柱設置工・既設サイン再整備工	15,738
	平成18	外郭北辺東北隅(木道再整備)	基礎整備工・広場工・自然育成工	11,016
	平成19		整土工・広場工・施設設置工・自然育成工	9,462
	平成20		墓地塀整去工	8,514
	平成21		墓地塀整去工	8,500
平成22	追加遺構表示工(西脇筋跡・西殿跡)		8,084	
第9次5ヵ年計画	平成23	政庁地区再整備	追加遺構表示工(東脇筋跡・東殿跡)	8,104
	平成24		追加遺構表示工(後殿跡)	7,966
	平成25		敷地造成工(北殿跡)	7,566
	平成26		追加遺構表示工(北殿跡)	8,636
	平成27		政庁南大路	解説板・休憩施設再整備
第10次5ヵ年計画	平成28	政庁南面地区	政庁南大路再整備・地形測量	13,000
	平成29		構造物整去工・実施設計	15,000
	平成30		基礎整備(造成工・雨水排水工)	76,708
	令和元		政庁南大路跡復元工	151,919

宮城県による整備面積(令和元年度末)	
多賀城跡	168,964 m ²
政庁地区	18,725 m ²
六月坂地区	9,335 m ²
南辺東地区	18,462 m ²
南門地区・南辺西地区	13,824 m ²
作賣地区・東辺地区	27,934 m ²
北辺地区	33,947 m ²
東門・大垣地区	25,299 m ²
政庁南面地区	21,438 m ²
柏木遺跡	3,759 m ²

整備事業費総計	1,222,688 千円
---------	--------------

3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画年度	年度	遺跡名	事業	内容	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)
第1次5年計画	昭和49	養生城跡	地形図作成・第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2,500
	昭和50	養生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭跡・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次5年計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	地形図作成・第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	1,156	7,000
	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	1,020	7,000
第3次5年計画	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡	第6次発掘調査	範囲確認調査	1,300	6,300
	昭和60	合戦原遺跡	合戦原遺跡	関連遺跡調査		
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
	昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中核部の把握	1,200	7,000
第4次5年計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
	平成5	下伊藤野遺跡	地形図作成・発掘調査	多賀城創建期発掘調査	600	14,000
第5次5年計画	平成6	養生城跡	第3次発掘調査	政庁地区と外郭跡の調査	2,300	22,000
	平成7	養生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20,000
	平成8	養生城跡	第5次発掘調査	外郭跡の調査	800	17,000
	平成9	養生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成10	養生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17,000
第6次5年計画	平成11	養生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	平成12	養生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	平成13	養生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成14	亀岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
	平成15	亀岡遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	830	6,300
第7次5年計画	平成16	木戸塚跡群	第1次発掘調査	A地点西側丘陵の調査	620	6,115
	平成17	木戸塚跡群	第2次発掘調査	B・C地点の調査	300	5,932
	平成18	木戸塚跡群	第3次発掘調査	B・C地点の調査	1,300	4,152
	平成19	六月坂遺跡	発掘調査	横穴墓群の調査	1,000	3,520
	平成20	日の出山塚跡群	試掘調査	A地点北側の調査	200	
第8次5年計画	平成21	日の出山塚跡群	第1次調査	F地点南側の調査	490	3,168
	平成21	日の出山塚跡群	第2次発掘調査	D地点西側の調査	620	2,994
	平成22	日の出山塚跡群	第3次発掘調査	F地点東側の調査	375	2,846
	平成23	大吉山瓦窯跡群	東日本大震災により中止		0	0
	平成24	大吉山瓦窯跡群	休止		0	0
平成25	大吉山瓦窯跡群	休止		0	0	

4) 研究成果等刊行物

①宮城県多賀城跡調査研究所年報

『年報1999』(第5・6・7次調査)	昭和45年3月	『年報1995』(第66次調査)	平成 8年3月
『年報1970』(第8・9・10・11次調査)	昭和46年3月	『年報1996』(第67次調査)	平成 9年3月
『年報1971』(第12・13・14次調査)	昭和47年3月	『年報1997』(第68次調査、多賀城碑復原解体修理)	平成10年3月
『年報1972』(第15・16・17・18次調査)	昭和48年3月	『年報1998』(第69次調査)	平成11年3月
『年報1973』(第19・20・21・22次調査)	昭和49年3月	『年報1999』(第70次調査)	平成12年3月
『年報1974』(第23・24次調査)	昭和50年3月	『年報2000』(第71次調査)	平成13年3月
『年報1975』(第25・26・27次調査、東外郭跡南端部)	昭和51年3月	『年報2001』(第72次調査、環境整備)	平成14年3月
『年報1976』(第28・29次調査)	昭和52年3月	『年報2002』(第73次調査)	平成15年3月
『年報1977』(第30・31次調査)	昭和53年3月	『年報2003』(第74・75次調査)	平成16年3月
『年報1978』(第32・33次調査、環境整備)	昭和54年3月	『年報2004』(第76次調査)	平成17年3月
『年報1979』(第34・35次調査、環境整備)	昭和55年3月	『年報2005』(第77次調査、環境整備)	平成18年3月
『年報1980』(第36・37次調査)	昭和56年3月	『年報2006』(第78次調査)	平成19年3月
『年報1981』(第38・39・40次調査)	昭和57年3月	『年報2007』(第79次調査)	平成20年3月
『年報1982』(第41・42次調査)	昭和58年3月	『年報2008』(第80次調査)	平成21年3月
『年報1983』(第43・44次調査)	昭和59年3月	『年報2009』(第81次調査)	平成22年3月
『年報1984』(第45・46・47次調査、環境整備)	昭和60年3月	『年報2010』(第82次調査、環境整備)	平成23年3月
『年報1985』(第46・48・49次調査)	昭和61年3月	『年報2011』(第83次調査)	平成24年3月
『年報1986』(第49・50・51次調査)	昭和62年3月	『年報2012』(第84・85次調査)	平成25年3月
『年報1987』(第50・52・53次調査)	昭和63年3月	『年報2013』(第86次調査)	平成26年3月
『年報1988』(第54・55次調査)	平成元年3月	『年報2014』(第87次調査)	平成27年3月
『年報1989』(第56・57次調査)	平成 2年3月	『年報2015』(第88・89次調査、環境整備)	平成28年3月
『年報1990』(第58・59次調査)	平成 3年3月	『年報2016』(第90次調査)	平成29年3月
『年報1991』(第60・61次調査)	平成 4年3月	『年報2017』(第91次調査)	平成30年3月
『年報1992』(第62・63次調査)	平成 5年3月	『年報2018』(第92次調査)	平成31年3月
『年報1993』(第64次調査)	平成 6年3月	『年報2019』(第93次調査)	令和 2年6月
『年報1994』(第65次調査、環境整備)	平成 7年3月		

②多賀城関連遺跡調査報告書

『隼生跡跡Ⅰ』多賀城関連遺跡調査報告書第1冊	昭和50年3月	③研究紀要	昭和49年3月
『隼生跡跡Ⅱ』多賀城関連遺跡調査報告書第2冊	昭和51年3月	『研究紀要Ⅰ』	昭和50年3月
『伊治城跡Ⅰ』多賀城関連遺跡調査報告書第3冊	昭和53年3月	『研究紀要Ⅱ』	昭和51年3月
『伊治城跡Ⅱ』多賀城関連遺跡調査報告書第4冊	昭和54年3月	『研究紀要Ⅲ』	昭和52年3月
『伊治城跡Ⅲ』多賀城関連遺跡調査報告書第5冊	昭和55年3月	『研究紀要Ⅳ』	昭和53年3月
『名生館跡Ⅰ』多賀城関連遺跡調査報告書第6冊	昭和56年3月	『研究紀要Ⅴ』	昭和54年3月
『名生館跡Ⅱ』多賀城関連遺跡調査報告書第7冊	昭和57年3月	『研究紀要Ⅵ』	昭和55年3月
『名生館跡Ⅲ』多賀城関連遺跡調査報告書第8冊	昭和58年3月	『研究紀要Ⅶ』	
『名生館跡Ⅳ』多賀城関連遺跡調査報告書第9冊	昭和59年3月		
『名生館跡Ⅴ』多賀城関連遺跡調査報告書第10冊	昭和60年3月	④絶跡調査報告書・資料集	昭和55年3月
『名生館跡Ⅵ』多賀城関連遺跡調査報告書第11冊	昭和61年3月	『多賀城跡 政庁跡 図録編』	昭和57年3月
『東山跡Ⅰ』多賀城関連遺跡調査報告書第12冊	昭和62年3月	『多賀城跡 政庁跡 本文編』	平成22年3月
『東山跡Ⅱ』多賀城関連遺跡調査報告書第13冊	昭和63年3月	『多賀城跡 外郭跡Ⅰ—南門地区—』	平成29年3月
『東山跡Ⅲ』多賀城関連遺跡調査報告書第14冊	平成元年3月	『多賀城跡 政庁南面地区—城前官衙遺構—』	平成30年3月
『東山跡Ⅳ』多賀城関連遺跡調査報告書第15冊	平成 2年3月	『多賀城跡 政庁南面地区Ⅱ—城前官衙絶跡編—』	平成31年3月
『東山跡Ⅴ』多賀城関連遺跡調査報告書第16冊	平成 3年3月	『多賀城跡紙文書』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅰ	昭和54年3月
『東山跡Ⅵ』多賀城関連遺跡調査報告書第17冊	平成 4年3月	『多賀城跡木簡Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅱ	平成23年3月
『東山跡Ⅶ』多賀城関連遺跡調査報告書第18冊	平成 5年3月	『多賀城跡木簡Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅲ	平成25年3月
『下野野跡Ⅰ』多賀城関連遺跡調査報告書第19冊	平成 6年3月	『多賀城跡木簡Ⅲ』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅳ	平成26年3月
『隼生跡Ⅰ』多賀城関連遺跡調査報告書第20冊	平成 7年3月	『多賀城跡和陶磁器』宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ	令和 2年3月
『隼生跡Ⅱ』多賀城関連遺跡調査報告書第21冊	平成 8年3月	『多賀城と古代日本』	昭和50年3月
『隼生跡Ⅲ』多賀城関連遺跡調査報告書第22冊	平成 9年3月	『多賀城と古代東洋』	昭和60年3月
『隼生跡Ⅳ』多賀城関連遺跡調査報告書第23冊	平成10年3月	『多賀城跡—発掘のあゆみ—』	平成15年3月
『隼生跡Ⅴ』多賀城関連遺跡調査報告書第24冊	平成11年3月	『多賀城跡—発掘のあゆみ2010—』	平成22年9月
『隼生跡Ⅵ』多賀城関連遺跡調査報告書第25冊	平成12年3月	『多賀城跡—発掘のあゆみ2020—』	令和 2年3月
『隼生跡Ⅶ』多賀城関連遺跡調査報告書第26冊	平成13年3月		
『隼生跡Ⅷ』多賀城関連遺跡調査報告書第27冊	平成14年3月		
『隼生跡Ⅷ』多賀城関連遺跡調査報告書第28冊	平成15年3月	⑤整備基本計画など	平成28年3月
『隼生跡Ⅷ』多賀城関連遺跡調査報告書第29冊	平成16年3月	『特別史跡多賀城跡整備基本計画』	
『木戸宮跡群Ⅰ』多賀城関連遺跡調査報告書第30冊	平成17年3月	『多賀城跡調査研究所沿革史』	令和 2年3月
『木戸宮跡群Ⅱ』多賀城関連遺跡調査報告書第31冊	平成18年3月		
『木戸宮跡群Ⅲ』多賀城関連遺跡調査報告書第32冊	平成19年3月		
『六月坂遺跡ほか』多賀城関連遺跡調査報告書第33冊	平成20年3月		
『日の出山宮跡群Ⅰ』多賀城関連遺跡調査報告書第34冊	平成21年3月		
『日の出山宮跡群Ⅱ』多賀城関連遺跡調査報告書第35冊	平成22年3月		
『日の出山宮跡群Ⅲ』多賀城関連遺跡調査報告書第36冊	平成23年3月		

報告書抄録

ふりがな	みやぎけんたがじょうあとちょううさけんきゅうしよねんぼう 2019 たがじょうあと							
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2019 多賀城跡							
副書名	多賀城跡—第93次調査—							
巻次	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2019							
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報							
シリーズ番号	2019							
編著者名	白崎恵介・村上裕次・高橋 透・下山貴生							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1丁目22-1 TEL 022-368-0102 FAX 022-368-0104							
発行年月日	20200625							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
特別史跡 たがじょうあと 多賀城跡 附寺跡	みやぎけんたがじょうし 宮城県多賀城市 いちかわ うきしま 市川・浮島	04209	004	38 ° 18 ′ 24 ″	140 ° 59 ′ 18 ″	2019年5月22日 }	300 m ²	調査計画 に基づく 学術調査
				世界測地系準拠 (GRS80)		2020年3月27日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
特別史跡 多賀城跡 附寺跡	国府・城柵	奈良平安	門 築地塀 材木塀 整地層 切り通し状 遺構 土坑 溝	土師器・須恵器・灰釉陶器、中世陶器、 近世陶器、軒丸・軒平瓦・丸・平瓦、転 用砥、鉄製品、鉄滓、石器			第Ⅲ期以降の門と築地 塀、材木塀を検出	
要約	<p>外郭西辺における区画施設の変遷と各時期の構造を確認すること、区画施設に伴う遺構を把握することを目的に本調査を行った。その結果、以下の成果を得た。</p> <p>①A～G期の遺構の変遷を確認した。A期は第Ⅱ期以前の可能性がある整地層、B期は第Ⅲ期の外郭区画施設である材木塀とそれに伴う整地層、C期は第Ⅲ期の掘立式八脚門と整地層、外郭区画施設である築地塀、D期は第Ⅲ～Ⅳ期の切り通し状遺構、E・F期は第Ⅳ期の礎石式八脚門と築地塀、G期は古代以降の溝である。</p> <p>②外郭区画施設については、第Ⅱ期に遡る遺構を確認することは出来なかったが、第Ⅲ期の材木塀と第Ⅲ～Ⅳ期の築地塀を検出した。また、第Ⅲ～Ⅳ期に外郭西辺の築地塀を切り通す遺構を検出した。その特殊性から貞観11(869)年の陸奥国大地震による城内の復旧・復興作業に関わる通路と推定した。</p> <p>③区画施設に伴う遺構については、新たに外郭西北門を発見した。門は八脚門で、2時期の変遷があり、掘立式から礎石式に建て替えられている。掘立式八脚門は第Ⅲ期で、多賀城跡でこれまでに確認されている八脚門の中で最も規模が小さい。礎石式八脚門は第Ⅳ期で、同時期の外郭各門と同規模と推定される。これにより、第Ⅲ期以降の多賀城の外郭西辺には、西門と西北門の南北2箇所に門が設置されていたことが判明した。</p>							



第 93 次調査出土 軒丸瓦・軒平瓦

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2019

多賀城跡

令和2年6月25日 発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市高崎一丁目22-1
T E L (022) 368-0102
F A X (022) 368-0104
印刷所 株式会社 イメージパーク
